

正しい恋はどこだ？

嵯峨野広秋

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とにかく彼女がほしい、高校二年生の小波久正（こはくしよ
う）。

彼は容姿（だけ）は100点満点だが、そのほかが0点だった。
外見に中身がともなっていないことを見抜かれ、告白は成功して
も、あつというまにフラれてしまう日々。

あるとき、幼なじみでもあり、親同士の結婚によつて「妹」になる
予定の、

伊良部 勇（いらぶ ゆう）のパソコンを借りる。

そこで見つけたものは――

※小説家になろうにも掲載。

目 次

新たな恋を	1
再告白の前ぶれ	1
たとえ痛い思いをしても	1
あいつはノーガード	1
忘れものをとりに	1
見たくないの向こうがわ	1
ハートはハダカになりたがる	1
妹と妹	1
言う?	1
わかれる予定	1
考えるよりも、はやく	1
二言をきけば	1
乙女は瞳をそらさない	1
13回目の夜	1
きっと欲しがる	1
果報は寝てまつて	1
彼氏の気分	1
背中の駆け引き	1
合図をキミに	1
ホットが恋	1
目と目と、目	1
運命は同時進行で	1
2度ある告白は3度ある	1
彼と彼女の宣戦布告	1
164 156 149 141 132 124 118 110 101 94 88 80 73 66 59 52 45 39 32 26 19 12 6 1	1

「どうしてここに？」は、おたがいさま

ゴールデン・バッド

揺れ

最後のインビテーション

12月24日

そして、正しくなれる

明日は雨らしいぞ、と言われたときのような「へえ」。
おれがなれるように、こいつもなれている。

なんせ、今回で13回目だからな。

「こりんのう」

と、勇は年寄りみたいな口調で言う。

ケースに入れていないラケットを、つえのようについた。

「三つ向こうの駅の女子高のコだつけ？」

「そうだ」ぐつ、とおれはボディビルダーみたいなポーズをとつた。

「まだ彼女とはデートもしてない。やるせないよ」

「いつ？」

「数秒前」

あきれた、という感じで勇が真上を見上げた。

「私はね、正^{しょう}」

あいづちもうたず、おれはべつのポーズをとる。うん。カンペキな
見た目だ。このまま石膏^{セツコウ}でかためてくれたら、きっとルーブル美術館
に置かれても違和感あるまい。

「失恋したらキズついて、ちゃーんと落ち込む人間でいたいよ。正み
たいになりたくない」

ガン!! と鈍器でぶつたたかれたような気がした。

たしかに……それは、そのとおりだ。

おれはポーズをやめて、幼なじみの勇に向きなおった。

「おまえはさ……彼氏とその……うまくいってるのかよ」

待つてました、とばかりに「おかげさまで」と明るく言つた。

勇……この小憎^{こにく}らしい女子は、幼なじみの伊良部勇。

ショートカットで活発っていう、小・中・高、必ずクラスに一人い
るようなタイプ。

「で、次はどうするの？ わたしにチャレンジしてみるか？」

びつ、と勇はあごに人差し指の先をあてる。

「おれは彼氏もちだけにはコクらないんだよ。それだけは、絶対的な
ルールだ」

「あ、そ」

「なあ……おれ、どうしたらいいと思う？ 助けてくれよ、幼なじみとして」

「——って言われてもねえ。なまじアンタは容姿がよすぎるから、減点法でキラわれてるだけじゃない？」

「減点？」

「アンタ、中身がスッカスカじやん」

「ガン!!! と心に衝撃。

「勉強ダメ。運動ダメ。オンチ。絵がヘタ。自転車のれない。キャラの名前とかおぼえられないからドラマやマンガの話ができない。私服がださい」

「勇」

「えーと、あとゲームもヘタでしょ。ボウリングも。それと時間にルーズで、遅刻もおおくて……」

「勇！」

真ん丸なネコみたいな目をほそめて、口に手をあて「ししし」と笑うそぶり。

おれはつい大声になつた。

「言いすぎだろ。親しき中にも礼儀ありだ」

「親しき〈仲〉ね。真ん中の〈中〉じやないゾ」

う……。

なんでこいつ、おれの頭の中の字まで読めるんだよ。

カンがいいというか、なんというか。

おそるべき幼なじみだ。

そして、まさかこいつが——妹——になろうとしてるなんてな……。



「ただいまー」

と勇と同時に口にした。

おれたちの帰る家は同じだ。住宅地にあるふつうの一軒家。

来年の春、おれの父親と、勇の母親が、籍をいれる予定で、このようにもう共同生活は開始している。

(あー、彼女がほしい！)

おれはベッドにねころんだ。

(彼女だ彼女！　おたがいをわかりあえるパートナー。……エッチなことは、とりあえず高校卒業するまではガマンするから)

ガマンできる自信はある。

なぜつて、おれはつきあつた12人の女の子と、手さえつないでいるんだから。

つなげていない、というべきか、

つなごうとする前の段階で、ソッコーで全員にフラれているから。

(おれ……もしかしたら、なんかの病気なんじやないか？　異性にめちゃ嫌われるフェロモンがでてるとか)

気になってきた。すごく不安だ。

ネットで調べたいな。

しかし、ウチはスマホを帰宅と同時に両親にあずけるシステム。したがつて今、手元にない。

パソコンもない。

家に回線はある。

安いノートぐらいなら買えるけど、「ろくな使い方しない」と、父親に持たせてもらえないんだ。

勇は持つてるのに。

差別だ。男女差別。

「ろくな使い方をしない」つていうのは、きっと父さんがそんな使い方をしたからだと思っている。

とどとん

と、この足音のリズム。

勇が階段をおりる音だ。

時間帯からして、その目的は入浴。

(かりるか)

おれはためらわず、あいつの部屋を目指した。といつても、すぐと

(すっかり女子の部屋になつたな)

一年前は、ただの物置き部屋だつたのに。

黄色をベースにした、なんともかわいらしい空間。

中央にあるひくいテーブルの上に、目的のブツがある。さいわい、起動中でロツクもされていない。

画面はユーチューブのトップページ。サムネがならんでいる。
長居無用。

すかさず、検索して用をすませることにする。

(えーと、「嫌われる」「フェロモン」……)

と、調べたところで、おれは地頭じあくとうがよくないから、あまりスッ迫不及ない。

オツサンの加齢臭みたいなものを女の子はイヤがるらしい、つていうのはわかつた。

おれ……加齢臭ある？ 17才で？

くんくん、とかいでみるが、無臭だとしか思えない。

はあ……やつぱり、原因はフェロモンとかじやないか……。

ついでに、おれは「つ」と入力した。

つらいときに元気が出る何か、みたいなことを調べようとしたんだ。

おれは、フリーズした。

文字を入れると、だいたい、スマホやパソコンつておせつかいになる。

「あ」→「ありがとう」とか、「り」→「了解」とかが、勝手に出てくるんだ。

(これ……勇がつかつてるパソコンだよな？)

検索ワードを入れるスペースで、「つ」から先回りして出された言葉。

たぶんこれつて——あいつが以前に検索したことのある言葉。

連れ子同士——結婚できる？

再告白の前ぶれ

画面を見つめたまま、どれだけ時間が経つたかわからない。

おれの出来できのよくない頭を占めているワードは「連れ子」と「結婚」。ツレゴつてアレだよな、一回結婚して、離婚した人がツれてる子どものことだよな？

つまり「おれ」と、幼なじみで男勝りな女子の「勇」のことだ。

それが「結婚」だつて？

勇のやつ……パソコンでなんでそんなこと調べてんだ？

そこでいきなり、

がちや

とドアがあいた。

心臓が、のどからとびでるかと思つた。

まさか勇!!

あいつって、早風呂はやだつたつけ？

「！」

「あれ？ 正ちゃん？」

抱くように洗濯物をもつた、勇のお母さん——おれのお母さんになる予定もある——が部屋に入ってきた。

お、お、おちつけ。

キヤツカン的には、おれはただパソコンをさわつているだけだ。下着を漁つたりだの、ベッドをくんかくんかだのをやつていたわけじゃない。

「パソコンなんて、めずらしいね。なになに」お母さんの目が細くなる。この目。ネコのように愛嬌があつて、大きさも形も、ほんとに勇そつくりだ。「えつちな動画とか見てたクチ～？」

それだ！

そういうことにしたら、おれがヘンな検索履歴をみつけてしまったことが、ばれないぞ！
いけつ！

「そうなんですよ……はは……」

アリバイづくりで、おれはエロい動画がめっちゃあるページにとんだ。

とんだけなのに。

いつたいどういう神様のイタズラが、発動してしまったんだろう。

「……ん……んつ、……」ら、ダメだつてば」

「母さん!!」

大音量で何かの動画の再生がはじまつた。

画面では、もうどうしようもないくらい〈からみ〉まくつている。

「あん」

「き、きもちいい?」

「ナマイキね。つ……、うつ、つ、連れ子のくせに……」

洗濯物を床にぼろりと落とし、勇のお母さんの足が後ろに退ひいた。



翌日は日曜日。

おれは病院のロビーにいた。

「すこし、話をしようや」

目の前にはシブいオジサン。ただのオジサンじゃなくて、家族のオジサン。おれの父さんのお兄さん。

「すいぶん寒くなつたなあ……」

ガラス張りの向こうの中庭をみながら言う。

すこし雪がふっている。

もう12月。クリスマスも近い。あと、あんまり考えたくないが、
来週には期末テストがある。

「正^{しょう}」

ひげを生やした顔に、刑事のようなロングコート。

身長はおれと同じぐらい。

この人が、ほんとまじでシブい。映画俳優みたいに。

近くをとおつた人が、撮影? とつぶやいて、カメラをさがすようにきょろきょろしている。

確かにあれとオジサンのツーショットは、やばいぐらい^え画がきまつている。

「ばあちゃんのことだがな……」

リアルな話題で、急に現実にもどされた。

今、ここに入院している、おれのばあちゃん。おれの父さんのお母さん。

まだ60とかだとと思うけど、病弱で、おれが小学生のときからばあちゃんは入退院をくり返していた。

オジサンはいう。

今回は、覚悟しといてくれ、と。

「そんな……」

目の前がまづくらになつた。

あの……やさしい、ばあちゃんが？

甘やかしすぎだつて父さんから注意されるぐらい、おれをたくさん甘やかしてくれたばあちゃんが？

「年末までには退院できるつて……」

「できるさ。なにも、問題がなければな」

「そんなにわるかつたんですね？」

「そんな気はしなかつたか？」

「いえ——」

今年の夏から秋にかけて、ばあちゃんは急にやせた。

だから、だからおれは「急がないといけない」とつて思つたんだ。
ばあちゃんを、安心させたい。

それには恋。

想い想われの恋人を紹介することで、それができると信じてる。
プラス、ぜひ未来のパートナーに、ばあちゃんに会つてもらいたい
んだ。おれつていう人間を、つくつてくれた大事な家族に。
おれはバカだから、まちがつているかもしねりない。
そんなことしなくていいのかもしれない。
でも……

「正くん。うわー、相変わらず、あんたは『イケメンさん』やねえ」
「だろ？」

ばあちゃんのベッドの横で、かつこよくポーズをきめる。

オジサンはロビーに残つてゐる。

今は先生も看護師さんもいない。

部屋には、おれとばあちゃんの二人きりだ。
ばあちゃんはうすいブルーの、浴衣みたいな形の服をきてゐる。

「これならモテモテよね?」

「まあね」

「だつたら――」

ばあちゃんは、ちよつとかされた声で、こう言つた。

「正くんの彼女に、^{ひとめ}一目、会いたいなあ……」

不覚にも泣きそうになつた。

バカ。おれが泣いてどうする。

元気づけるために、ここにきたんだろ。

「ああ!　いいぜ!　今度……つれてくるよ。絶対。今度な。だか
ら、さ」

ばあちゃんは、うなずいた。

そのゆつくりした動きと、ほほえんだ顔だけで、コトバはいらなかつた。

「いつまでも待つてるわ」という気持ちが、はつきり伝わってきた。

その後、先生たちが入つてきて何かやりはじめたので、邪魔になつたおれは部屋を出た。

「勇」

「あつ」

病院の廊下で、向こうから來たあいつと出くわした。

伊良部勇。

昔から家族ぐみのつきあいをしてて、とうとう家族になることになつた幼なじみ。

「ばあちゃん、今なんか検査みたいなのしてゐるから」

「そう。じゃ、あとにしようかな」

一階に移動し、自販機の横にある休憩スペースにきた。

「なんか飲むか?」

「いい」

おれは缶コーヒーを買った。

「急いでよ……14人目」

「わかつてるさ」

「わたしでもいいんだよ?」

「冗談はやめろ。おまえにはとつぐに彼氏がいるだろ」

コーヒーは、想像よりもだいぶ甘かった。

おれはポエムみたいなことを考える。

おれは「正しい恋」をさがしてる。

一方通行じゃなく、どつち通行でもある、つよい恋心。それによつて、おたがいが満たされた関係。

好き+好き、つて状態のことだ。

それをさがして、13人の女子に告白に告白を重ねたんだが、おれの中身に魅力がまつたくないせいで、どれもうまくいつてない。（時間がない、か……）

ふつ、とかすかなため息をつく勇。

シックなモノトーンのアウターに、あまり色落ちしてないデニムパンツ。

おれほどじやないが、こいつも、まあまあ……きれいな横顔のラインしてやがるな。あごや首回りに、ムダなぜい肉がついてなくて。体も、出るトコは出て……ガサツな性格のわりに女の子してるつていうか――

連れ子同士――結婚できる?

昨晩のあの画面がフラッショւした。

連れ子同士――結婚できる?

連れ子同士――結婚できる?

連れ子同士――結婚できる?

「ええ――い！」

ばっさばっさと、頭のまわりを両手ではらう。

「……どしたん?」

「気にするな。ただの発作だ」

ちょうど近くをとおつた白衣の人^{ほつさ}が、えつ、という顔でこっちを見

た。

ちがうんです、とおれはへらへらしてあやまる。

「おバカ。病院で、まぎらわしいこと言わないの！」

「はは……」

(まつたく調子がくるうぜ。あんなものを見ちまつたから)
スマホがぶるつた。

この名前。

最初に告白した子だ。

ラインでみじかいメッセージ。

わたしと、よりもどさない？

たとえ痛い思いをしても

おれの告白には歴史がある。

最初の告白は一年前の夏。

「つきあう？」

半疑問形の、ちょいズルい感じのラインだった。

そもそもの出会いは、おれの悪友あくゆうがセッティングしたコンパ。あきらかに〈好き〉って感じの態度をみせてて、おれのほうもわるくないなと思って、んで告白っていうものは男からするものだと思つてたから、その夜にラインでコクつたんだ。

結果成功。

そして一週間後にフラれる。

いま「よりもどそう」ってメッセージしてきたのは、そんな女の子だ。

「ユウカつて誰よ？」

ひとつ、と肩から二の腕に体をくつつけて、おれのスマホをのぞきこんでくる。

「本気がね～？」しよう正とよりもどを～？ 正気じゃないね

さらに、画面の中に入ろうとするかのことく、頭をぐーっとのばす。ショートカットのアホ毛の部分がおれの鼻先をくすぐつた。

プライバシーもマナーもおかまいなしに、指を下にすべらせて履歴までがつづりチェック。

ねえ、と首を回して勇ゆうの目が向く。

「一年以上も音沙汰おとさたなくて、いきなりこれ。意味わかる？」

「なにが？」

「ふつうにワナだよ。まー、ワナつていうか……ただ誰かをキープしたいだけの女。クリスマスも近いし。正つて見た目だけはいいし」

「なんで『だけ』のトコだけ微妙にボリューム上げるんだよ」

見た目だけはね、とまた言つた。「だけ」をやけに強調して。

勇が体をはなして、おれのスマホを指さす。

「会わぬが吉きわとみたゞ。おとなしく勇お姉ちゃんの意見をききなさ

い

「おまえ、妹だろ」

「精神年齢じゃ上」

「おれは彼女を信じる。いつだって、女の子を疑うつてのは最後の最終手段だ」

「それじゃバカを見るだけだつて。いい？　この件はスルーすべし！」

おけ？」

おれは勇の後ろ姿を見送つた。

おけ

と、おれはユウカに返信した。

◆

幼なじみの勇はワナだと言う。

たしかに、この恋は〈正しくない〉のかもしれない。

「おつはよー」

こみあう駅の出口で、彼女が片手をあげた。

おはよう、とおれもさわやかに返事する。

登校デート。

彼女はいきなり、おれと腕を組んだ。

ハタからみたら立派なリア充カツプルの誕生だ。

「じつとしてて」

と、おもむろにマフラーをこつちに伸ばす。赤いチエツク模様のマフラー。

「よし、できた。いい感じ」

おたがいの首と首をマフラーでつなぐスタイル。

リア充オブリア充。

よりもどす、つてすげーな。

こんな急接近する？

おれがこの子にコクつて、フランれるまでのみじかい期間ですら、こんなに親密じやなかつたぞ……。

「どうしたの？」

うつ。

さつそく顔色にでちまつたか。我ながらウソのつけない男だ。

「な、なんでもないよ」とおれはとぼける。「今日も寒いね」

「そうだね」

「冬つて寒いよね」

「……」

ひさしぶりのこの感覚。

実際に口に出されてはいないのに、つまんない、っていうのがアリ

アリの空気。

そう。

はつきり言つて、おれは話し下手べたなんだ。

会話で女の子を楽しませたことなんて一度もない。

わるいことに――

「知つてる? 駅前にスイーツのおいしいお店がオープンしてさあ」

「へー」

「……。あ、あのさ、今日の私の髪型どうかな? サイドを編あみ編あみにしてるでしょ? これ早起きしてがんばったんだよねー」

「早起きしたんだ」

そつちじやねえよ、つて表情になつた。

それは読み取れる。

でもリアルタイムの会話でうまく〈読む〉ことができない。おもしろい話の流れや、相手の興味などを。すなわち、

――聞き下手べたでもある。

おれが13回もフラれた原因は、まちがいなくこれだろう。

沈黙が金、とばかりに彼女は静かになつてしまつた。

記念すべき一回目の告白を受けてくれた彼女。

朝比夕夏。あさひゆうか

先生のチエツクにひつかからない程度に、すこしだけ髪を赤茶色にしている女の子。

同じ学校の同じ学年で、クラスはとなり。

(ん? やけに、まわりを気にしてるな)

きよろきよろと横をみたり後ろをみたり。

まるで、誰かをさがすみたいに。

まあ、いいか。気にしない。

せつかくよりもどつたんだ。

おれは、この朝比さんを相手に、今度こそ正しい恋をつくつてみせよう。

◆

「やつたの？」

そう言つて、せわしない箸さばきで、弁当をパクパクたべる男。
「やつてない」

「んはつ！」口から米つぶが飛び、おれの机についた。「ちよつ。わらわせんなよショー！」いつものように、歯の間からジエット気流のように空気をはきだして「ショー」と発音する。

昼メシの時間。

おれは食べもののにおいの満ちる教室で、友だちと弁当を食つている。

「じゃ、あのラブラブはなによく？　おかしーだろつて」

「おかしいか？」

「やつたべ」

やつてない、とまた言つた。

「欲望のかたまりだな」

と、これはおれのセリフじやない。しゃべつたのは紺野^{こんの}で、一つ前のは児玉^{こだま}。

わかりやすく、紺野は優等生タイプで、児玉は不良タイプ。ただし

ガチじやないマイルドな不良。

「おれもやりたかったんだけどなー。案外、ああみえてガードがかかるんだよなー朝比ちゃんつて」

「やめろ」

「もー、おこんなよーコンちゃくん」箸をもつたまま、となりに座る紺野と肩をくむ。「おれはショーを祝福してるだ・け・さ」

「それと『やつた』となんの関係がある」

「男女の仲をもつとも深める行為がそれだからじやんよ」と、紺野の

ほっぺを人差し指でおした。「まつ、やつてないとしたって、親友が女子の子とラバーになれたんだ。これが祝福せずにいられるか！」

ちかくの女子たちから冷たい視線を感じる……。

おれは児玉をなだめ、べつの話題にかえた。

明日から期末だな、と切り出したら、いとも簡単にそつちの話になる。

その日は下校のときも彼女といつしよで、またマフラーを恋人みたくつないだ。

(地獄だな)

テストの出来が

留年しないように、なんとしても赤点だけは避けたいところだ。

火曜日の今日から金曜日まで地獄はつづく。

……がんばるしかない。

「友達と予定入れちゃった！ いつしょに帰れなくてゴメンね」と、さつきラインがきた。冷や汗の顔と、両手を合わせた絵文字つき。

ふつ。今までのおれなら、おとなしくあきらめていただろうが……（よし！ ひげよし！ 鼻毛よし！ 眉毛よし！）

男子トイレの鏡の前で指さし確認する。

本日も、ぶつちぎりでおれはかつこいい。

(もう、のんびりできないからな)

強引にいくぞ。

「友だちより、おれとつきあえよ」——これだ。

校門をすこし出たところで、一時間ちかく待つた。

学校の出口はほかにあるけど、昨日もここだつたから、きつとこを通るはず。

(あ。朝比さん？)

小さな姿がみえる。

一人きりだ。すこしうしろを見たが、誰も彼女についてきていない。

(友だちより、おれと——ちゃんと顔もキメてい。

シミュレーションしながら、おれは彼女のほうへ歩いていく。と、

校門前に、一台の車がとまつた。

赤いスポーツカー。かつこいいデザイン。

車は右向きで、ハンドルが奥の席……つてことは左ハンドルか。邪魔だな。

思いつきり、校門前の通行をさえぎるようにとめている。マナーわりいなあ。

あれじや彼女をとおせんぼして通れないぞ。

(あつ)

なんか話してる。楽しそうに。

そして小走りで車のうしろを回り、助手席のほう、つまりこつちにくる。

「あつ」

おれに気づいた。

彼女はひくく頭をさげて、運転席に向かつてへちよつと待つてのジエスチャーをする。

「あ、あれって……」

につこり、彼女は笑った。

CGみたいな笑顔にみえた。

なぜか背筋がゾツとした。

「あれ？　お兄ちゃんだよ」

「え？　ああ……そうなんだ」

「まじまじ。じゃ、いそぐから」

自動的に体がうごいた。

おれは彼女の手を、つかんでいた。

「信じていいのか？」

「…………」長めの無言のあと「…………うざいなあ」

ばつ、と手をふりほどかれた。

その手を赤い車に向ける。

「あれ彼氏。なんか文句ある？」

「いや文句とかじやなくて……」

長い髪を耳にかきあげる。不満そうな顔で。「クラスにストーカーっぽいのがいてさー、しつつこいんだよねー。正クンとつきあつてるのアピールしたら、そいつもあきらめるかなって思つただけ。それだけよ。いいじやん。正クンも、そつちのがカツコつくでしょ？ そんだけイケメンで彼女いないと、やばいやつかと思われるよ？」

「おれは……」

「ね？ もうちょっとだけ恋人の演技して？」まつすぐおれの目をみつめて言つた。「私もガマンするから」

そのときおれの左で、黒い影がうごいた。

イノシシのように朝比さんに突進していく。

距離をつめ、その影は右手を斜め上に高々とあげた。
あきらかにビンタのモーション。

「ふざけんなっ!!」

「やめろ！ 勇！」

おれはダイブするように、いや実際にダイブして、二人のあいだに割り込んだ。

ばつちーん

火花のちる景色。

ななめに流れる青空。

おどろき顔の朝比さんとしまつた顔の勇がどつちもみえる視界。

おれは、バドミントン部のエースのスマッシュがききまくつた平手打ちをうけて、地面にダウンした。

うすれゆく——いや、それほどでもないが——意識で考へてゐることは一つ。

正しい恋はどこだ？

あいつはノーガード

ばたん、ぶーん、という音が頭のうしろで聞こえた。

頭の斜め上では、勇がかみつく前のネコみたいな顔で遠くをにらんでる。

「おちつけよ」

おれは地面にあぐらをかいたままで言った。

「ナイスビンタ。脳がシビれたぞ……いてて……。しかし仕上がりつてんなー、おまえの体」

「…………エッチな意味？」

なんでだよ、とおれは立ち上がる。

おれは177。幼なじみのこいつは157。その差はぴつたり20センチ。

「ぶたれたのがおれでよかつたよ。朝比さんにこんなハードなやつ、絶対にダメだ」

「あさひ……、あっ」

何かを思い出したように、えんりょもなくおれの制服に手をつつこむ。

くすぐつたい。

その動きがとまつたかと思うと、

「ロック解除。ほら急いで！」

スマホを警察手帳みたいにおれにつきつけて、そう言う。わけもわからず、おとなしくそうする。

「えーと、あさひあさひ……」

「なにやつてんだ？」おれは画面をのぞきこむ。

「削除とブロック！ あつたりまえでしょ！」

「そこまでしなくとも……べつに彼女、わるいことしたわけじゃ……」
正しよう、とおれの名前を言いながらこっちに向く。

顔はマジ。

「しつこく言い寄る男子をおっぱらうためだけに『よりもどそう』とかいつて、実際はクルマ持ちの本命彼氏がいて、あまつさえ『私もガ

マンするから』とかぬかしやがったんだよ?」

「……」

「友だちとして、ガマンできなかつた。つい……カーッつて熱くなつたのよ」

「だからって暴力はダメだろ」

「そこは同意する」スマホから片手をはなして、びゅん、と風を切つてビンタのようにふる。「あれ、まじで当てると思つてた?」

「え?」

「す・ん・ど」その手が上に伸びて、おれのひたいを人差し指で押した。「めつ! だつたんだから」

「説得力ねーよ。完全にフルスイングだつたじゃん」

「はい。返す」

手渡されたスマホをながめる。

もう、ここには彼女のデータはない。たぶん。

「正。肩が落ちてる。ほら、ちゃんと胸はつて。イケメンが台無しだゾ?」

「お、おう……」

「あんな子のことは忘れて、新しい恋をさがす。おけ?」

スマホの真っ黒なスクリーン。

そこに映るおれの顔。

自信がよみがえってきた。ナルシストでけつこう。

「やつぱり、カツコいいぜ……ホレボレするよ」

「よしよし。正はそれでいいの。ねつ?」

すこし首をかしげて、すこし笑つた顔でいう。

パシヤツ——と心のシャツター音が鳴つた。

また、幼なじみの思い出の一枚が追加されたみたいだ。

ショートカットの前髪が風になびいている。

「ところで勇、おまえ何してたんだ? めつちやタイミングよく出てきたけど」

ひく、と笑つたままでくちびるの端っこがひくついた。

「え? えーとねー、正の姿みかけたからスペイしてやろうと思つて

……

「いつから?」

「いつからでもいいじゃん」ふう、とほっぺがふくらむ。

「彼氏は?」

「あいつは自転車通学だよ。知らなかつた?」

「でもたまに、駅までいつしょに歩いてるだろ?」

「ミョーに詰めてくるねー」

と、勇は歩き出す。

学校から駅までは、だいたい徒歩10分。

「テストできた? って、できるわけないか。正は全教科、まんべんなく不得意だもんね」

「勇」

おれは立ち止まった。

「……なに?」

おれは真剣にみつめた。
まちがいない。これは。

「じつとしてろ」

「えつ」

ウワサではきいたことある。

でも実際に目にしたのは、はじめてだ。

「そのまま……」

「ちよつ。肩つかむなつ!」

おれは勇のキャシャ——運動部のエースにしては——な肩をもつ手に力をこめる。

「こんなところに、いたんだ」

「アンタねえ……」

「おれ。ずっとさがしてたんだよ」

「……」

えつ。

どうしてかわからないが、いきなり勇が目をつむった。
気持ち、あごをあげて。

「いいのか？」

ん、とかすかな息の音。

「ほんとにいいのか？」

「しつこい」と、ささやくような小声で言う。「いいから……正だつたら……」

「おでこにテントウムシとまつてるんだぞ？」

ひいっ!? と表情だけで悲鳴をあげた。

「どつて！ バカ！ はやく言えっ！」

「はいはい」

手をうちわのようにして、テントウムシに風を流すと、そいつはすぐ飛んでいった。

珍しかつたなあ、冬場のテントウムシ。子供のころに読んだ図鑑に『成虫のまま冬を越す』つて書いてだから、いつぺん見てみたかつたんだよ。

「もういつたぞ」

「もー」何度もおでこをさわりながら、うらめしそうな目を向ける。

「バカ……」

◆
その帰り道、勇は話しかけても口をきいてくれなかつた。

やつと期末テストが終わつた。
今、カラオケボックスにいる。

「災難だつたな」

友だちの紺野こんのと、

「女つてこえーよなー」

児玉こだま。

二人とも、おれが朝比さんとエンを切つたことを知つてゐる。
その反省会というか残念会というか、今日のカラオケはそんな感じだ。

「女つてよお……」

と、児玉がコースターがくつついたグラスをあげる。中はウーロン茶。

「あーあ。カラんなつちつた！」

「飲み放題だからってどんだけ飲むんだよ」

「うるせーなあ！ だからおめーは女にナメられんだよ、正」インター
ホンをとり、「あー、ウーロン茶。ソッコーで」がっちゃん、と大きな
音をたてて受話器をおく。

「おいカズ」と、紺野が見かねていう。「態度がわるいぞ。店員さんに
失礼だろ」

知らねーし、とどかつとソファに座った。

店員さんがきた。

ウーロン茶をおいて、空のグラスをとつて部屋をでていく。

「ういー」

「までカズ」紺野が制止する。「正。ちょっと味見してくれ」

「えつ？」

「なんか、おかしい気がしてたんだ」

グラスの中を一口のんだ。

味は……ふつうのウーロン茶……か？

「いいか？」紺野がおれからグラスをとる。「あつ！ やっぱりだ！
これ酒はいつてるぞ！」

ういー、と顔を赤くした児玉が返事ともつかない声をだす。
「ちょっと文句いつてくる。……ただのミスとは思えねーな。こいつ
の態度がわるかつたから、たぶんわざとだ」

紺野がおこつた顔で出ていった。

おれは部屋に残り、児玉のとなりに座る。

「……ふーつ」

なるほど、よくみるとちょっと顔が赤くて、息もへんにおいだ。

「大丈夫か」

「おーつ！」と、こぶしを突き上げる。

室内は、誰かの曲が流れていた。女の人の、しつとりした曲。

「つれーよなー、正。おれ知つてんぜ？ おまえがフラれつぱなコト
……」

「つらくないよ。それに、フラれるのは全部、おれのせいなんだから」

「ちげー」兎玉は片手で自分の顔をおさえて、首をふる。「ちげーち
げー」

おれの悪友、兎玉和馬。かずま

前髪をツンツンさせた短髪で、黒くてふちの太いメガネをかけてい
るという、ぱつと見ではスポーツマンなのか勉強できるヤツなのかわ
かりにくい男。

モテる。

おれが知ってるかぎり、こいつの彼女が途切れたことは一日もな
い。

すなわち、一人と長くつきあうスタイルじゃないってことだ。

「正はなーんも、わるくねー」

「おい」

「なーんも、これつつぽっちも」

「おいつて」

「はあ、たくましい胸板むないただぜー」

しゃべりながら制服の上着をぬがしてきて、おれの胸にほっぺをこ
すりつける。

なんだこれは？

これが〈酒グセがわるい〉ってやつなのか？

「おれ、もしかしたら、正のこと……好きかもな。くだらぬー女なんか
よりも」

ぴたつ、と室内のBGMが停止した。

「くだらぬないだろ。おまえの彼女が聞いたら悲しむぞ」

「正！」

トビウオみたく、クチをつきだしたあいつが、体ごとおれに飛びか
かってきた。

なんて情熱的なんだ。

とっさにスマホでガード。

デジヤブ、つてコトバだつけ。

前もこんなことがあつた。

朝比さんの次に告白した女子。あの子もカラオケボックスで、こん

なふうに熱烈にアタックしてきたんだ。

あのとき、もしガードなんかしなければ……

「んなことされたら、キズつくだろお〜、正〜」

彼女をキズつけて、フラされることもなかつたのかかもしれない。でも、体が勝手にうごいたんだ。あのときも今も。

児玉はともかく、あの子のことは嫌いじやなかつたのに。ふと、幼なじみの勇を思い出した。

「あれ

思わず声がでた。

児玉はおれの膝をまくらにして、寝てる。

「あれっ？」

もう一回イメージして、もう一回つぶやいた。

何度もイメージしても、結果は同じ。

部屋にはノリのいいロツクが流れている。

(あれ……?)

勇がいきおいよく体ごと向かってくるのに、想像上のおれは、ちつともガードしようとしない。

忘れものをとりに

けつこうヤバかったかもな。

まちがえて出されたとはいえ、高校生なのに飲酒してたんだから。結局、お店の人が本当にまちがえたのか、わざとだつたのかはグレー。

「うげー。きもちわりー。いま帰宅」

児玉こだまからラインがきた。

ちようど六時で、こつちもちようど家についたばかりだ。五時ごろまで、おれたちは公園のベンチにすわって児玉の酔いをさますのにつきあつていたからな。

コンコン

ドアがノックされた。

「正ちゃん。お食事の用意ができるるわよ」「……」

「もしかして、一人でいかがわしいことしてるのカナ？　あら～若いわねえ～」

おい、と学習机の椅子にすわったまま言うと、ドアを開けて入ってきた。

幼なじみで妹の勇ゆう。

白Tに黒いショートパンツという夏場みたいなかっこう。

こいつは、冬でもこんな感じだ。部屋をカンカンに暑くして薄着するタイプ。

「似てないんだよ。おまえの、お母さんのモノマネは」

「正ちゃん」

「だから似てないつて……」

「コダマのヤツは大丈夫だつたの？」と、みじかい髪を耳にかきあげる。

「ああ。帰宅したつてラインがあつた。でも……おまえ、ほんとに児玉には当たりが強いよな」

あいつは女子の敵つ！　と、ベッドのふちに腰をおろす。

黒いショートパンツからのびる足はツルツルで、いかにも女子の足だ。

「めつめつちや評判わるいんだよ？ 女の子を泣かせまくつてるとて。一時期は五股ごまたもしてたつていうし。まあ……正の友だちでもあるから、あんまりひどいことはいえないけど。まじで、学校一のヤリチ…………」

「ヤリチン？」

「もう！ ヘンなこと言わせるなよっ！」

三文字目まで自分で言つといて、それはないだろ。

氣むずかしいヤツだ。

こいつの彼氏も、きっと、こんなところに手を焼いているんだろうな。

「なあ勇」

ん？ と、おれを見る。ちょうど照明のかげんで、瞳がキラキラ光つてみえた。

「兎玉は、いいヤツだぜ？ そりやあ女グセはわるいかもしけねーけど……フツたりフタれたりは半々だつていうし、とくに女に冷たいようにも見えない。それに、ウワサつてやつは盛られるもんだからさ、おおかたフられた側の女の子がわるい評判を立ててるんじやねーの？」

「う……正にしては、いつになく冷静な意見じゃん」

「悪友あくゆうとはいえ友だちだからな」

「こんだけ友だち思いで——以下省略」

「省略すんな。——どうして女にフタれまくつてるのか、って言いたいんだろう？」

おれは椅子から立つて、勇のとなりにすわった。

ぎしきしつ、とベッドがきしむ音がした。

「ちよつといいか。マジメな話をしても」

「へつ？ 今ので怒おこつた？」

「ちがう。べつの話だ」

「ええ……なんだろ……、あ、テントウムシの件なら、もう気にしてな

いよ?」

決めに決めまくったキメ顔で、おれはいう。

「おれの胸に、飛びこんでくれないか?」

「は、はい?」

「ずっとモヤモヤしてるんだよ。頭ん中でおまえが、おれに何度も何度もキスしてきて」

「ちよつちよつ、タイム! わけわかんない」

勇が爆速で立つた。

おれも負けずに立つ。そして両手をひろげる。

「こいよ。ほら。おれ……ちゃんとガードするから。絶対にキスさせない。だつておまえには、ちゃんと彼氏がいるんだもんな」とんできた。

床のクッショング。

鼻の先つちよにあたつて、すこしツーンとする。

勇は何も言わずに部屋を出ていった。

あまりにも説明不足すぎたか……?

大事な確認だつたんだけどな、おれにとつては。

それにして、あいつ、そもそもなんの用があつておれの部屋にきたんだよ。

ふつうの〈妹〉っていうのは、みんなこんな感じで、なんとなく兄貴の部屋に入つてくるもんなのか?



翌日は土曜日。

うちの高校は、しつかり週6で授業がある。

ありがたくない。正直、週休二日にしてほしい。

(……と、今までのおれなら思つていたが)

もうそうじやない。

おれは心をいれかえた。

フランクしたほうが負けつてわけじゃないけど、負けっぱなしってのも芸がないぜ。

まあちやんのこともあるしな。

(努力だ！ 努力！)

おれがフラれつづけた原因が、勇のいうとおり「中身がスッカスカ」だつていうんなら、中身をぎつぎつしり詰めりやいい。

その努力だ。

まずは、期末テストの補習の予習をする。

はやくももどつてきた英語のテストが、いきなり赤点だつたからな……つまり補習確定。

(よし、がんばるぞ！)

四時間目が終わつて放課後になつたあと、おれは図書室にきた。学校ジマンジやないが、めちゃめちゃ豪華で広いところだ。

本がたくさんあり、個別に仕切られた自習用の席が100はある。

「めずらしいな」

背後から声がかかる。

ふりむくより前に、なつかしいにおい。

香水なのか柔軟剤なのかわからないけど、幼稚園のときの女の先生と同じにおい。

なんかこのにおい……*いい*……んだよな。うまくいえないけど。

「小波久。やつと勉強する気になつたか」

うなじで分岐した二本の髪を胸の前に垂らし、その髪が体のふくらみで盛り上がつていて。

スタイル抜群の文学女子。

水緒さん。三年の先輩だ。

おれが5人目につきあつた人。

「小波久」

おれのとなりの空席にすわる。

「私が教えてやろう」

「あ、大丈夫です」

「教科は英語か。なるほど英表だな」

「だいじょ……」

神速。

まさに、カミワザのはやさだった。

「……んつ」

先輩が吐息みたいな音をもらす。図書室っていうのを思わず忘れるぐらいセクシーに。

一瞬でくちびるを奪われた。

他人の目からは、そう見えるだろう。

しかしおれは奇跡的な反射神経で、くちびるを横にずらしていた。つまり先輩があてているのは、おれの口の、数センチ横。

「またどれなかつたか」

至近距離で言う。

水緒先輩の目は、すこしへグリーンが入っている。

「すぐキズついたぞ。まったく……女心がわかつてない男だ」

「すいません」

「あやまるな」

視線をおれから外し、

「だが、彼女には〈してた〉ように見えただろうな。この角度だと——」

「えつ」

横顔を向ける。

その先には、

「勇」

あいつがいた。

「勇！」

なんで逃げるんだよ。

おれは追いかけた。運動神経はあつちのが上だから、なかなか差がつまらない。

「勇つて……はあ、ちょっと、待ってくれ……」

お情けをかけたように、立ち止まってくれた。
こつちに歩いてくる。

「なにしてんの？」

「なにって、はあ、はあ、おまえが逃げるから」

正面玄関ちかくのスペース。そばには身だしなみチェック用の大鏡がある。

はあ、はあ、ふつ、息を切らしておれも、やつぱり、かつこいんな——とかいってる場合じやない。

「忘れ物に気づいただけだよ。私が正から逃げるわけないじゃん」「さつきの、見たか？」

「見てないよ」

「ウソつけよ。見ただろ？」

あれはな、と誤解をとこうとしたとき、

「正も……コダマといっしょだ」

「え」

「女つたらし！」

そう大声で怒鳴ったのとは反対に、勇の顔は笑っていた。

ニッコニコだ。

でもなんか、いつもの笑顔じやない。

「あの人、三年でしょ？　ははっ、やっぱり大人の色氣があるよね〜。私なんかと……ちがつて」

「勇」

「さつ、忘れもの忘れものっ」

楽しそうにつぶやきながら、勇は背中を向けた。

その小さな背中と顔を同時にみてる。

あいつは、ふりかえりもせず行つてしまつた。

顔をちょっと下に向けていたから、気づかなかつたのか？

おれにはぜんぶ、鏡でみえてたんだぞ。

おまえが泣きそだつたのが。

見たくないの向こうがわ

めずらしいことはつづく。

病室のばあちゃんからラインがきた。

つていつても、ばあちゃんはスマホをもつてない。勇のお母さんが

代理でおくるてるみたいだ。

——ばあちゃんは元気ですよ。

——気にしないでね。

すかさず「お見舞いにいくよ」と返したが、「いいから」と返つてくれる。

そのラリーがしばらくあつたあと、勇の話題になつた。

——勇ちゃんはいい子よ。ほんとにいい子。

おれは、そこで返せなくなつた。

スマホをポケットにしまう。

おれ、最低だよ。

その「いい子」を、ついさつきキズつけたばつかだ。

(しかしながら……水緒さんはおれにいきなりキスしてきたんだ?)

プラス、なんでの場につづりよく勇がいたのか。

まるでキスの現場を見せつけるのが目的みたいに……いや、考えすぎか。

おれはバカだが、バカなりに気をつけていることがある。

それはへ女の子を疑わないってことだ。疑うのは最後の最終手段。きつと、ただの偶然だ。うん。

おろろ?

図書室に荷物をとりにいつて、食堂前のベンチになんとなく座つていたら、奇妙な声。

このクセのある感じは……

「陽キヤだ。陽キヤがおる」

小学生なみに背がひくく、さらに結び目の高いツインテールにして強調される子どもっぽさ。

小学生にあがる前つていつも、通用しそうだ。

「部活、今日からはじまつておるぞ？」

「そうだっけ」

「正よ……おぬし、なんぞあつたんか？」

なのに、しゃべりかたはなんか年寄りくさい。
見た目と中身にギャップがあるヘンな女の子。
片切さんだ。

「泣きすぎて、目がはれておる」

えつ、とおれは目元を確認する。

「ほい、ひつかかつた」

「いやおまえ……文化祭でやつた老婆の役がまだ抜けてないのかよ」

「抜けるのに、半年はかかる」ぐつ、と片切はなぜか親指をたてた。「わ
しは憑依型ひょういがたじやから」

「そいういやいつだつたか、おまえの口調を勇がマネしてたぞ。あいつ、
モノマネが好きだから」

そんなことより、と片切はおれの二の腕をとつた。

「部活にいくぞい。ほれほれ」

両手で、よいしょ、よいしょ、とまるで大根を引き抜くがごとくが
んばつているが、おれの体はうごかない。

ちつちやいながらもソフトな感触が、テンポよく二の腕にあたつて
くる。

「あんま……気分じゃないっていうか」

「ばかもん。そういうときにこそ部活じゃろが」

「うーん……」

けつきよく押し切られた。

第三校舎の三階に移動する。

なんのヘンテツもない部屋の前にかかる、表札みたいなやつには、

演劇部

と、解読できないぐらいの達筆で書かれていた。

すべての部活の中で、もつともおれにふさわしいと思える部。

ただ、セリフのおぼえがめつちやわるいから、まだメインどころの
役は一回もやつたことがない。

「うーっす……つて」おれは部屋の中を見わたす。「誰もいないじゃん」

「それはそうじやよ。今日は活動日にあらず！」堂々と胸をはって、両手を腰にあてた。「すこしばかしケイコをつけてやろうぞ」

「やつぱ帰るか」

「待て正よ」片切はこうしておれを「正」と呼び捨てる。違和感はない。こいつは一応、元カノだからな。「おまえを見ていていつも思うことがあってのう。おまえは——足りん！」

「足りん？」

「みよ、そこの鏡を」

みた。

そこにはスーパーパイケメンがいる。

ファッショニ雑誌でよくあるようなポーズをとつてみた。モデルに負けないほど、かつこいい。

「な？」一目でわかる、モテモテの陽キャじやろ？　なのに、当の本人にモテのオーラがない

「はあ？　オーラつてなんだよ」

ずばりいおう、どこいつが前置きするときは、いつも口クなことをいわない。

今回もそうだつた。

「おぬしはな……ドーテーくさいつ !!」

ばあん、と見えないハリセンでたたかれたような感覚。

すなわち音のみで痛くない。ダメージはない。

片切はすたすたと窓際まで歩いて、カーテンと暗幕あんまくを手にとり、しめている。

センサーが作動して、部屋の電気がついた。
「しようがないだろ……そういうことしたら、カンドウされちまうんだから」

「感動か？」と、片手で涙をふくようなアクションをする。カーテンをしめきると、またおれの近くにきた。なんかラムネみたいな香りがするヤツだ。

「そうじやなくて、エンを切るほうの意味」

これは小波久家の家訓だ。

きちんと責任がとれるようになるまで、女の子とはするな。

父さんも、その父さんも、そのまた父さんも、おれぐらいの年で女の子を妊娠させて、えらい目にあつたらしい。……それは自業自得だと思うんだけど。とにかく、家の決まりでそういうことになつている。

片切が、また一步、身を寄せた。

「家訓など破るためにある。今日は誰もここにこない。な？」

「え」

「するぞ」

「女に恥をかかすな」

押し倒された。

おれの半分の体重ぐらいの、小柄な女子に。

片切ははやくも制服の上着をぬぎ、赤いリボンタイに白いシャツの姿。黄色いブラジャーが、うつすら透けている。

「どうした正？　おぬし……はやカンネンしたか？」

「片切」おれは彼女の目を、ひくい位置からまっすぐ見上げた。「これは正しい恋じやない」

「……言いおる」

「照れかくしで演技すんのもやめろ。おれにはわかってんだぞ？」

はあ、とあいつが吐いた息で、おれの前髪があがつた。

「ときどき、キミはするどいよ。正。私が、告白をオッケーしただけのことはあるね」

「おまえも、おれが告白しただけはあるよ。おまえなりの元気づけだろ？　どうせ誰かから朝比あさひさんのこと聞いたんじゃないのか？」

「ビンゴ」

と、あいつはおれの頭をくしゃくしゃとやる。

鏡でその乱れを直している間、片切はカーテンをあけにいく。
その何歩目かで、ぴたりととまつた。

「片切？」

「正。こい。はやく」

高速の手招き。

「どうしたんだよ？」

無言で、窓の外を指さす。

そこには自転車置き場があつて、生徒もそそこいる。

まちがいさがしも、メガネの人をさがす絵本も得意じやないのに、ふしぎとすぐに見つかつた。

屋根と屋根の間に、その姿がみえる。

(勇)

「正。あの、勇ちゃんのうしろにいる坊主頭のアレは」

「彼氏だ」

勇と同じクラスの野球部。

人となりは、なんとなくあいつから聞いてる。おとなしくて紳士的——みたいに言つていたが……

「おろおろっ？」

片切が声をあげる。

自転車が横倒しにたおれた。彼氏のほうの自転車だ。そのままあいつの両肩をつかみ、強引に、背中を向ける勇をぐるつと回す。

「これは……やつちやう流れ？」

「やつちやう？」

「ドンカンだね、正」ちゅつ、とおれに投げキッスをした。「なんか、坊主くん、ちょっとおこつてるよう見えんなー」

そりやあ……自分の彼女が誰かに泣かされそうになつたら、おこるのは当たり前だし。

「で、勇ちゃんもそんなにイヤがつてない感じ。キスするかどうか、ジユースかける？」

「バカ」

「ほら、ゆつくり一人の顔が接近してゐる」

おれは窓から視線をはずす。

「もう帰るからな」

「あーーーっ!!」

びくつ、とおれのからだが緊張したのは、たぶんこいつの大聲のせいじやない。

「うわあ……」

おれの体はうごかなかつた。

すこし首をうごかし、すこし目線をうつすだけでいいのに。

「急展開。あつちやー、あんなことになつちやうかー」

「片切」

「ん?」

「その……勇のやつ、どうなつたんだ?」

「知りたい?」

知りたいと知りたくないがおれの心の中でケンカしてる。

「正。どうして自分の目で見なかつたのかな?」

「……」

「じつは私がキミをフツた理由も、そのあたりにあるんだよ?」

おれは演劇部の部室をでた。

昨日の児玉こだまじゃないが、酒でも飲みたい気分だ。もし酒つてやつが、このモヤモヤをきれいに吹き飛ばしてくれるなんら。

なにやつてるんだ、おれは。

大事な幼なじみをキズつけて、その幼なじみの彼氏をおこらせて、あいつらのキスから目をそらして。

なにやつてるんだ……

(かつこよくねー。これがおれかよ)

帰り道で、ケーキ屋のショーウィンドウにうつる自分の姿は、どこかなさけない。

……! いかんいかん!

頭のよくないおれが落ちこんだところで、どうせラチはあかないんだ。

せめてポジティブにいこうぜ!

につ、とまづ笑顔をつくつた。
うん。わるくない。いい顔だ。

「いい顔だな。小波久」

幼稚園のときの女の先生と同じにおいが、そよ風にのつて流れてくれる。

みると、スクールバッグを後ろ手にもつた水緒先輩みおが立っていた。相変わらず、この人と話すときは、視線をバストのほうに下げないようにするのに苦労するよ。

「明日、なにか予定はあるか」

「いえ。べつに」

「じゃあ私とデートだ」

有無をいわせない強さで、水緒さんは断言した。

ちょうど彼女の真後ろの高いところに、太陽がある。

地面にのびる彼女の影さえ、おどろくほどスタイルがいい。

「いいな？」

「まあ……いいですけど」

「コースは私がきめる。小波久は体調をととのえておくだけでいい」

そして、彼女はさりげなく言つた。

食べ物や飲み物を「一口ちようだい」ぐらいの気軽さで。

「おまえの童貞童貞をくれ」

ハートはハダカになりたがる

次の日のデートは、いきなりクライマックスだつた。

まちあわせの時間が夕方の5時つていうところから、あやしかつたんだ。

ラブホがめっちゃある通りに入つて、そのうちの一つにチエック・イン。

(昨日のセリフ……まじに実現させる気か?)

ちら、と盗み見る。

三年の先輩、水緒さんを。

土俵のような丸いベッドのふちに座る彼女を。

「どうした? ビビってるのか?」

腕を組み、足も組み、挑発的な目つき。

「いや……ビビッてないですよ。おれも男ですから」「ほら」と、ベッドを手でたたく。「こっちにこい」「大丈夫です……」で

おれは床に正座していた。Tシャツにパンツ一枚という姿で。

「立てない理由もあるのか?」

水緒さんの視線が「一点」に集中する。

おれも意識を集中して、必死にあらがう。

(目をつむれっ! おだやかな海や草原をイメージして……)
ちよつとおちついた、か?

しかしハードな状況だ。

男の本能が、どうしても反応しようとする。

「あの……」

「なんだ?」

「おれの体を、デツサンするためにここに入つたんじゃないですか

?」

「あれはウソだ」

と、すがすがしく真顔まがおで言い切つた。

まったくこの人には、かなわないよ。

読書家で芸術家。

おれの5回目の告白をOKしてくれた、元カノ。

「相変わらず、おまえは疑うということを知らないな……」

横顔を向けた。

チャンス！　じやないけど、今のうちにじっくり見て見なれておこう。

上下黒の下着姿で、ガーターベルトまで黒。もちろんガーターストッキングも黒。マニキュアも黒。ペディキュアも黒。どんだけ黒が好きなんだよ。

長い髪を体の前に垂らし、首のどこで二つにわかれている。
その髪の毛先は空中で、ふわふわゆれている。

そのわけは、途中にある一つの丘——いや山——で、ぐ一つと持ち上がっているからだ。

「水緒さん」

む？　と顔がこっちに向く。

「これは正しいことじゃないですよ……出ましよう
「出る、だと？　もう？　5分もたつてないのに？」

「はい」

「すこしづかり——早すぎるぞ」
にい、と口元だけで笑った。

？

「なんだ？　どういう意味？」
「冗談はさておき」

間接照明で、水緒さんの右半分だけがオレンジっぽいあかりで照らされていた。

「説教の時間だ」

「説教？」せつ、と彼女が口にしたコンマ何秒の瞬間に頭によぎつた予想が、みごとに裏切られる。「せ、説教ですか？」

「私にとつておまえ……こはくしょう小波久正」という存在は忘れものだつたんだな

なんか言つてる意味がよくわからない。

おれがバカだからという理由だけじゃないような気がする。

「こじやないとダメだつたんですか？」

「小波久。人間、喜怒哀楽をつよく感じたときに記憶力も高まるものだ。これからする説教をおまえの胸にしつかりと刻むために、こうすることが最適だつた。すなわち文字どおり……『一肌ぬいでやつた』というわけだ」

やつぱり、よくわからん。

ヘンにさからわず、おとなしく話をきくか。

「ちようど去年の今頃だつたな、おまえが私に告白したのは」
はつきりおぼえていないが、この人が言うのならそうなんだろう。
「どうして私を選んだのか、というヤボなことを聞くつもりはない。
問題は〈私がおまえをフツた理由〉のほうだ」
「それは……おれ頭がよくないし、小説とか絵の話題にもついていけなかつたから——」

「私もそう思つた。美人は三日あきるというが、たしかに、三日ほどでおまえの美貌びほうは気にならなくなつたからな。そして、あまりの中身のなさに絶望したものだ」

「これ処刑ですか？」

「まあ聞け」

手のひらをおれに向ける。

「下校デートで立ち寄つた公園のベンチで、私はおまえにキスをしようとした」

おれはそのときの記憶を思い出した。

遠くで子どもがバドミントンをしてたつけ。

「が、おまえはスマホでガードした。そうだな？」

「……はい」

「そのとき私はフツたんだ。『こんな恋人があるか』と怒鳴つてな。ふつ。一年前は……私も幼かつたようだ」

「すみませんでした」

「あやまるな。しかし、今日の目的は正まさにそこにある。小波久。心して聞け——」

なぜ、おまえはキスができない？

ちつ、ちつ、と時計の秒針の音。

壁にはカーテンのようにゆれるオーロラの絵。
ぶーん、と鳴く冷蔵庫。

「それは……おれの家の決まりで……」

「ほう」

「一人前になるまで女の子とは〈するな〉って言われてるから……」
「〈するな〉っていうのは、セックスのことだな？」

おれはうなずいた。

「キスのことではないな？」

「いやでも……そういうことって、ほら、だいたいキスからはじまる
じゃないですか」

「なにをうろたえている？ なら、私がはつきり言つてやろう」
立ち上がっておれに近づき、ぺたんとお尻をつけて座ると、正座
するおれの首筋に手を回した。

「おまえは、あの幼なじみが——



帰宅した。

その5分後ぐらいに、「ただいま」と勇も帰ってきた。

「おまえも出かけてたのか？」

「なによ。いいじやん。べつに」

「デートか？」

すこし間まがあつて、

「だよ」

と二文字でこたえた。にひつ、という笑顔つきで。

「正もでしょ？」

「まあな」

「女の子と予定のない休日なんて、女つたらしの恥だもんねつ！」
べー、と勇は小さな舌をだした。

白いダッフルコートを脱ぎながら、おれの横を抜ける。

いかにも女の子っていう、ナチュラルないい香りがした。

(まだ根にもつてんのかな……)

もともと、ネガティブなことをひきずらない、カラツとした性格のやつなんだけど。

図書室でおれがキスされそうになつたシーンを見たことも、しばらくしたら忘れてくれるだろう。

あのときは……なんか泣きそうな顔してたけどな……。

たまたまホコリが目に入つてツラかったとか、そういう可能性がある。

(ふー)

食事も終わつてフロにも入つて、おちついた。

あとは寝るだけ——いや、

(努力なくして正しい恋は見つからないぜ!)

おれはもつと中身のある人間になるんだ。その第一歩。

父さんの部屋から一冊、本をかりてきた。タイトルは『竜馬がゆく』。

まわりを観察すると、頭がいいヤツはたいてい本を読んでる。

おれも、頭がよくなりたいんだ。話題の引き出しもほしい。

きっとソンはしないだろう。坂本竜馬も、けつこう好きだしな。

(…………あつ)

三ページ目ぐらいではやくもウトウトしかけたころ、クローゼットの中ですマホがぶるつた音がした。

忘れてた。ウチは在宅中は親にスマホをあずけるシステムなのに。

まあ……今日は忘れるぐらいインパクトのあるイベントがあつたからな……。

メールがきてる。

水緒先輩からだ。

(件名なし、本文なし?)

なんだこれ。

下にスクロールすると、画像がでてきた。

(おれじやん)

待ち合わせ場所で水緒さんを待つてるおれだ。スタジヤンを着てマフラーを巻いてる。

(こつそり撮つてたのか)

一人で立ちつくしてるときでも気を抜いてなくて、スキのないカツコよさ。ドラマのワンシーンのようだ……つてナルシストやってる場合じやないな。

なんでこんなの送つたんだ?

おれはしばらくその画像とにらめっこした。

ふと、玄関先の勇を思い出した。

新しい雪みたいに白いダツフル。

おれが立ってる場所のずっと奥に、人ごみにまぎれるようにして真っ白い一点がある。

スマホを操作して拡大してみた。
まちがいなかつた。

遠くからおれの様子をうかがう勇が、そこにいた。

妹と妹

おれもあいつも外に出かけていた日曜日。

おれがラブホで説教されているとき、あいつは彼氏とデートしてたはずだ。

なのに……

スマホの画面を指でつまんで、もどして、をくり返す。

(やつぱり、ここにいるのは勇ゆうだ)

ふわっとした黒髪のショートといい、身長といい、服装といい、まちがいはない。

(デート行つたつてウソだつたのか？ ちょっと本人に確認を——) つて、待てよ。

しつとスルーしとくのがよくないか？

それが正解だろ。

それにこの写真は盗み撮りだし。フェアじやない。
いやでも……遠回しにさぐりを入れるぐらいだつたら……。

だめだ。

おれのモットーは「女の子を疑わない」だつただろ？
しかし気になる。なりすぎる。

(デートデートデート……)

暗示をかけるように心の中で何度もくり返して、あいつの部屋の前まできた。

こうなつたら、あいつの口から今日のことを話してもらおう。
「デート楽しかったよ」つてひとこと言ってくれたら、きつとこのモヤモヤは晴れる。

(ん?)

ドアごしに何かがきこえてくる。
すん、すん、と鼻をすする音。

ガキのころから元気のカタマリで、花粉症もないし、めったにカゼもひかないのに。

あいつ……もしかして泣いてるのか？

じゃあ、その理由って――

(――やばっ!)

ドアの横につんであるダンボールに体があたってしまった。

そのてつぺんにあつた、バドミントンの大会のトロフィーが床に落ちる。

けつこう派手な音がした。

勇にもきつと届いただろう。

「……誰かいるの?」

立ち聞きがバレた。

いや、もともとそんなつもりはなかつたんだが。

返事もせず、おれは足りない頭をフル回転して、これから的发展を考える。

ドアがあいた。

「やつぱ正か」あきれたっぽく言う。「なにしてたの?」と、いつもどおりの顔で首をかしげる。

「え、えーとな……これつて正しいのかなって……」

「はい?」

視線をはずした先に、ぴつたりのものがあつた。

「ドアのネームプレート! おまえ〈Y・O・U〉つてつけてるけど、これだとさ……ヨージやね?」

「いいでしょ、べつに」

「ワイとユージやないのか?」

「雾囮気だからいいの。こつちのほうが絶対かわいいじやん

YOUの〈O〉の中には、蛍光ペンでニコニコした顔を書きこんでいる。

たしかに、こつちのほうがめっちゃ勇らしい。

てか、さつきまでの鼻すんさんはどこへ消えた?
テレビか動画の音を、聞きまちがえたのかな。

「それもそうか。じゃ、これで……」

おい、とパジャマのすそをつかまれた。

身長差のせいで、あいつの胸の谷間がシャツと一緒にだけみえた。

やや首回りのゆるくなつた白Tにうすいピンクのショートパンツ。「ほんとの用事は、なーに?」イタズラっぽく目をほそめる。

「いや……」

「ききたいことがある、つて顔に書いてるよ?」

「まじか」

わざとらしく、自分の顔をペタペタときわつてみせる。

無言でジト目された。

ユーモアとかお笑いの方面も、おれは0点だからな。

あのな、と前置きして、

「今さ……なにしてた?」

「はい、兄貴失格」

勇は胸の前で両手でペケをつくつた。

「干渉しすぎ。ふらつと妹の部屋にきて、そんな質問していいのは小学生までだから」

「シスコンって言いたいのか?」

「シスコンつていうかオサコンつていうか……」あ、と勇は眉毛をあげる。「オサコンは幼なじみコンプレックスの略だよ。あしからず」「おれはべつに……」

勇がおれの腕をとつた。

「ま、なにも出ませんけど、どーぞ」

部屋に入れられる。

あわい黄色をベースにした女の子らしい部屋。

妹の部屋だ。年が明けて春がきたら、勇は正式におれの妹になる。クツションに座りながら問い合わせた。

「デート、どうだつたんだよ」

「気になるの」

「なるよ」

みじかい時間、なんか勇の体がピタッと止まつた気がした。

あいつは学習机の前にいる。

「一応、おれはおまえの兄ちゃんになるんだからさ」

ふーん、とつまらなそうにつぶやくと、机の引き出しをあけて何か

を取り出した。

「ほれつ。今日は、これ見てきたよ」

「え……？」

ローテーブルの上に置かれたのは映画のパンフレット。
有名なマンガを実写化したっていう、いま話題のヤツだ。
「ま、まじか」

「そんなにおどろく？ 正もみたかったの？」

いや、おれがおどろいてるのは〈そっち〉じゃない。

だいたい、こういうものは実際に映画館に行かないと手に入らない
からな。

「まじでデートしたんだな？」

「……なんの容疑やねん」

と、勇はおれの肩をシバいた。
ちよつと笑つてる。

はは……やっぱおれのトリ……なんだつけ、トリなんとか苦労だつ
たわけだ。よかつたよかつた。

勇、とおれは顔をしつかり見ながら言う。

「あれ……なんていうんだつけ。出会つたらヤバいつていう……自分
とうりふたつの」

「ドッペルゲンガー？」

「それだ！」

「それが何？」

「無事でよかつたな、勇」

「？」

おれは立ち上がった。

すると、出窓のところにあるミニサボテンが目にとまつた。

白い、バドミントンのシャトルみたいな花をつけている。

「アンタこそ、どうだつたのよ？ もう彼女と最後までませちやつ
た？」

「すませる？ それってエッチのことか？」

「直球かよ……。なんのためのオブラートかわからんないじやん。

まつ、こういうのが正らしいか

「してないぞ」

「えつ」

「おれは小波久家の家訓をちやーんとまもつてゐる。心配するな」
心配とかじやなくて……と、うつむきながら言つた。聞きとりにく
い小声で。

一秒か二秒後、勇は顔をあげた。

20センチの身長差でおれたちは目を合わせる。

「そう。じやあ、お赤飯はまた今度だね」

「そんなのいらぬーよ。ふつうの晩メシでいい」

「なに言つてんの。お祝いはしてあげるよ？ 幼なじみとして」

お祝い、か。

「正にはじめての彼女ができたときも、私、シャンメリ買つてお祝いし
てあげたでしょ？」

その言葉で、そのときの光景を思い出す。

おれの部屋で「カンパニー！」と、あいつはふだんよりも明るい声
で言つてたつけ。

意外だつた。

勇だつたら、怒るかと思つてたのに。「バカ！」つて。

ん？

あらためて考えたら、どうして勇が怒るんだ？

「……おれもするよ」

「お祝い？」

想像した。

その最中つていう生々しい映像じやなくて、彼氏がとなりにいて、
おれにつこりと微笑む勇の姿を。

あまり祝福できるテンションじやない自分を。

「いや。できないかもな」

正直に白状した。

正直すぎたか？

ヘンな空気になるのを避けるために、おれはあわてて質問を投げ

る。

「そつちは、もうやつたのか？」

「ひ・み・つ」

つ、のところで、ちつちやいジャンプをして後頭部をたたかれた。手加減がわかる弱い力だ。

エッチ関係の話題は、こうやって勇はいつもはぐらかす。おれは部屋を出た。

(ひみつか)

◆
ドアのネームプレートをみながら考える。
はぐらかさなかつたとしても、それはそれで困るのかもしない
な、と。

次の日の朝。

「ゆう」からラインがきた。

幼なじみと同じ名前の女の子。

——駅で会えません?
と、いう内容。

待ち合わせの場所以外に、詳細はない。

おれは家を早めにでて、学校がある駅の一つ手前のその駅に向かつた。

「優ちゃん」
〔ゆう
「センパイ!!」

まわりの視線も気にせず、情熱的なハグ。
彼女の両足が宙に浮くぐらいのいきおいで。

「会いたかつた……センパイ！ やつぱりセンパイは死ぬほどかつこ
いいですっ！」

「はは」

おれは苦笑いをかくしつつ、優ちゃんにきく。

「兄貴は？」

「ぶー。今はあんなヤツはいいんですう」

そう言つて、ほっぺをふくらませた。

この子の兄は、おれの友だちの紺野^{こんの}。

この子は、おれが告白した7人目の女子。

「えーと、じゃ彼氏は？」

もちろん、この子もおれをフツっている。

理由は〈幼なじみにコクられた〉から。

それなら、と、おれはむしろよろこんで身を引いたんだが……

「わかれました。でも……ヤツとは、ひとつおりすませましたからつ

!!

ぶー！ と頭の中のおれが液体状の何かを口から吐いた。

す、すませた、だと!!

「もう一人前のオンナなんです。センパイ——」

駅前はまあまあのビル街。

ビルの間をふく強風が、彼女のポニー^{テール}をくるりと回転させた。

目の前にいるのは、中三のポニーテール女子。

胸の前でお祈りのように手を組み、人目も気にしない大声でこう言つた。

「抱いてくださいつつつ!!」

言う?

かつて、ここまでまつすぐセマられたことはなかつた。
つきあつてた子たちからは、一度も。

おれの元カノ、13人もいるのに。

理由は単純だ。

女の子が「そういう気持ち」になる前に、おれの内面のイケてなさ
がバレて、全員にフラれてきたから。

「え?」

おれは、その場しのぎをする。

聞こえてるのに聞き返すつていうベタなやつ。

「もー」

勇^{ゆう}……いや、優^{ゆう}ちゃんは、おれの首のうしろに手を回してうなじを
ぐーっと引っぱる。

強制的に頭の位置を下げられ、彼女と顔が近づいた。
優ちゃんはおれの耳にくちびるをあてて、

「…………抱いてください…………つていつたんです。聞こえてたくせに
…………」

ぶわあああつ、と肩から背中にかけてゾクゾクが走った。
体つてふしきだ。

ふだんと同じ声なのに、耳とゼロ距離でやられたら、こんなにもセ
クシーに聞こえるなんて。

男の本能が——くつ!

そ、その場しのぎを、もう一発だ!

「こうかな?」

おれは優ちゃんの左右から腕をまわして、よわいハグをした。

抱く^{イコール}ハグ。

駅前で、めっちゃ朝のラツシユの時間帯。

スーツの人も学生もたくさんいる。

じろじろみられて恥ずかしいが、背に腹はかえられない。

「……」

優ちゃんはなにも言わない。

ハグを解除して、正面から彼女を見つめてみる。

おれの仲のいい友だちの妹の、紺野優^{こんのゆう}。

風のイタズラで、この子のポニーテールが垂直に、鬼のツノみたくによきつと伸びた。

「まつ、いいでしょ。前菜つてことにしてあげます」

「え？」

「で、これからどうします？ ホテルに直行します？」

「いや……」おれはキラキラした彼女の目から視線をはずした。「学校に直行するよ。おれ、成績がわるいぶん遅刻や欠席はしたくないからさ」

へー、と優ちゃんはつぶやく。
じやあ、と片手をあげるおれ。

その、だいたい15分後――

「緊張するー！」と、うれしそうな声。「ヤバいぐらい目立ってる！
ほら、みんなこっちをみてますよ、センパイ!!」

駅から学校へのルートは、この時間帯、生徒でびっしりだ。

いうまでもなく〈おれの学校の生徒だけ〉でいっぱい。

こんなどこに他校の制服の子がいたら、そりやあ目立ちに目立ちまくる。

しかも優ちゃんが着てるのは有名女子中学の真っ赤なブレザー。
通称〈赤ブレ〉。

「よう、正クン。朝っぱらからやるねー」
「やっぱすげーよ、正クン」

「となりにいる子つて、ひよつとしてアイドル？」

歩いていると、おれの知り合いから何回か声をかけられた。
そのたびに、となりで「えへへ」と照れ笑いした優ちゃん。
まるでカノジョのように。

「最高です。みんなオトナにみえますし。あーあ、わたしもはやく高校生になりたいなあ」

「今の学校は楽しくないの？」

「ぶー。そういうことじゃないんです、センパイ。ここはですね……『優。おまえ来年は、もちろんオレの高校にくるんだろう?』……これですっ! これで即落ちですよつ!」

声が大きいって。

ただでさえこの子の赤ブレは注目されるのに。
ちょうどどこから校舎の大時計がみえる。

おれはハツとした。

(この時間は、よくないな)

あいつがくる。

おれは優ちゃんと向かい合つた。

「じゃあ、このあたりでいいか? もう登校データは楽しんだだろ?
ほら、はやくもどらないと、そっちが遅刻しちゃうよ?」

「えー。もう期末も終わつたし授業もおさらいばつかだから、そんな
の気にしなくていいですよ」

「でも、優ちゃんは学校の中には入れないし……」

「本命の女の子がいるんでしょ?」

きつ、とにらむような強い目つきになつた。
友だちの妹だし、二つも年下で「かわいい」というイメージしかな
かつたから意外。

「わたし……じつはプライドがギズついてたんですね」

赤ブレの、赤いリボンが北風でゆれた。

多めに下ろしている前髪も、すこしななめに流れた。

「だつてセンパイ、あのときよろこんだじやないですか」

「あのとき?」

「動物園でフツたときです。忘れません。わたしが『幼なじみとつき
あうから』って言つたとき——」

今年の春のことだ。たしか入り口のそばにあつた桜は満開だつた。
フラれたのはアルパカの前だつたと思う。

おれは急に「幼なじみ」って言われて、びっくりして、勇を思い出
して、なんかホツとしたのをおぼえてる。
彼女の言葉にウソはない。

あのとき、たしかにおれは「よろこんだ」んだ。

(それは申し訳なかつたけど……そろそろ、あいつが登校して――)

「センパイ？ きいてます？」

「うん、ちゃんときいてるさ。わかつてるよ。あのときはほんと『めん。まじで』めん。あのときのおれはバカだつたんだ」と、不自然なくらいの早口で言う。「じゃあ、そういうことで……」

「センパイ。また、わたしのプライドをキズつけるんですか？」

「優ちゃん」おれは最高のキメ顔をつくつた。「そんなつもりはないよ。おれは優ちゃんととも正^{ただ}しく恋愛ができると思つてる」

「え!? は、はい……」

「でもそれには時間が必要だ。おれは心の底から愛している子じやないと、そういうことはできない」

「ぶー。ティよくフツてる流れじゃないですかー。やつぱり、センパイくらいカツコいいと、一番手ぐらいでガマンしなきやなのかー」「駅までの道はわかる?」

「……おっぱらう気マンマンですね」

優ちゃんが、頭に「！」がみえるような表情になった。
目をぱつちりひらいて、ちよつとアヒル口になつて。
イヤな予感。

「んじゃ、『あいしてる』って言つてください」

ふくみ笑いのような、年下の女の子らしいチャーミングな表情をうかべている。

おれが言うのか?
しようがない。

「あいしてる」

「ダメです。もつと心をこめてください」ぱちつ、と優ちゃんはウインクした。「合格したら、わたし帰ります」

「……あいしてる」

「まだまだ。センパイ、演劇部でしたよね？ もつとできるんじやないですか～？」

「あい……してる」

「ボリュームをあげてみて、いつそのこと絶叫系でいきません？ わたしの名前も呼んでください」

おれは覚悟をきめた。

お望みどおり、叫んでやるさ。まわりにはそれなりに生徒がいるが、そのぶん雑音だつて多いからな。

「優！ あいしてるぞ！」

「……」

こんなことがあるのか。

あれだけワイワイガヤガヤでうるさかつた周囲のノイズが、おれがしゃべる一秒前に、なぜかピタッととまつた。おかげで、ひびきにひびく愛の告白。

「……」

無言の視線。

これは優ちゃんのじやなくて。優ちゃんは、今、ほっぺをおさえて恥ずかしそうにうつむいているから。

この「……」は、あいつ。

無表情で感情はわからない。

「勇」

「また名前を……ステキですセンパイ。やつぱり、センパイは死ぬほどかつこいい……」

おれの胸におでこをあてる優ちゃんの向こうに、じーっとおれをみている勇がいた。

◆

今日の体育は大ハズレだ。

マラソンつて。

校舎の外周を走るだけつて。

が、それよりなにより、おれは運動神經もスタミナもないから、めつちや苦痛。

うつ……昼にたべたものが……

「大丈夫？」

大幅にペースダウンして走っているおれに、うしろから声をかけてくれた女子がいる。

ほかの組の女子も、いつしょにマラソンしてるみたいだからな。

「だ、だいじょうぶ、さ」

「ムリしないで」

と、背中に手をあててくれる。

おれは立ち止まつて、ふりかえつた。

「あ。勇の……」

「うん。やつと気づいた?」

マリカワさんだ。

バドミントン部で、勇とダブルスを組んでる女子。

「マリ」の字はボールみたいなヤツの「マリ」。カワはシンプルなほうの川。おれにはむずかしすぎて、マリを漢字で書けない。カタカナをイメージして、いつも「マリちゃん」と呼んでいる。

どこかお嬢様っぽい感じの子だ。長い髪の毛先をカールさせてる。

ちなみに、友だちの妹に手をだしたおれでも、幼なじみの親友である彼女には——さすがに——手を出していない。

「ちよつと、お話をしたかったの。ちようどいいタイミングね」

マリちゃんは髪をかきあげた。

一点のスキもないキレイ系の顔立ちだ。

もし彼女が勇と無関係だつたら、告白してたかもしれない。

「元気がないの」

「えつ」

「勇のこと。さつきの昼休みも、あの子のクラスをのぞいたら、一人で机に……なんて言うのかな、寝てるつていうか」

「つつぶす?」

「そうそう。机につつぶして寝てて。なんだか勇らしくないなつて。
小波久くん……心当たりはない?」

ある。

あるけど……、おかしな気もする。

勇にはもう、りっぱな彼氏がいるんだ。

なら、おれがほかの女の子とどうこうしたところで、ヘコんだりするわけがない。

「さ、さあ……彼氏とケンカとかじゃないかな？ それか、テストの成績がわるかつたとか」

「うーん……」

マリちゃんは首をかしげ、右手の指先をかるくほっぺにあてる。指にはいくつかテープニングがしてあつた。

運動部で努力してる人の指だ。

おれは目をつむって、机につづぱす勇の姿を想像した。
(もし落ちこんでるなんなら……その理由は……)

だめだ。

頭からケムリができる。

たくさん糸が頭ん中でからんでる。

その糸のからみを、マリちゃんが一刀両断にしてしまつた。

勇はね、と小声で口にしたあと、まるで秘密をうちあけるように彼女はこう言つた。

「あなたのことが大好きなんだと思う」

わかる予定

「おれは、キミのことが大好きなんだ……と思う」

「こらつ！」

丸めた台本でかるくたたかれた。

「そんなのセリフはないでしょ！ 勝手に『と思う』とか付け足さない！」

すいません、とおれは頭をさげる。

放課後。

演劇部のおれは、校舎の地下にある多目的ホールの舞台にたつていた。

「どうしたもんかねえ。正ちゃんのセリフおぼえのわるさは」「はは……」

台本で胸のあたりをグリグリされながら、そんなことを言われる。この人S^{エス}つ気が強いからなー。

下側だけにふちのある赤いフレームのメガネをかけた、165センチぐらいのすらつとした女子。

この人が演劇部の三年の部長だ。

そういうヒトしかこの部にいないつてわけじゃないけど、部長も顔面偏差値がそうとう高い。……おれには負けるけどな。

「うーん。ちょっと正ちゃん、いつたんケイコからはずれよう。そのへんで休憩してちょ」

おれは舞台のそでに移動した。
はあ……またこのパターンかよ。

いつたんメインどころに組まれるもの、やっぱりダメだと言われてはずされる。

あーあ……

——思う

——と思う

——大好きなんだと思う
頭の中では輪唱のように、体育のとき聞いたアレが回りに回つて

いた。

このおかげで、さつきのセリフもトチつたんだ。

はあ～……っ！ いかん！ もうため息はやめよう。

「飲むかい？」

「片切」

同じ部の元カノが、ペットボトルの水をもつててくれた。
頭の高いところで結んだツインテール。身長も体重も小学生なみ
のミニな女子。

「サンキュー」

「ノー」一瞬でペットボトルをひとつこめた。「正しい発音はこう。サン
キュー」

「おれには、そんないい発音はできないよ」

「ふふ」

壁に背中をつけて三角座りするおれに、片切は水を投げた。ちょうど
どそれが、ひざとひざの間にスポットとはいる。

「おまえはなんか役もらえたのか？」

「もらえたよ。ストレッチしよ」

おれの正面に同じように座つて、おれの両手をとる。

「嫌われ者のイヤミな帰国子女の役。ピッタリでしょ？」

「……だな」

「実際、私つてクラスで浮きまくつてたからね～。あざといツインテ
に、あざとい演劇部でさ」

「部活は関係ねーよ」

「一番デカかつたのは、みんなよりへ一つ年上」つてところだつたかな。
海外に一年間留学してたから、ま、しようがないんだけどね」

「そう。

片切は年齢でいえば、おれよりも上。

「クラスに親しい友だちもいなくて……そこで正だよ」

「えつ？」

「去年の文化祭のあと、キミが告白してくれて、私たちつきあいはじめ
たでしょ？ あれでさ、だいぶ風向きが変わったんだよね～」

それは初耳だ。

「クラスのみんなの見る目が変わった。で、壁がなくなつたみたいに、気軽に話しかけてくれるようになつて」

「うん」

「だから正は」ぐいい、つと片切は両手をひいた。「私の恩人。ね？ 今みたいに落ちこんでたら、いつだつてなぐさめてあげるんだから」

ら

そう言つて、ぐつ、と親指をたてる。
いいこといつてくれるぜ。

おまえは、いい元カノだよ片切。

やがて舞台での練習も終わつて、ジャージ姿の演劇部がひきあげていく。

「正ちゃん」

背後から部長に声をかけられた。

「すまんな。役をはずして。なんていうか、クリスマス公演のあれはな、ぶつちやけ『セリフ忘れました』の空気が出たら完全にオシャカになるタイプのシリアルアスな芝居だから……」

「わかつてます。おれバカですからね。もつと勉強しますよ」

「おお、なんとキュンとくるポジティブ！」

部長は両腕で自分を抱きしめる。

がこん、と音がして照明が落ちた。

青っぽいライトだけになる。部長の向こうに、ずらつとならぶ無人の観客席がみえる。

「正ちゃん、その代わりといつてはなんだが、一つ提案がある」

「はあ……」

なんだ？

このタイミングで退部をすすめられるなんて、ないよな？

「ほかでもない」

ドウロロロロロ……とスピーカーから音。ドラムロール。

えつ？

なにこれ？

サプライズかなんかか？

ドラマがとまつた。

「一人芝居をやれっ!!」

うえーい、とわきにかくれてたみんなが拍手しながら出てきた。

照明もついた。

さらに部長は言う。

「テーマは〈告白〉！　おまえが大事な誰かに告白をする芝居なのじゃあ～～～!!」

じやあ……じゃあ……じゃあ……と、長引くエコー。

やまない拍手。

ことわれない空気。

もう、やるしかないみたいだ。

それはいいよ。

一人芝居はいいし、テーマが告白つてのもいい。

問題はひとつだけ。

告白の相手つて——だれ？



「よかつたじゃない、正」となりを歩く片切がいう。「ダイバツテキだよ？　まあ……日ごろから正のエチュードのうまさには、みんないちもく一目おいてたからね」

「エチュードつて……あの、好き勝手やつていいやつ？」

「そう、即興の劇。自覚があるか知らないけど、正つてアレ、天才的なんだから」

たしかに、いつもおどろかれる。

ナチュラルすぎて、びっくりするんだ。

素直にやつてるだけなんだけど……セリフを思いつかないときは

「思いつかねー」とか言つて。

(それどころじやないけどな)

今は「大好きだと思う」発言で、まだ心がゆれている。

「クリスマス、楽しみだな」

「はは……」

学校から駅までの道を、片切と二人で歩いている。

あたりは、まあまあ暗い。

冬は、夜になるのがはやいからな。まだ7時にもなつてないと思うけど。

「チカンがでたら、ヘルプだよ正」

「でねーよ。そんなん……」

と言いつつ、心配だ。

こいつを一人だけで夜道を歩かせたら、どんなイレギュラーがあるやら。

彼女でもないのにツーショットで下校する理由の、大部分はそれだつたりする。

「ほう。前をいくのも、私たちと同じくカツプルのようじやのう」
「老婆ろうばの役はいいよ、片切へき…………つ！」

あれは。

チャリをひく男子と、その横をあるく女子。

あのシルエット。
勇ゆうだ。

「やつぱり、あの子は正の幼なじみちゃんだったか」

「片切

「ん？」

「なんで早歩きになつてんだよ」

「ムフフ」

簡単なことだ。

ぴつ、と手をひけば、片切の勇いさみ足はとめられる。
なんだかんだ、ついていつてるおれつて……。

会話がきこえる距離に入つた。

「……本気？」

これは勇の声。

おれと片切は、勇のすこしうしろで、ニンジャのように気配を消していた。

「ほんとに……本気なの？」

「ああ。おれ、もう決めた。家族も、その日は旅行で、家には……誰もいないから」「でも」

「勇ちゃん！」

男のほうが足をとめた。

反射的に、おれも片切もスクワットのようにして体を落とす。

「おれ、勇ちゃんのこと、まじで好きだから」

「……うん」

「つきあつて、そろそろ一年以上になるだろ？ 勇ちゃんが好きだから……ずっとといつしょにいたいと思うんだよ」

どつ、どつ、と力強く全身に血がめぐるのを感じる。

盗み聞きのうしろめたさもどこへやら、一言も聞き逃すまいと必死になつていて、自分がいた。

祈つてゐる自分もいる。

祈るつて、なにを？

クリスマス公演のこと、神サマが頭に残つてゐるからか？

「クリスマスの日。お、おれの」

勇と彼氏が、10センチぐらいの身長差で向かい合つてゐる。

影絵のようで、彼氏の口元だけが、パクパクとちいさく動いてゐる。その動きが、急に速くなつた。

「家にきてくれないか！」

言つた。

いくらニブくともわかる。

それつてそういう意味だつて。

バカなおれでさえわかつたんだから、勇にわからないわけがない。

（返事は……？）

ちょうどそこで、原付が横をとおりすぎた。バリツバリにエンジンをふかして。

（えつ？ おい！ 勇はどう答えたんだ？）

ふたたび二人があるきだす。

追いかけようすると、

「ダメ。なんか警戒されてる。じつとしてて」

片切がおれのそでを引く。

しかたなく、しばらくそこで待機した。

もう二人の姿は見えない。

「片切……きこえた？」

「パードン？」

「まじで」

「うつ……そんな真剣にならないでよ。かわいい冗談じやん」

「どうだつた？」

「きこえてない」

片切は断言した。

ふざけるのが大好きなことだからあやしいが、ここは信じよう。

片切も女の子だ。おれは〈女の子は信じる〉ことにしている。ただね、と、そこに思わず追加情報があつた。

「ほんのちょっと、うなずいてたような気もする」

考えるよりも、はやく

幼なじみのクリスマスの予定がうまる瞬間に、立ち会つてしまつた。

もちろん相手はおれじやなくて。

間まがわるくて返事を聞きのがしたのが、残念、というか気になると

いうか……。

(でも、かりに返事を聞いたとしても――)

おれには関係なくないか?

ドラマみたいに「やめろよ」なんて言うわけじゃないし。

「正。さつき、なんでコンビニ寄つたの?」

「いや……あのまま駅にいつてたら、ハチあわせてたからさ」
片かた切りの目ぎが細くなつた。

赤いマフラーを少し口元から下げて、

「ハチあわせて、いいじやん」

「気まずいだろ。幼なじみに、彼氏といつしょのところを見られる
のつて」

「そーかなー」

じゃね、と片切はかるく手をふつて、階段をあがつていった。

ここは駅の中の連絡通路。

おれはさらに前進して、つきあたりの階段をのぼる。

考え事をしながらだから、一段一段、ゆっくりあがつてる。

その何段目かで、

「口り?」

と、ふいうちをくらつた。

「センパイ、口りなんですか?」

ハツとするほどあざやかな赤いブレザーリングを着た女の子。

友だちの妹、優ゆうちゃんだ。

「まさか、さつきの口りつ子がセンパイの本命? なら、わたしにもチャンスがありそうですね。あの子より胸はあるし、たぶん夜のテクニックもわたしのほうが……」

「ちよ、ちよつと待つて、いろいろ急だな」

「待ちません。女の子はいつだってフルスピードなんですよ、センパイ」

イ

ぐいっ、と腕をとられた。

当然のことく、おれのひじあたりに、あててくる。

階段の上のホームから、つよい風がふいてくる。

優ちゃんのポニー・テールが、鯉のぼりのよう^{こい}に横向きに流れた。

「ずーーーーと待つてました。そこの駅前のカフェで」

「そうなんだ」

ホームを移動して、あいているベンチにすわった。

にゃん！ と元気よく言い、優ちゃんはおれの肩に頭をのせる。

「もう〈つきあつてる〉つてことでもいいですか？」

「それは……ちよつとちがうかな」

「ならセンパイ、おしえてくださいよ。本命は誰ですか？ わたし、その子と勝負がしたいです」

「本命も何も、おれ今、彼女はいないから……」

スマホから音が鳴った。

ラインか？

どうやらおれじやなく、優ちゃんのようだ。

「あつ。まーたかあ」

おれの肩を枕にしたまま、高速でフリック入力をはじめた。

こういうのは、いけないことだ。

と思いつつ、おれの目は、こつそりと彼女のスマホの画面をのぞく。

(!)

この内容は、もしかして――

「元カレ？」

「そうです。エンリョせずに、もつとしつかり見ていいですよ」

「もう一度あいたい、とかあるけど」

「ありますね」

「おれがわるかつた、とか」

「はい」

どれに対しても、ようしやないリップを返して。る。

けつこうS^{エス}なんだな——じゃなくて、これって、相手が仲直りしたがってるんじやないか？

「まつたく。もう……」

そして、素直になれない優ちゃん。

なんとなくわかってきた。この二人がどういう状況なのかが。

と、おれにもラインがきた。

(勇だ)
ゆう
勇だ

あいつ……。

このタイミングでくるつてことは、内容はたぶん、クリスマスのアレのことしかないよな。

どうしよう。

いつたんスルーするか？

「あやしい～～～」

優ちゃんが、おれの顔を横からのぞきこんで言う。

「あやしくないって。家族からだし」

「ほんとですか～？」

と、優ちゃんがおれのスマホに手をかけようとしたとき、

「あっ！」

彼女のスマホが手からはなれた。

地面上に落ちる。

ここからが、我ながら神ワザ。

頭じやなんも考えてないのに、にゅつ、と自然に左手がのびた。

キヤツチ。

「すぐーい！」 口元に手をてる。「今のすぐかつたです！ やっぱり、センパイは死ぬほどかっこいいですよっ！」

「はは……」

彼女のスマホの画面、すでにバツキバキにひびが入っていたけど、ひびはすくないほうがいいだろう。

ささやかなファインプレーができて、おれもちよつと元気がでた。

それから電車にのつて、優ちゃんとわかれ、家が近づくまでスマ

亦はさわらなかつた。

いつだつて勇から連絡はすぐにチェックしてたのに。
こんなことは、はじめてだ。

(ええいっ!!)

夜道で一人、スマホをひたいにあててカツトウするおれ。
街灯に照らされて立っている姿も、ぶつちぎりでかつこいい。自分
じや見れないけど。

ただ——えんえんと迷いつづけているのは、かつこわるい。
(よし、いくぞっ!!)

覚悟をきめて、みた。

「まだ帰つてないの?」

「トンカツ、ぜんぶ食べちゃうよ?」

おれは力が抜けた。

こんなバカな。

ゆ、夕食の話題かよ。

(まあ、おれが勝手に決めつけてただけだけど……)

食べ終えて、部屋にもどると、

「おかげり」

勇が、クツションに座つていた。

服はいつものように、白Tに黒いショーパン。

あぐらでくつろぐことが多いのに、今は、クツションにおしりをつ
けて〈W〉の字みたいに足を曲げて座つている〈女の子すわり〉のポー
ズ。

めずらしいな。

おれは学習机の前の椅子にすわる。

「正。どう、14人目はみつかりそう? もう日星ぐらいはついてる
?」

「ん」優ちゃんのことが頭に浮かぶ。が、現時点では〈正しい恋〉の
候補ではない。「まだ、だな」
「じゃ、私がなりまーす」ばつ、と手をあげた。瞬間にわきから、も
うちよつと奥のほうまで見えてしまつてドキッとする。

「おまえには彼氏がいるだろ？」

につ、と勇は笑つた。

その顔がグラデーションみたく、だんだんまじになつて、
「……やつぱり、だいぶよくないみたい」

「ばあちゃん？」

「年を越せるかどうか……つて」

おれは言葉をうしなつた。

いま入院している、ばあちゃん。

おれを大いに育ててくれた、たいせつな人だ。

いなくなつてほしくない。もつともつと長生きしてほしい。でき

れば元気になつてほしい。

「最近、よく言つてるんだつて。『正の彼女がみたい』つて。『みて安心
したい』つて」

「うん……」

「私が彼女だと、ダメ？」

えつ、とおれは下げていた視線をあいつに向けた。

「あ。誤解しないでね。ほんとの恋人つていうことじゃなくて、安心
してもらつためについていうか……」

「ばあちゃんに、ウソつくのか？」

「たとえばそういうやりかたもあるでしょ、つて話」

「わるい、勇。それは絶対にないよ」

「そこまで言わなくていいじゃん」

「ふー、と勇はほつぺをふくらます。

「そんなに私がイヤ？」

「ちがうよ。だますようなことは、したくないんだ。それに……ばあ
ちゃんがつて、まだずーっと生きるかもしねりだろ？」

勇は何も言わない。

おれは無言でいるのがつらくなつて、つい、

「ところでクリスマスはどうするんだ？」

と質問してしまつた。

「うん」

勇は、ためらいもなくこたえた。

「彼氏ん家ちいく」

「……だと思つたよ」

おれは心の内うちをかくしたくて、反射神経で即答した。

圧倒的なスピード。

なんだつたら、あいつが言葉を言い切る前におれも言いはじめて、一文字か二文字ぐらいかぶつてたと思う。

「ウソばつか」

「ウソじやないよ」

「あー、なんかつまんない。もう自分の部屋にかえろつと」

勇は立ち上がつた。

背筋をシャンと伸ばしたい姿勢、きれいな後ろ姿だ。

「……じやあね」

勇がノブに手をかけた。

その〈手〉を、おれはつかんでいた。

「いくなよ、勇」

「え……」

「いくな。彼氏の家になんか、いくな」

おれは勇をうしろから抱きしめた。

自分は、いつ椅子から立つて、勇に近づき、その体に触ふれたんだろう。

気がつけば、うごいていた。

勇をキヤツチしていた。

「正」

肩こしにふりかかる。

顔は、よく見えない。

「あ、わるい！」

あいつの体から手をはなす。

今のおれの、頭は冴さえてる。

とつさに言いわけができあがつた。

演劇部の練習。

そういうことにしたらいい、つて。

「これ……クリスマス公演の練習で、な。大事なシーンだから、ずっと
気にかかる——」

あいつは笑顔になつた。

そしておれのベンカイをさこぎつて、

「だと思つた」

得意げに、そう言う。

「まじか？」

「まじまじ」ほん、とおれの肩を押す。「女子にさわる口実なんですよ
？」「このエッチ」

「いや……」

「正が『いくな』なんて、私に言うわけないもんね？」

勇は部屋を出ていった。
ん？

いつも明るくハキハキの勇が、めずらしく音声をミユートした？
めっちゃ小さな声。

それが聞こえたのはドアをしめきつた、ほんの一秒钟。

「……でもちよつとだけ、うれしかつたよ……」

一言をさけべ

その日の夜は、あいつを抱く夢をみた。

抱くっていうか、抱きしめる。

数時間前に現実におきたことと同じ光景だつた。だから夢じやなくて、ただの記憶だつたのかもしれない。それを思い出していただけかも。

とにかく、フトンをぎゅーーーっとしてるポーズで、おれは目がさめた。

「おはよ」

勇の様子はふつう。

「じゃ、先いくね」

こいつはだいたい一日おきぐらいで、部活の朝練にでてる。

そういう日は、おれより一時間以上はやく家を出るから、ほぼ朝に顔をあわせることはない。

いまみたいなケースは、けつこうレア。

「……勇」

「髪ぼつさぼさじやん！ アンタ、昨日どんだけばげしい夢をみたの？」

「おまえの夢をみたよ」

一瞬で、かーつ、と勇の顔が赤くなつた。

「おい正……。夢で私に何をしてくれた」

「え」

起きたてで、頭があんま回らない。
体も。

おれは、少しブショウして両手を斜め下までしかあげず、

「いやべつに……」う、うしろから

「バカつ！」

タオルを投げつけられた。

そのまま、勇はおれの横を抜けて玄関にむかう。

いつてきまーす、といつて出ていくまで、そこから見送った。

冬なのにスカートはみじかいわ生足だわで、女子つてほんとにタイ
ヘンだよな。

そんな一日のスタートだつた。

そして放課後――

「古典のせんせつてほんまセツカチよね」

「そうだね」

べつのクラスの教室に、おれはいた。真ん中あたりの席にすわつ
て。

ほかに、もう一人だけいる。
かがみ
加賀美さん。

おれが告白した、2人目の女の子だ。

「再テストはやすぎやし……できた？ みしてん」

「いや、それカンニングだから」

「わかつとらんね！」

ぶるるつ、と首を痛めそうなハイスピードで、首を横にふる。

遠心力で彼女の髪がゆれた。

つねに〈八〉の字に広がつてゐる、毛先がクネクネしたヘアスタイル。

ル。

「正。私はな、じぶんの告白をオッケーしてあげたけど、三日でフつてもーた。なんでやと思う？」

「なんでつて……」理由はいろいろ思い当たるもの、それを自分から
言うのは切ない。
せつ
「うーん……」

「正はピュアすぎんねん！」

と、おれの机から答案用紙をとりあげた。

「な？ いまみたいに大人がみてない状態でのテストつてな、こうい
うことやねん。ぐ自由にカンニングどうぞ〉つてことなんよ。大人
も、私たち卒業させたいんやから

「でも……、ズルして100点とかとつても、あきらかに不自然だろ
？」

「そこは、うまいことやんねん」

おー、と窓の外から運動部のかけ声がきこえてきた。

空は夕焼けで真っ赤。

この時間、勇も体育館でバドミントンをがんばっているんだろう。「ところで正」ほおづえをついて、こつちを見る。「風のウワサでまだフリーってきいたけど、ほんま?」

「ほんま」と、おれは関西弁をマネた。

ふーん、じろじろと視線。

目と口は、すこし笑っている。

「ん……やっぱ、フリーの男つて感じやわ。オーラがない。いまいち燃えん」

なんか似たようなことを、同じ演劇部の片切かたぎりにも言われた気がする。

「恋はやつぱり、略奪愛やで」

ぴくつ、とおれの体のどこかが反応した。

「りや、略奪……」

「彼氏もち、彼女もちからブン殴るつてことや」

加賀美さんはほおづえをやめて、おれをまっすぐみつめてくる。

「正。まさか、自分と同じようなフリーの相手をさがしとんちやう?」

おずおずと「そうだけど」とこたえる。

理由はわからないが、ドキドキしてきた。

「あ・ほ」

「え?」

「ピュアにもホドがあるで。この世のどこに〈フリー＆フリー〉ではじまる恋愛があるん? そんなんあるとしても、中坊までよ。だいたいは、どつちかの恋人がバッティングしてる期間が、ぜ〜〜〜つたいてあるもんなんやから」

「バッティングつて……」

「第三者的にいうたら〈うわき〉の状態」

くちびるに、縦に人差し指をあてた。

リップのせいか、めっちゃブルブルだ。

思い出した。

加賀美さんつてすつぐく、大人なんだ。考え方とか行動が。そこに

ギヤップを感じて、おれのほうも気おくれした。よかつた、つていうのは言いすぎだけど、フツてくれたときに妙に安心したのをおぼえる。

「正。私ねえ」

椅子をがーっと動かして、こっちに近寄った。

そして、おれの両手をとる。

「正にも、うす汚れてもらいたい」

「はい？」

「ドロドロの恋愛を、経験してほしいんよ」

そろつ、と視界のすみで戸があくのがみえた。

教室のうしろから、誰かが入ってくる。

「あー、きてくれたんやねえ」

「…………まあ」

気のないセリフ。

土でよごれたユニホーム。野球部の。

おれも彼も、おたがいに顔を見合させて、あつ、という表情になつた。

でも、すぐに彼は元の顔にもどして、

「あの……あんま……時間ないんで」

「うん。私な」立つた瞬間、おれに向かって片目をつむつた。どういう意味？「キミのことが好き。私とつきあつてくれん？」

コクつた！

電撃のはやさ。

しかも、おれが見てる前で。

しかも、幼なじみの勇の彼氏に。

「……ふざけてんスか」

「ん？ どして？」

「おれ、彼女がいますから。それじゃ」

教室をでていく寸前、ちらつとおれのほうを見た。

おまえに言いたいことがあるんだけど、の空気がすこかつた。たぶん彼は、おれのことをよく思つてないんだろう。

「フランたなう。作戦失敗や」

「作戦？」

「ピュアなキミには、ないしょないしょの作戦やで」
につこり、と加賀美さんは満面の笑み。右目の目尻にあるちいさな
泣きボクロがやや上にうごく。

そこでチャイムが鳴つて、先生がもどつてきた。
もつと話が聞きたかったけど、彼女は逃げるようどこかへ行つてしまつた。

(さて)

今日は部活もないから、まつすぐ家に帰るか。

帰り道で、加賀美さんことを考えた。

夕陽にむかつて歩きながら考える。

おれ、どうして彼女に告白したんだっけ？

最初の朝比^{あさひ}さんにフランたなう……あれは夏休みに入る前の暑い日で

…

「キミ、なんか、さみしそうやなう」

そんなファーストコンタクトだつた。

話しかけてくれたんだ、彼女から。

作戦みたいなを感じない、とても自然な言葉だつた。だからなんかグツときたんだ。胸にささつた。
やさしいな、と素直に思つた。

(!)

急に、ひらめいた。

作戦のこと。

あれつて、もしかして……

(勇をフリーにするつもり——だつたのか?)

おれのために。

だとしたら〈やさしい〉どころじやない。

おそるべき〈やさしさ〉だ。

頭の中に浮かんだ彼女が、につこり、と笑つた。

「ちょ……ちょっと待つて！」

うしろから声。

走つてくる足音。

「小波久くん！」

ふりむくと、勇の彼氏がいた。

ユニホーム姿で、頭はさっぱりとした、丸坊主以上スポーツ刈り未満ぐらいの短さ。

「いつこだけ聞かせてくれ！ 勇ちや……伊良部さんのこと、どう思つてる！」

疑問形みたいに最後の音が上がらずに、怒鳴ったような感じだった。

おれに怒つてるつていうか、「どうとも思つてないよな！」と、念を押すようで。

「勇は……友だちだよ」

「友だち……。じゃあ、彼女に恋愛感情は、持つてないんですね？」
「持つてる」——とは言い返せなかつた。そこは自分でも、確信がないからだ。ただ友だちよりも大事な存在だとは思つている。つきあいが長いし、ゆくゆく家族にもなるわけだし。

おれは彼に言つた。

「持つてない。おれ……キミと勇のこと、応援してるから」

しばらく無言でじーっとおれのことを見たあと、彼は背中を向けた。

おれも背中を向けた。

むこうは勇に近づき、おれは遠ざかる……そんな予感がした。

ビターだ。

にがい大人の味。

おれは……

「やつぱナーケシ!!」

遠いところで、ふりむく勇の彼氏。

犬を散歩させてた人が、突然の大声に肩をびくつとさせた。

下校している同じ学校の生徒も、おれに注目する。

「『持つてない』って言つたの、ナシ!! 取り消す!!」

「……」

加賀美さんの望みは、もしかしたらコレだつたんだろうか。
おれも少し、大人になれたか?

略奪愛のドロドロに、つま先だけはつけてしまつたようだ。

乙女は瞳をそらさない

昼休み。

弁当を食べ終えると、

「ナシつてなにが？」

と児玉がきいてきた。ツンツン短髪と黒ぶちメガネのモテ男。
どきつとする、おれ。

「おい。急になんの話だよ」

と紺野がききかえす。サラッとした髪を清潔感のある長さでキー
プした、どこか上品な感じの男子。実際、実家はそういうお金持ちら
しい。

おれの席を真ん中に、児玉が右、紺野が左に立っている。おれは椅子
子に座つてる。

「聞いた話だけどよお、おまえが『ナシー！ ナシー！』ってさけんで
たつて言つてたぞ？ 下校の途中で」

「ほんとか？」と、児玉に向いていた紺野の顔がおれに向く。
昨日のアレ、やつぱりウワサになつてるみたいだ。

いや待て待て。

あの大聲でさけんだことだけじや、他のヤツには意味はわからない
はずだ。

そ、そうさ。

アセることはない。

「児玉。あれはな——」

「どうせ勇ちゃんのことだべ」

ぶつぶうううー、と脳内イメージのおれが口から何かを霧状には
きだした。

バレると……なんで……

（そうか！ さけんだ〈相手〉か！ あいつと勇がつきあつてるつての
は、みんな知つてるからな）

幼なじみの勇と野球部の彼は、運動部のベストカップルとして校内
でも評判だ。

すなわち彼から勇を連想しても、なんらフンギじゃないってことだ。

んー……。

もはやウソをついてもしようがない、正直にいくか。

「おっ！ それ、まじかよ正!!」

「おお……」

と、ふだん冷静な紺野まで、どこか興奮ぎみだ。

ありのままを説明しただけなのに。

「ついにやるか！ なあ！ NTRがえしだぜ！」

「えぬ……なんだそれ？」

「正は知らなくていいんだよ。それよか、さつさと勇ちゃんとくつつけつて！ なつ？」

「バカが大声だして」

ふわつ、と女子のいいにおいがした。

児玉のとなりに、スカートのポケットに左手をつつこんだ女の子がいる。

男子ならともかく、女子はあまりしないポーズだ。

この子がこういうポーズをよくやるせいで、おれはスカートにもポケツトがあることを知り、それが左側だけにしかないことも知った。「はあ？ 大声だとお？ そんなもん休み時間なんだから、みんな出してつだろーが

「だまれカス」

こんな感じで、彼女は口がわるい。

ときどきこうやっておれたちの会話に入ってくるんだ。
国府田さん。

このクラスの女子のリーダー格。セミロングの髪に、ちょっと茶色がはいってる。

「それより……NTRってなによ。くわしく教えなさいよ」

「おほっ！ おまえ、そういうの好きなクチだつたのかよ！」

「あん？ とポケットに手をつつこんだ姿勢で、ななめ下から児玉を見上げる。

まるでヤンキーだ。

「さつき勇つて言つてたの、伊良部のことでしょ。あの子、野球部とつきあつてるんじゃなかつたつけ？」

「それをよお……」これから正^ががうばうつて話よ」と、児玉はなぜか誇らしげに語る。

「正クンは、伊良部の幼なじみでしょ?」

「そうだよ」

「児玉の話、まじ?」

フリーズした。

まじ、と断言できるほど、まだ覚悟はきまつていない。

こういう優柔不斷なトコも、おれが〈中身が0点〉たるゆえんなんだろうな……。

アイマイにだまつていると、

「私、あの子とおフロはいつたことがあつてさ」と、会話があらぬ方向にすすんだ。

「すつゞゞいキレイだつたんだよ」

「どこが?」と、真っ先に質問したのは、この中でいちばん真面目な紺野だった。おれと児玉の視線に気づき、こほん、と白々しいセキをする。「いや会話のリズムだろ。たまたまだ、たまたま」

「そういうことにすつか」児玉は声をひそめ「で、どこが?」
ばしん、と、両手をつかつて、二人同時に頭にチョップされた。
おれはされていない。

が、当然、おれだつて知りたい。

国府田はひとつため息をついて、

「おかしな想像すんなよ……。キレイつていつたのは、おしりだよ。ツルツルのプリップリでさ。みとれたね。まじで感動した。あれはすごかつたなー」

「どこで見たの?」と、おれが質問。

「夏の合宿。あのね、女バスとバド部が合同だつたから」
「コ一ちゃんよお、そんなこと勝手にいつていののかよ。本人いねーのに。いくらほめ言葉つつても、プライバシーつてもんがあんじや

ね？」

児玉の頭に、またチョップが入った。かけているメガネがすこし下にずれる。

「言わせておいて何をいう、という意味でやつたんだろう。

「おまえが心配せんでいい。私、伊良部とは仲いいもんね。ガールズトークもけつこうするよ？」

へえ、とおれがつぶやいた数秒後、

疑惑の事件はおこつた。

「信じられないよね。あれだけいい体しといて、まだバ…………」

キラン、と児玉の目元が光つた気がした。たんにレンズの反射かもしれない。

「バ」と、児玉がその重要な一文字をくりかえす。

「うう……口がすべつてしまつた……ふかく不覚」

「いや国府田。まだ間に合うぞ」紺野がおちついた口調でいう。「バ……なんだ？」

「ま、まだバ……ドミントンがうまくないなんて……とか？」

「インターハイでてるだろ」

「う……冷静につつこまないでよ」とん、とかるく紺野の肩をおす。頭にチョップはしなかつた。どうやら児玉よりは、紺野のほうに好意があるようだ。

——とか、ブンセキしている場合じゃない。

勇から直接はきいてないけど、つきあつて一年以上になるから、さすがにそういうことは「してる」と思っていた。

でも心のどこかでは、「してない」でくれとも思つてた。

だから、おれはそういう話題になつても、ふかくつつこまないようにしてたんだ。

なんか胸からへそにかけて、体がくすぐつたい。

うれしいことがあると、よくこうなるんだ。

(うれしい?)

その事実におどろくよ。

つてことは、おれはやつぱり勇のことが……

「正。ちょっといいか？」

紺野が親指の先を、廊下のほうに向けている。

おれは立ち上がりつて、ついていった。

同じくついてこようとする児玉は、手のひらでストップさせた。

「ほかでもない。妹のことなんだが」

「優ちゃん? どうかしたのか?」

廊下のつきあたりで立ち止まつた。

正面には白い壁しかない。

「おまえにしつこく言い寄つてるみたいだな。わるいな」

「いいよ。べつに」

「どうもな……原因は浮氣らしいんだ。それもよくよく聞いたら、ただのあいつの誤解だつた。男のほうがパーティーフボイのに出たつていうだけでな。完全にシロだ。いまはヒステリックになつてるので、じきに元のサヤにおさまるはずだから……まあ、うまくかわしてやつてくれ」

わかつた、とおれが言い、話は終わるものと思つたが、

「幼なじみつてのは、むずかしいんだよ」

紺野がおれの肩に手をおいた。

「正。おれはおまえのことを、最高にいいヤツだと思つてる」

「よせよ。まさか、このまま告白でもする気か?」

「きいてくれ。優たちを見ていたら、幼なじみ同士の恋愛が一筋縄じゃいかないのがよくわかつたんだ。ガキのころから知り合つてて、いざ思春期とかになつて、そのままおつきあいしましようとは、なかなかならない。ハードルがあるんだよ」

「ハードル……」

「おまえはいいヤツで、おまけに顔もいい。背も高い。なのに、なんで伊良部さんがおまえを〈選ばなかつた〉と思う?」

わからない。

授業5分前の予鈴^{よれい}が鳴つた。

「きつとそこが重要なんだ。思い出すんだ。むかし、彼女によけいな一言とか言つてないか?」

「よけいって？」

「つきあいが長すぎて恋人として見れない、とかそんなやつだよ」「おれ……記憶力わるいから」

そこまでで、おれたちは教室にもどった。

紺野は「幼なじみの恋愛はムズい」って言った。
ハードルがあるって。

そつから放課後になつて、部活して、家に帰つた。

(よけいな一言か)

どこかで口にしたかもな。おれバカだから。
湯舟につかつたまま、もの思いにふける。

はー、これからどうしようか。

思いきつて勇に告白するか——つて、おれは彼氏もちの女子には告白しないんだよ。

ん?

このルール、いつから実行してるんだつけ?

あえて勇を恋愛対象の外そとにするかのような、このルール。
これ、自分で考えたのか……

「長いぞ」

すりガラスごしに、あいつが見える。

いつものように白Tに黒いショーパン。

「さつさと出てくれる? こつちは部活でめっちゃ汗かいてるんだから

ら」

あいつは、おれに背中を向けてる。

つまり、ガラスごしに、ぼやあくつと勇のお尻りが確認できた。

国府田さんに「きれい」と言わせた、おしおりが。

「勇」

「なあに? おにいちやん」

「……それ誰の声?」
「ただのアニメ声」
ごえ

勇のお尻りが、ガラスに押しつけられてる。お尻り〈だけ〉がだ。

「おれたちの間の、ハードルつてなんだ?」

おしりが、すーっと下にさがっていく。

床についた。すりガラスを背にして、座っているようだ。

「……なにそれ」

「幼なじみから恋愛関係に発展できない理由っていうか、そういうやツ」

「そんなの、いっぱいあるよ」

「たとえば？」

「成長して格差がグーンとひらくパターンとかね。かたや学園一のスーパーイケメン君になつて、かたや内氣で地味な女の子のままで、みたいな」

「勇のことじゃないよな？」

「さ・て・ね」

勇はそのまま出ていつてしまつた。

おれもフロからあがり、更衣室で鏡を見る。

ぬれた髪。

シャープなあご回り。ひきしまつた口元。ベストな形の眉毛に、りりしさも愛くるしさも合わせ持つ目。

ため息がでるほどかつこいい。ここまでレベルが高けりや、べつにナルシストって言われてもいいぜ。

(……これがハードルか?)

ふと考えた。

もしおれがこんなにカッコよくなかったら、勇は、おれと……つきあつて、とつくに一線を……あいつのバ・バージンを——いかん。

いま、めっちゃなまなましい想像をしてしまつた。
下半身のほうで、ムクムクとたちあがる感覚が。

「まだいるの?」

がちや、つとドアを開けて勇が入ってきた。

「……」

視線が下に向く。
まずい。

おれ、まだ服を着てないし、なにより、状態が――

(ええいっ!!)

おれは両手を広げた。

もうかくしても遅いんだ。遅すぎる。

なら堂々とすればいい。

「勇」

「……ヘンタイ!!」

洗面器が飛んできた。

勇がむかしから使つてるやつだ。チョコレートの色で、側面に「ゆう」と白いペンで大きく書かれている。

みごとにヒットした。

〈どこの〉とはいわない。

ただただ、大ダメージ。

「アンタ、おフロでなにしてたのよ、バカつ！」

「…………し、してないって、何も」

「最低！」

紺野は正しかった。

たしかに幼なじみはむずかしいよ。

こんなにつきあいが長いのに、こんなふうに一瞬でキラわれるんだから。

(でも――意外と、しつかり見やがったな)

時間にして10秒くらい。

勇のヤツには、口がさけても言えないけど。

13回目 夜

寒い外を歩いてる。

空には満月。

ぶるるつ、と勝手に体がふるえた。まじで寒い。さつきフロからあがつたばかりだから、その影響もあると思う。

「正。湯冷めするつて」

となりにいる勇は、あきれている。

黒髪のショートヘアがときどき強風にあおられて、ウニみたいになつてる。

「こなくていいって言つたじやん。今からでも家に帰りなよ」

「いやだ」

「なんで？」

びゅう、と風がふいて、前髪で勇の片目がかくれた。

「散歩だよ散歩。べつにいいだろ」

じーっと、おれを下からのぞきこんでくる。

自白したまえ、とばかりに。

(……人気のない夜道を、女のおまえ一人で行かせられるかよ)

しばらく前、おれがフロからでると、勇がおつかいを頼まれていた。なんでも朝食の玉子がないらしい。

勇のお母さんは朝メシとともにおれの弁当もつくってくれてて、ほんのりダシがきいてちょっとぴり塩つ氣けのある玉子焼きは好物のひとつだ。いかない選択肢はない。

おれがいつてくるよ、と言つたんだが、勇はガンコだつた。

「デブショウのアンタが散歩ねえ……。私のことが心配とかじやないの？」

「おれがデブ症しょう? どこがだよ? めっちゃスマートだろ」

一瞬、勇がくすっと笑つた。

勇先をそらすための冗談が、いいほうに作用したぜ。

「くだらない」

そこで会話はとぎれた。

目的のスーパーまで、家から歩いて15分はかかる。勇は自転車で行こうとしたんだが、風が強いからやめとけといつて止めたんだ。ちなみに俺は自転車に乗れない。

車一台とおれるぐらいの道に、同じ間隔で街灯がつづいている。車道は紺色で、歩道はうすい赤色のアスファルト。

と、

「勇。それ何？」

「散步」

勇がダウンジャケットのポケットから右手をだして、まるで握手しているような形で前に伸ばしている。

「あつ。ほらすゞい、ポールの上にのつたよ」

数メートル前を見ながら言う。

おれも視線の先を追う。でも何もない。

「エア散步」

「エア？」

「あつ、そつち行つちやダメだぞ、にやん吉きち」

「しかも猫だつたのかよ……。いや、猫つて散歩しなくね？」

するよ、と夜道に似合わない明るい声をだした。

「体にハーネスつけてね、そこからびーつてリードのばして……」

「へー」

「いま交渉中なの。ね？ 正もペツトとかさ、いいと思わない？」

世話がたいへんそうだよな、というと、勇はぷいっとソッポを向いてしまった。

またやつた。つていうか久々にでてしまつた、おれの会話力のダメさが。

こういう小さな〈ぷいつ〉が重なつて、おれはたくさんの女の子にフラれてきたんだ。

（えーと、今の場合は……まず〈共感〉しないといけないのか。勇は、べつにリアルな話がしたかつたわけじゃないから——）

時すでにおそし。

あいつはエア散步もやめて、すこし早足になつた。

おれとの距離が5メートルくらい空く。あいつは気まぐれに、右に左にとジグザグ気味の歩行。運動部のエースらしい軽快なステップ。ほつといたら、人ん家の^ち塀^{へい}の上でも簡単に上がってしまいそうだ。それこそ猫みたいに。

(いや実際、あそこの家の塀に勇がのぼったことがあったな)

あれは小学生のとき。

勇といつしょに下校してて、なんか「白いトコ」しか歩いちやいけないルールみたいな遊びをはじめて、そういう成り行きになつた。(スカートもおかまいなしで、あんなトコによくのぼつたよ……)家の人に見つかなくてよかつた。

ほんと……なんていうんだつけ、活発な女の子つて……ああ、オテンバだ。

勇はオテンバだよ。むかしも今も。

思い出にひたりながら背中をながめていると、いきなりこっちに向いた。

「…………私をエア散歩させてないでしようね」

「なんでだよ」

「首輪とかつけてさ」

「そんな性癖^{せいへき}ねーよ」

「性癖?」勇は首をかしげる。「あつ、そういうことか。野外プレイみたいなヤツだ?」

しつ、とおれはジエスチャードした。

顔見知りのご近所さんがおおい場所で「野外プレイ」というワードはまずい。

しかもこのあたりは、夕方になるとピアノやバイオリンの音がきこえてくる、けつこう上品なエリア。

「……ねえ」

ささやき声。

上のほうからだ。

「あなた、ひよつとして正ちゃんじゃない?」

右手の家の、二階のバルコニーに誰かいる。

部屋の明かりが後ろからきているせいで、逆光になつて顔はみえない。でも女の子だ。手すりに手をついて、おれを見下ろしている。

「久しぶりね」

「あ……。そうか、お家うちつてここでしたつけ」「おぼえてる？ 小学校を卒業して以来かな。正ちゃん、ずいぶん背が伸びたのねえ」

風にのつて、においが届いた。

彼女の手元から、かすかに煙があがつているのがわかる。

(タバコ……？ あの塔崎さんが？)

信じられない。

彼女は小学校で勉強もスポーツもトップだった、すつぐく眞面目な子だぞ？

「向こうにいるのはラブちゃんかな？ ふふつ、それペアルック？」

「いや、たまたまです」あいつと白いダウンがかぶったのは、ほんとに偶然だ。「ちよつとスーパーに」

「え？ もしかして同棲どうせいしてるの？」

はは……と、おれは愛想笑いした。

「親同士が結婚することになつて、おれたち家族になるんですよ」

そなんだ、と、かくすそぶりもなくタバコを口にもつていく。

おれは表情に出さないようにしていただが、

「おかしい？」『トーザキさん』が、こんなの吸うとか

「んー……」

「ほら、もう行つて。ラブちゃんを……追いかけてあげて？」

ふつ、と体がうしろに動いて、塔崎さんは見えなくなつた。

同じ小学校だつた女子。

おれは13人の女の子にフラれているが、告白は12回しかしていない。

その理由は——

「……」

「どうしたの？ こんなところに呼び出して？」

「……」

「だまつてちや、わからないよ？」

クラスの男子に「お似合いだ」つてハヤされて、なぜかあんなことになつたんだ。

たのんでもいないのに〈告白のお膳立て〉をされた。

「……」

おれはそのとき勇気が出なかつた。

正直に言うと、塔崎さんは初恋の子だつた。

もしかしたらもつと小さいころ、幼なじみの勇にそれに近い感情をもつてたのかも知れないけど、胸をはつて初恋といえるのは彼女のほう。

いるんだな、と思つたよ。

イケまくつてる外見に中身が釣り合つた——パーフェクトな人間が。

彼女はもうもろを察して、こう言い残して立ち去つた。

告白せずして、おれはフラれたんだ。

それが小5の冬。ちょうど今ごろの季節だ。

「おい」

スーパーに入つたところで、勇が言つた。

「ガムでもふんじやつた？ めっちゃテンション下がつてるじやん」

「ちよつとな……」言うか。言えばラクになるかな。「さつき塔崎さんに会つてさ」

「え？ どこで？」

「彼女の家の横をとおつたとき、バルコニーから声かけられた」

「こんなに寒いのに？」

「そりや、タバ——」これはかくしたほうがいい。「た、たまたまだよ。

ふーん、と言つたきり、意外にも勇は話題を深掘りしない。

目的の玉子と、適当に何品かをえらんでカゴに入れて、レジで会計。当たり前のように袋をおれに渡し、あいつは先に行く。

「あつ」

店を出るとき、自動ドアにうつる光の反射をみて、勇がおれのほうにふりむいた。

「私たちペアルックじゃない？」

「それ、塔崎さんに言われたよ。『ちがう』って言つといたけど」

「なんで？」

「え？」

「そこは『ペアルックですが何か？』でしょ？」声のボリュームを落として『『あいつ、おれの彼女ですけど何か？』…………でしょ』

「ウソはよくないだろ」

「ウソだつていいじゃん」

スカツとした笑顔を浮かべて、勇はくるりとターンして前を向く。しばらく歩いて、われながらおそすぎる時間差で、おれは言つた。「ウソでもいいのか？」

ひろい駐車場を、横切るように歩いている。

車は、ほとんどとまつていない。

「じゃあ、今からウソつくぞ？」

「……はい？」

ウソは正しくない。だけど、あらかじめウソつて宣言したんだから、これは正しい。

きつかり12回の告白は、おれを成長させてくれた。
小5のときは、勇気がケタちがいだ。

「勇。おれ、おまえのことが好きだ」

きつと欲しがる

おれは演劇部だ。

だからウソをつくことにかけては、そこそこ自信がある。

「おまえが好きだつたんだ、ずっと」

観客とかカメラの位置とかを意識して、いかにも真剣な表情をつくつてる。

夜の駐車場。

ちようどおれたちの周囲だけ、スポットライトみたいな光で照らされている。

演技のポイントは、自分で「ウソ」だと思わないことだ……つて部の先輩は言つてた。

「うれしい。ありがとね」

ストレートに返された。

まるでほんとの告白の返事みたいに。

予想外のことにはなりますが、がんばつて演技をキープする。

勇のことだから——「はいはい」とか「あーそうですか」ぐらいの冷めたリアクションをすると思っていたのに。

「私も好きだよ」

「えつ？　あ、ああ……」体の内側からカーッとくるものがある。今のおれの顔、赤くなつてないよな？　どうにか冷静をよそおつて「まあ、ウソなんだけどな」と念をおす。

「わかつてるつて」

「おまえも……ウソで返してくれたんだろう？」

「さつ、帰ろつ？」

スカされた。

いや、スカすなよ。

大事なところだろ、おれたちにとつて。

(いまのが、ひよつとして勇の本心——だつたりするのか?)

スーパーの袋をさげて、勇のとなりにならぶ。

でも、もう問いただすことはできない。

すごくムシ返しにくい雰囲気になつた。

そしておれ自身も、イエスでもノーでもないほうがいいんじゃないかという気がしている。

(……ウソの告白なんか、するもんじやないな)

あとちよつとで家がみえる、というところで勇が唐突にいつた。

「このどの日曜日、デートしない？」

◆
「ふうくくくくつ！」

親指と人差し指と小指を立てた手を天たかくあげ、児玉こだまがバカみた
いな声をだしてゐる。

女子はほぼ全員、ジト目。

彼女がいない日が一日もないくらいモテる男なのに、この嫌われようだ。

スキとキライはセットつていうのは、こういうことじやないとと思う
んだが……

「おいカズ」と、紺野こんのが制服のそでをひく。「女子がひいてる。やめと
け」

「お？ しゃーねーな、わかつたよ……」と、今度は両手をあげて
「ふおうくくくくつ！」

「やめろつて」と、おれもなだめた。

「んだよ、ノリわりーな、てめーら」

ぶすつとした顔で児玉が椅子に座る。

6時間目のホームルームに、学期末恒例のクラスレクをやつてい
る。

先生が発表したときはブーイングもあがつたが、やりはじめるところが意外に盛り上がつた。

イスとりゲーム。

「もつてる男つてこーゆーことなんだよ」と児玉は上機嫌だ。「つぎ
準じゅんケツだべ？ じゃ、あと2回で優勝じやん。負けねーぞ、正！」

なんの奇跡か、おれも勝ち上がつていた。

スポーツじゃないにしても、こういう体をうごかす遊びはめつぽう弱いのに。

そして――

「うそだろ」

おれが、優勝してしまった。

賞品は先生がUFOキヤツチャーでとつたっぽい、ぬいぐるみ。レアって言つてたけど、ほんとかどうかわからぬ。三毛猫が海賊船の船長みたいなカツコしてる。

放課後。

教室を出た女の子を、おれは追いかけていた。

「ま、待つて！」

「……え？」

小柄な背中がふりかえる。

同じクラスの三城みきさん。

下の名前は、むずかしい当て字で愛惠めぐみ。

おれはいつもひらがなをイメージして「めぐみ」と呼んでいる。

「私に何かご用？」

「いや、その」

ふつ、と口元が笑つた。

目は、よく見えない。目がかくれるくらい前髪をのばしているからだ。で、その前髪をほぼ横一直線に切りそろえている。

彼女の性格も、すこし髪型に似て、誰かのうしろにかくれがちで控えめ。

口のわるい児玉なら、彼女をようしやなく「陰キヤ」と呼ぶだろう。「移動しようか。ここじゃ教室も近いし」

「べつにおれは、誰かに見られたつていいよ」

「正がよくても、私がダメ」

さらつとおれを呼び捨てにした。

クラスの女子がみたら、さぞおどろくだろう。「あのおとなしい三城さんが!」つて。

なにも不自然なことじやない。

おれたちは、つきあっていたんだから。

めぐみは特別教室がならぶ校舎の非常階段まで歩いた。なるほど、ここなら誰にも見られることはないだろう。

「これ」

おれは、イスとりゲームの賞品をさしだす。

「決勝で、わざとおれに負けただろ？」

「なんの話かな？」

「どうせ自分が勝つても盛り上がりがないから、とか、そんな感じだろ？」

「へえ、正にしてはいい推理したね」

「これでも……最近小説とか読みはじめたからな」

くすくす、とめぐみが口元に手をあてて笑う。

冷たい石の階段に、スカートも下にしかず、下着をじかにつけて座っている。つよい風がふくたびに、チラツ、としそうで気になつてしまふ。おれは手すりに背中をつけて立つたままでいる。

「では、もらつておこう」

細い手がのびて、ぬいぐるみをつかんだ。

よしよし、と〈三毛猫の海賊〉の頭をなでながら、

「いや、じつはコレ、すつづといほしかつたんだよねえ。だから運動不足のオタの体にムチうつて、がんばつたんだよお！」

「それじやあ、どうして決勝でおれに勝ちをゆずつたんだ？」

「んー、あそこはさあ、人気者の正が勝つたほうが絶対にいい場面だったから。地味でくらい私が優勝するよりかは、ね……」

「もし児玉だつたら？」

「全力で勝ちにいつてた！」

あはは、と彼女は無邪気に笑う。

教室では、こんな明るい顔を見せたことはない。

軽くおしゃべりする相手はいるみたいだけど、親しい友だちはクラスにはいないみたいだから。

「まーでも、しかし」じろじろ、とおれの全身をながめる。「どこに出しても恥ずかしくない、ダントツのグッドガイですな。私なんかとは

世界がちがうわ……

「そんな言い方するなよ」

「では……」

「待てよ。せつかくだから、少し話さないか？」

「……」で、めぐみがみごとなカンの良さをみせた。

「恋愛相談？」

うつ、とおれの心がモロに顔にでた。

「相手は誰かニヤ？」と、ぬいぐるみを斜めにかたむける。

「いや、その……」

「かわいい幼なじみちゃんだニヤ？」

ニヤ？と頭の中にあらわれた勇まで首をかしげた。

もう観念するしかないな。

「あのさ、幼なじみが彼氏彼女に発展しないパターンって、何が原因だ

と思う？」

「うまくいってないの？」

「まあ……一般論つてことで」

ニヤニヤしてる。

この状況を楽しんでいるようだ。

「シビアに言うと、どつちかの魅力不足」

「ほかは？」

「仲のいい関係を壊したくなくて、どつちからも一步をふみだせない
パターンとががあるよね」

「で、でもさ」

近くに誰かが歩いてくるのを感じて、声を小さくする。

「たとえば相手にすでに彼氏がいたら、ふみだせなくとも当たり前だ
ろ？」

「ノウ！」と、めぐみが声をはりあげる。「好きならうばいとる。これ
常識」

「そんなの……彼氏にわるくないか？」

「本当に勇ちゃんのことを思いやつていれば、彼だつて自分から身を
ひくでしょ」

「えらうと実名をだすなよ」

あつはは、と足をバタバタさせて笑った。

スカートの生地の向こうに、わずかにのぞいたのは〈黒〉……意外というか、キヤラどおりというか。

指で目をこすりながら、

「まー、はつきり言つて当事者じゃないとわかんない。私には幼なじみくんもいないし、彼氏も……今はいないし」

「今は」をずいぶん強調して言つた。しつかりおれの目を見ながら。

そう言われてもな……フツたのはそっちだし。

おれが彼女に告白したのは今年の4月末。で、ゴールデンウイークに2回デートして、連休明けにフラれた。

理由は、はつきりとは告げられていない。

デートの服装がダサかつたからかな……と勝手に想像している。

「恋愛とはどこのつまり、イスとりゲームなのだ」

めぐみはそんなことをドヤ顔で言う。

風でゆれて、長い前髪の下の目がチラ見えした。

ぱつちりとした、手にもつてるぬいぐるみそつくりの大きい目だ。
重要なのはタイミングと、すばやさと、力強くでもとつてやろうとう気合」

「おれ……まだイスに座れるかな?」

「逆に聞こう。どうして正は、今日のゲームで決勝までのこれたのかな?」

「えつと、そのぬいぐるみが——

ちゅつ、とおれのほっぺに、猫の口があてられた。

「勇ちゃんなら欲しがると思つた。そうでしょ?」

そうだよ、と心でおれは即答していた。

だけど、そんなふうに答えたら、それを受け取つてもらえなくなる。「ほら。あげる」おれの手をとり、ぬいぐるみをつかませる。「私からのセンベツ。そのかわり、ちゃんとつかまえてあげてね?」手をひらひらふつて、めぐみは行つてしまつた。

結局、彼女にあげたものが、そつくりそのまま帰つてしまつた。

——その夜。

「まじ？　いいの？　やつたー!!」

おれがプレゼントすると、勇はよろこんだ。
が、それもつかのまで……

「……どういうつもり？　私の私物、なんか壊した？」
めっちゃ疑いぶかそうな目になつた。

「いや言つただろ、クラスレクで偶然勝つたから……」

「ウソウソ」

パツと笑顔にもどる。

「ありがと。大事にするね」

「ああ。ちゃんと添い寝してやつてくれ」

「正と？　いいよ」

近くで話をきいていた勇のお母さんが「なつ！」という表情になつた。おれの父さんは平然としてる。

「正が私にプレゼントなんて、明日は大雨かな？」

ちょうどテレビでは天気予報をやつていた。

おれたちが住んでいる場所には、勇が口走ったとおり、傘マークがついていた。

果報は寝てまつて

デートが近づいている。

幼なじみのあいつは「お出かけ」でも「外出」でもなく確かに「デート」って言つた。

(勇^{ゆう}のヤツ、どこまで本気なんだか……)

金曜日の朝。

おれは電車に乗つてゐる。勇は朝練がある日だから、今ごろは体育馆で汗を流してゐるはずだ。

つり革をにぎつて、片手でスマホを操作する。

しらべてゐるのは〈デートの常識〉。

(なになに……レディーファーストをやりすぎるな？ 女子は自分をひっぱつてくれる、多少オラオラ系の男子が好き……これほんとか？)

お店のドアを開けてあげたり、男は車道側を歩くつていうのは、必ずしも正解じゃないらしい。

デートっていうのは、なかなか奥がふかいんだな。

なにが正しいかを考えはじめたら、それこそキリがなさそうだ。
ま、でも……相手は勇だし、とくに気をつかう必要もないか。

おれはスマホをポケットにしまつた。

(とはいゝ、デートな以上、やっぱ緊張するな……)

窓の外はどうしゃぶり。視界が白くかすむぐらい、めっちゃ雨がふつてる。

(ん?)

いま、なんか……。

気のせいいか？
伊良部^{いらぶ}だろ？」

気のせいじゃない。

おれの幼なじみの、めずらしい名字が話題にでてゐる。

声がした方向をみると、同じ学校の生徒がいた。入り口のそばでドアに背中をつけて立つてゐる。

おれは耳に全神経を集中した。

「おれ、彼氏のほうとめっちゃ仲いいよ」

「まじかよ」

片方は、ヘアスタイルから考えておそらく野球部。もう片方は、ちよつと茶色い髪。

「すげーの？」

「なにがだよ」

「いや、バド部のエースだろ？　スポーツ選手ってヤバいぐらい激しいって言うじやん」

「だから、なにがだよ」

と、すこし笑ったほうが野球部のヤツだ。

茶色い髪のほうが前髪を指でととのえながら、

「やることはやつてるっしょ？　そいつら、つきあつて一年とかだろ？　いや……なんかガチガチにかてーつて。そういうこと、全然させてもらえてないつてよ」

「まじ？」

「キスでさえ、なんか拒こばまれるつてグチつてた」

「ないわー。それさあ、つきあつてねーんじやねーの？　男のほうが思ひこんでるだけつてオチじやね？」

「つきあつてるんだよ、これが。でな、クリスマスに彼女を家によぶつて——」

あつ。

しまつた。あまりにもガン見してたもんだから、こっちに気づかれた。

おれは学校じゃ有名で、おれと勇の関係性も同じくらい有名。

「……」

二人とも急に静かになつた。

おれも、そしらぬ感じで、しまつたスマホをまた取り出して画面をみるフリ。

「……」

(まいつたな)

しかしインパクトのある内容だつた。

勇は……まだだつて？

キ、キスも？

「うれしそうだな」

一瞬、誰がしゃべったのかわからなかつた。

が、よく見ると目の前の座席に、ゆたかなバストを持ち上げるようにして腕を組んだ元カノがいた。

「水緒さん」

電車がとまつて、ちょうど彼女のとなりがあいた。ホコリがたつほどバンバンとたたき、おれに早くすわれとアピールする。

「……失礼します」

「うれしそうだな」と、さつきのセリフをリピート。「やはりおまえには、あの幼なじみしかいない」

「勇のことですか？」

「彼氏が極端なオクテでもないかぎり、つきあつて一年でキスなしは、なしだ」

がたん、と電車がスタートする。

そんなにゆれてないのに、水緒さんはおれにぎゅーっと体を押しつけ、そのままおれの肩に頭をのせた。

鼻からスースと、幼稚園のときの女の先生と同じな、なつかしい香りが入つてくる。

「水緒さん？」

「このほうが話がしやすい」いや絶対ウソだろ。「それで……おまえはまだアクション起こしていいのか」

いつのまにか彼女にスマホをうばわれていた。

なれた感じで操作して、つきつけられた画面には、「なんですか、これ？」

『卒業』という古い映画があつてな。そのワンシーンだ

白いウエディングドレスの女の人、男の人と走っている。

どつちも、いい笑顔だ。

「幼なじみを、結婚式当日に新郎からうばいとるというストーリーで、
今のおまえにぴったりだ」

「はあ……」

「アクションを起こせ、小波久。私がなんのために、図書室であんなことをしたと思う？ どうして貴重な休日をつぶしてまで、ラブホテルにおまえをさそつたと思っているんだ？」

つてことは、図書室のアレは確信犯だつたのか……。

この人の狙いはなんだ？

「幼なじみをモノにしろ。それだけだ。私が望むことは」
肩に頭をのせたままで言い、おれのひざに指で〈の〉の字を書き続ける。

へんな気持ちになるよ。

「勇には彼氏がいて——」

「関係ない」

「それは……正しいことですか？」

ふ、と小さく息をふきだした。

そして水緒さんは、どこかさみしそうにこう言つた。

「やはり、私はおまえがきらいだよ。だが、そのムクな心はうらやましい……」

そこで目的の駅について、水緒さんは他人のようにさつさと立ち上がりつて行つてしまう。

◆
ドアがあいたら、雨の音がめっちゃうるさかつた。

ぬれたぬれた、とやかましい児玉こだまの相手をしていたら、

「お客さんだよ」

女子の一人がおれの肩をたたいてそう言つた。

正クンにさわっちやつたー！ と、楽しそうに友だちのところにいく後ろ姿。

(お客様……？)

廊下にでた。

「マリちゃん」

バドミントン部で勇とダブルスを組んでる女の子。

まだ着替えてなくて、体操服のままだ。もう一時間目がはじまるのに。

……すゞくいやな予感がした。

「ど、どうしたの？」

「あのね、勇がね」どくんどくん、とおれの心臓が少しあはくなつてた。

「練習中にケガしちやつて。今日は早退するから」

「ケガ？」

「うん。アキレス腱けんをね……」

デリケートなところじやないか。

勇がリビングでくつろいでるとき、その部分を自分でマッサージしていることがよくある。

デリカシーもなく、

「切つた？」

と、マリちゃんにきいてしまつた。髪切つた？ みたいにあつさり。

アキレス腱を切るなんて、部のエースのあいつにとつては、ただごとじやないのに。

「あ。大丈夫」

そこで彼女がほほ笑んでくれて、ちょっと安心できた。

「痛みがでただけだつて。なんかアキレス腱炎けんえんっていうみたい。炎症だつて。でも切れちやう原因にもなるから、大事をとつて安静にしてる。いま保健室にいるの」

「まじか」

あ、と体を動かしたおれを見て、マリちゃんが口を大きめにあけてつぶやいた。

頭のわるいおれが、その一瞬ですべてをさとつた。

（保健室に……おれが行つちゃいけないんだ。勇の彼氏がきてるんだな……）

マリちゃんに礼を言つて、おれは教室にもどつた。

一時間目が、はじまる。

好きでも嫌いでもない現代文の授業。

(勇)

ほんとに大丈夫なのか？

健康のカタマリみたいなあいつが学校を早退なんて、はじめてのことだぞ。

でも、勇のそばには、れつきとした彼氏がいる。

おれが出る幕じやない。

おれの出番じや、ないんだよ…………

「せ、先生！」

おれは手をあげた。

「トイレにいっていいですか？」と。

くすくす、みんなに笑われる。

すぐに許可をくれた。

おれが行く先は決まっている。

おれは『卒業』とかつて映画はみたことないけど、あの男の人も、アクションを起こす前はこんな気持ちだったのかな。

ドキドキする。

まだ彼氏のヤツはいるだろうか。

(ええいつ!!)

力任せに保健室のドアを横にひいた。

勢いがつきすぎて、あわててドアをつかんでとめる。

「……あれ？」

保健室の先生らしき机の前には、誰もいない。

ベッドのそばにも、いない。

ベッドには――

「勇。大丈夫か？」

後頭部をこつちに向けて寝ている女子は、あいつだ。
髪……いや、つむじの形でわかる。

「寝てる？」

返事はない。

かんじんのアキレス……足は、ふとんでかくれてるな。

「早退するんだろう？ 家につくまでは寝るなって」

「……んー」

起きた？

勇が寝返りをうつて、顔がこつちに。

目は、しつかりとじている。

「切れなくて、よかつたな」

小さな寝息のみで、なにも言つてこない。

「なあ、勇。おれたちも『卒業』するか？」

もし起きてたら、それどういう意味！ つて聞き返すだろう。

そうせざるをえない、突拍子もないセリフだ。

「んっ」

ふとんをひつぱつて、顔が半分くらいかくれた。

おれは近寄つて、もつと近寄つて、勇の顔をかくすふとんを手にと
る。

(キスしていいか?)

とは、口にできない。

いつたい何を考えてるんだ、おれは。

実際、寝てる女の子に同意もなくそんなことをしたら、ガチの犯罪
だぞ。

勇なら——許してくれるか？

「……」

ふとんを、そ一つとひく。

あらわれる、横向きに眠る勇の姿。ブルーのジャージで、胸元まで
ジップパーをさげている。

また寝返りをうつて、あお向けになった。

「……」

外は雨。

窓は部屋の湿気で真っ白になつている。

きこえるのは雨音だけ。

口を近づける。

もつと、そばに。

勇の毛穴がみえるほどの距離まで。

あと数センチ。

そこから先にすすめない。

たぶんこれは時間の問題じやない。一時間かけたって、きっと体勢はこのままだろう。

心の問題だ。

おれは、勇にふとんをかけてやつた。ゆつくり休ませてやることにして、保健室を出る。教室にもどると、

「おいおい、ずいぶん強敵だつたみたいね！」

と、児玉が大きな声で言いやがつた。

そこそこの笑いがおきる。

いいんだよ。おれが笑われたり、トイレで大してきたつて思われることは、べつになんでもない。

それより――

(正しかつたのか？　おれの選択は？)

(正しいじやん。ノーガードの女の子に無断でキスするなんて、男のすることじやないぜ！)

(でも相手は勇だ)

(でも、他人の〈彼女〉だろ？)

くそつ。

頭におれが何人もいるのに、バシッと答えが決まらん。

昼休み。

児玉と紺野^{こんの}が連れだつて手洗いにいったところで、勇からラインがきた。

「あー。しくつたー。朝練でケガして早退したよう」

「知つてる。マリちゃんからきいた」

「レスはやつ。あ、そつか、いま昼休みか」

「お大事にな。明日は休むのか？」

「んにや、一応出席の予定だね」

そこでやりとりが終わつたと思つて、おれはスマホをしまつた。
ぶるるつ、とポケットの中でバイブした。

勇から追加のメッセージ。

(!)

冷や汗がでそだつた。

やつぱり、おれの判断は、まちがつてなかつた…………か？

「どうで『卒業』つて、なあに？」

彼氏の気分

そして、デートの日がきた。

あいつのアキレス腱の具合はというと……
「問題ない」

と、即答。

まあ、痛めた次の日も、ふつうに登校してたからな。

「駅で彼氏に待たれてるから、時間ずらしてね」と、おれが20分はやく登校したのが昨日の土曜日。

「だから、はやく教えてよ。『卒業』ってなんの話なの？」

幼なじみの勇は、ちょっとイタズラっぽい表情でおれにきく。

まだ午前中で、天気は晴れ。

駅のホームのベンチに座つて、二人で電車をまつていて。

「いいだろ、べつに。そつちこそ、タヌキ寝入りなんかするなよ」「話そらしちゃつて

「電車きたぞ」

「あ。これじゃない。次の快速」

電車の風圧で、となりの勇のにおいが流れてくる。同じもの食つて、同じシャンプーつかつてるのに、なんでこんなにもおれとちがうんだ？ ていうか、気がつかないだけで、おれも自分の体からこんなに「いいにおい」が出てたりするのか？

「……どうしたの。服のそでをクンクンして」

「おれと勇のにおいって、ちがうか？」

なぜか顔が、ちょっと赤くなつた。

「ちよ、ちよつと待つて。私の体からヘンなにおいがしてるつてこと？」

「そんなにアセるなよ。してないよ」

ぐつ、とひじで強く押された。

「13人にフラれた理由がよーーーくわかりました。やっぱ正つてバカ……っていうか、コトバがよくない」「なにが？」

「今のがと『キミはいい香りがするね』って甘い声で言つとけばいいの。自分とのちがいなんかどうだつていいから。正ほどカツコよけりやね、それだけでキュンてするんだよ」

「そんなことより『卒業』。いいかげんに教えなさいよ」

なんかダメ出しされてるが、うまく話はそらせた——はずもなく、人差し指をつきつけて、有無をいわせない顔つきだ。

顔といえば、あんまりふだんと変わらないように見える。

個人差はあるが、デートつていつたらだいたい女の子はメイクをしてくるもんだ。おれの経験ではそうだった。

勇はガチガチに化粧しない派か？ ナチュラル派？

質問してみたいところだが、地雷の可能性もあるしな。やめておこう……。

「ねえ、答えてつたら」

「あーもう！」おれは勇の肩をすこし押した。「わかつたよ、言うよ。そのまんま。そのまんまの意味だよ」

「え？」

「思いきつて男女の関係になろうつてこと。つまり卒業つていうのは、おれからしたら〈童貞〉で……」

「は、はあ？」

「あのまま保健室でエツ」

ちつ！ と、曲がったおれの口から飛びでる。勇のヤツ、人差し指をほっぺに押しつけやがった。

「……スケベ」

「なんかムラムラしたんだよ」

そのあと、入院してるばあちゃんの話になつて、お互にしんみりした。

またお見舞い行こうね、と勇が言う。

ほんとは今日いきたかったんだけど、検査とかであまり都合がよくないらしくて、行けなかつた。

「ばあちゃん、おれと勇のこと、どう思つてんのかな？」

「仲のいい友だちでしょ」

だよな、とつぶやいたあとに電車到着のアナウンス。

おれたちはベンチから立つた。

（スケベ認定はされたが、そのかわり『卒業』の話はウヤムヤにできた
な……）

ひそかにホツとする。

実際、幼なじみを婚約者からうばいとるストーリーだなんて、幼な
じみで彼氏アリの勇には言えないよ。

車内はまあまあ混んでるけど、ひとつ座席を確保できた。
もちろん勇に座らせる。

（おれは立ってるし、雑音が多いから会話しようにも――）

スマホがふるえた。

「これで、おしゃべりでもする？」

ラインだ。

いいアイデア。

「今日は、どこに行くんだ？」

「今ごろ？ もつとはやく質問しろ！」

「いや、今朝からおまえ、卒業卒業つてうるさかつたから」

「スケベ」

「それはもういいだろ」

「プレゼントを買いに行くんだよ」

そこでおれの手がとまった。

いつになく冴えるおれの頭。先読みができた。

デートって、そういうことか……。

「おれとおまえの彼氏じや、サイズがちがうぞ？」

「服じゃないし」

「じゃ、何」

「てぶくろ」

なるほどな。

高校生で、彼氏へのプレゼントだつたら、ぴつたりだ。

おれはスマホをにぎつたままで、次のメッセージが思い浮かばな
い。

すると、

「男目線で、アドバイスちようだい？」

と送られてきて「ああ」と返した。

勇にはわるいが、すこしテンションが下がった。

そこを見抜かれないよう、

「おつ！ これとか、すげーいいぜ？」

お店では、あえて元気がある演技をした。

こういうときのための演劇部だ。コツはハキハキした発声と、あざといぐらいのジェスチャー。

デパートの中のお店で、勇が品定めをしてる。

（すげーいいけど……）

おれの評価にウソはないが、なかなかの値段のモノだ。

「いや勇……これたけえだろ」

「いいの。正だつて『いい』つて言つたじやん」

勇はそれをレジにもつていった。

その背中を見るとフクザツな気持ちになる。

（クリスマスに勇はあのてぶくろをプレゼントして、か、体も――）

なんだこの感情は。

くやしいっていうのも、ハラガたつっていうのも、どつちもちがうけどそれに近くて。

いつたん深呼吸するか。

そもそも、なんでクリスマスに彼氏ん家なまなんかいく？

去年みたいに、家族4人でしつとりすごそうぜ。

（きれーなラッピングだな）

ピカピカした銀色のふくろの口を、赤と緑のチェックのリボンで結んでいる。

そのあと駅地下で昼食にパスタを食べて、いつしょに映画をみにいった。

昼食のとき、

（いつもの白いダッフルの下、みたことない服きてるな……）

と気になつていて、

「そんなの持つてたか？」

上映前の明かりがついてるときに、おれはきいた。

「最近、買った」

「へー」

ちつちやめのベストのような形。色は赤。

それを、インナーのうすいピンクのタートルネックの上に合わせている。

「ベスト？」

「ちがう。ビスチエ」ぴつ、とそれを指でつまみながら言う。「じつは下着だよ」

「下着？」

「スケベ」

ひざにのせたダツフルを引き寄せ、体をかくすような仕草。はは……と愛想笑いする。

(勇なりに、おしゃれはしてくれたのか)

と思えば、やつぱり今日はデートだという気がしてきた。

その後の本編の約二時間、おれは横目でときどきとなりの勇の様子をうかがつた。

「まあまあかな。正はどうだつた？」

「うん」

「じゃなくて、感想は？」

途中で寝た、とこたえたら、勇はあきれた。

(おまえを気にしすぎててストーリーを見失つたんだよ)

映画館はエロいことする場所だ、つていう児玉の言葉を思い出したのもいけなかつた。

ようするに気が散りすぎたんだ。

「じゃ……帰る？」

「そうだな」

駅までの道をあるく。

当然、手をつないだりはしない。男女二人がならんで歩くなら、手をつなぐのが当然なんだが。

けつこう人通りがはげしい。肩を寄せ合わないと、他人とぶつかりそうだ。

そんなおれの心を読んだかのように、

「腕、組もうか？」

「やめとこさせ。恋人同士でもないんだから」

「まー、そういうわづ……につ！」

がしつ、といきおいよく左腕をとられた。

腕に、ほわん、とした感触があたる。でもぶあついコートごしだから、うれしさは半減。

オルゴール風のクリスマスソングがきこえてきた。

駅に近づくほど、お店も人も増えてゆく。

すれちがつた人を、肩ごしにふりかえった。勇も同じようにそつちを見る。

「めずらしいな。はじめて見たよ、グレーの学ランなんて」

「あー、あの制服は——」と、学校の名前を言う。「で、めつちやスポーツ強豪校」

「なんで知つてんの？」

「よく練習試合で行つてるから。また強いんだよね、こここのバドの子がさ」

なんてことない、やりとりだつた。

一晩寝たら忘れるぐらいの。

が、よくよく考えれば、ムシのできない内容だつた。

とくに〈練習試合〉つてところが。

「——あ

声をあげたのは勇。

おれもおどろいた。こういう出会いがしらを避けるために、学校から遠い場所をえらんだはずなのに。

おかしくないんだ、彼がここにいても。

野球部だつて、他校との練習試合はする。

遠目に同じ学校の制服の集団を見かけたとき、ちゃんと遠回りすべきだつた。

「……どういうことですか」

「あ、こ、これはね。えつと」

めずらしい。勇が動搖してる。

こいつの、こんなところは見たくない。

おれは胸をはって言つた。

「親へのクリスマスプレゼントを買つてたんだ。いつしょに。おれたちは親同士が結婚する予定だから」

「それは……知つてますけど」

「誤解しないでくれ」

「そう言われても」彼が横顔を向けた。試合でケガしたのか、ほつぺに少しすりキズがある。

「おれがいつしょに行こうつて誘つたんだ。まじで」

「腕、組んでもせんでした？」

「それもムリヤリたのんだんだよ。彼女がいないから、せめて気分だけでもと思つてさ」

いくぞー、と彼氏が部の仲間から声をかけられた。

にらむ、つてほどじやないけど、まつすぐな視線をおれに向かつづけてる。

「勇ちゃんは、おれの彼女ですから」

捨てゼリフみたいに言つて、彼は行つた。重そうなスポーツバッグをかかえてる。もしかして、学校にもどつてからも、まだ部活とかするんだろうか。

勇は、下を向いている。

おれの背の高さだと、こいつのつむじがよく見える。

「あいつらと同じ電車になるのもなんだし、どつかで時間つぶすか？」
「正」顔が、あがつた。ただの光の反射かもだが、目がうるんでいるようにも見える。「あの、ありがと……」

「いいよ」

「カツコよかつたね」

それはおれのことなのか、それとも、彼氏のことなのか。
きちんと「どっちが？」って確認しとけばよかつたな。
駅まで迎えに来てくれた勇のお母さんの車の中で、そんなことを考
えたんだ。

背中の駆け引き

じつは連絡先を知っている。

勇の彼氏のケータイの番号とメアド。

朝、はやめに登校してあんまり人のいない教室で、スマホをながめながらおれは迷っていた。

窓の外はくもり。

(連絡してみるか)

昨日の日曜日、デートの終わりぎわにあんなことがあつたから。いやいや、あんなことがあつたからこそ、逆に連絡とかしちゃいけないだろ。

うーん……。

登録名はシンプルに名字だけ。

ガイイ——じゃなくて、これは外井そといと読むらしい。

「ずいぶん早いじゃないか、正」

「おっす」

友だちの紺野こんのがやつてきた。

「コミ英えいの問題でもあてられてるのか?」

いや——と、同居する勇ゆうより20分もはやく家を出なければいけない理由を説明する。

「へー、登校デートか。彼氏にすれば『ケガ人につきそう』っていう、かつこうの口実ができたわけだ」

「あ、あのさ」

「どうした?」

さわやかな笑顔を浮かべ、すこし顔を斜めにする。

おれほどじやないにしても、みことなイケメンだ。

清潔感があるマジメ男子系のかつこよさ。おれどちがつて運動神経もいい。

背も高いんだよな。

ここにいない児玉こだまもそうだが、よくツルむおれたち3人は、みんな175センチ以上はある。だから廊下を歩くとめつちや目立つんだ。

「わるい、ちょっと」と、教室のスミに移動した。あまり人に聞かれたくない内容だからだ。「たしか紺野つて、一年のとき勇と同じクラスだつたよな?」

「そうだよ」

「つてことは、外井も知ってるだろ?」

勇と彼氏がつきあいはじめたのは、一年前の夏。ちょうど梅雨明けのときぐらい。

同級生ですぐ気が合う男子がいて告白されちゃってさ、というのが、つきあいはじめた理由らしい。

「どういうヤツか、教えてくれないか?」

「おいおい。探偵ごっこでもはじめるつもりか?」

「いいヤツ?」

「それは、おれの口からは何とも言えないよ。でも、まあ、わるいヤツではないな」

聞けば、何回かいつしょにカラオケやボーリングに行つたことがあるらしい。

「ただ、その……難点をあげるとしたら、なんか〈距離がある〉感じつか、うすいカベがある感じみたいなものはあつたな」

「どういうこと?」

「急にふらつと一人になるとか、そんな感じのヤツなんだよ」と、言われてもイマイチよくわからぬ。

実際に会つたほうがはやい気もしてきた。

「妹のことなんだけど」

紺野は話題をかえた。

「ほとんど元サヤにおさまりかけてる。ちゃんと誤解もとけたらしい」

「そういえば……」何日か優ちゃんを見てないな

「いろいろあつても、つきあいの長さはウソをつかないってことだ」

ぽん、とおれの背中をたたいて、紺野はさわやかに笑つた。

まるで「おまえも幼なじみとがんばれ」って言われてるみたいだつた。

(ふらつと一人になる——か)

勇のヤツは、あいつのそういうところを好きになつたのか？
なんだつけ……孤独を好む、一匹オオカミ？
たしかに、おれには無かつた個性かもしれないな……。
で、放課後。

意味もなくぶらりと一人で歩いている。

勇の彼氏をマネして。

「ちよつと！ ここ男子禁制！」

おれは声がでなかつた。

おどろきだ。

だつて目の前に、いきなり水着姿の女の子があらわれたんだから。
ただ残念なのはスク水やビキニじゃなく、ガチの水泳選手が着るガチ
の水着だという点。下半身もハーフパンツみたいな形になつてゐる。
「水泳部の女子更衣室の前で」片手を腰にあて、すこしあごをひく。

「何をしてたんだ？」

「ごめん。気づかなかつた」

「入り口の看板にも？ 〈男子はアツチ！〉つてでつかく書いてたで

しょく？」

「一匹オオカミに、なりたかつたからさ」

わけわかんない、と女の子の眉尻まゆじりがさがつた。

「アンタを見つけたのがアタシでよかつたぞ？ 正ちゃん」

両肩をつかんで、くるつ、とおれの体をターンさせる。

久しぶりに「正ちゃん」と呼ばれた。

元カノの、彼女の口から。

「ほら歩いて」

背中を押される。

「えつ、こつちつて」

「せつかくだからプールみてけ。今の時間、誰もいないから」

消毒のにおい。

高い天井の室内プールにつれてこられた。

きゅう、つと身がちぢむ思いがする。

運動のできないおれは当然およげないからだ。水に顔をつけるのも苦手。

「ストレッチ手伝つて。ほら背中押してよ」

手のひらから水着^びしに体温がつたわる。

「もつと強く。もつと！ ゲーっとやつて」

このマイペースな感じ、いつものノゾミちゃんだ。

望むに海で、^{のぞみ}望海。

水泳部のエース。

「……うん、こんなもんでいいか」

高いところにある、横一直線のすりガラスは真つ赤。夕焼けの色だ。

そのせいか、彼女のショートカットまで、赤い色にみえた。

勇によく似た髪の長さ。

性格とかも、どことなく似てる。

「ところで正ちゃん、アタシまだ許してないよ」

うつ、とふいうちをくらつた。

「幼なじみに似てたから好きになつた、なんて——」ゆっくり歩いて、おれの背後に回る。「ふつう言う？ しかもその幼なじみつて同じ学校だつていうし」

おおくを語る必要はないだろう。

今このコトバに、おれがノゾミちゃんにあえなくフラれたすべてがある。

おれの背中に彼女の手があたつた。

「アタシはその子のかわりじゃ……」

「ノ、ノゾミちゃん？」

「ありません、よつ、と！」

「うそだろ！」

お——押される！

プールサイドから、一気に、プールまで。

おれ制服だぞ？

ポケットの中には、スマホだつてある……つていうか、今、冬じゃ

ないか。

「ちよつ、待つて！」

「あやまる？」

「いや」トツトツトツと足がどんどんプールに進みながらも、おれはおちついて言う。「あやまらない。それを言つたおれの気持ちに、ウソはないから」

ぴたつ、とストップした。

おれの両足のつま先は水面の上にあつて、まさに危機イツパツ。

「はうあ、たまんないね」

制服をぎゅつとつかんで、ひっぱる。

おれの体が反転して、ちょうど彼女と至近距離で向かい合う体勢になつた。

「…………身代わりでもよかつたかな、つて思つちやうじやん」

「えつ」

につ、とノゾミちゃんの口角があがつた。

「うらやましいよ。その幼なじみの子が。バド部の子だつけ？
まー、たしかに似てるちや似てるよね」

「ごめ——」

手のひらを横向きにして、おれの口にあてられた。

「言うな。アタシ絶対、アンタ以上の男を見つけるからさ」

手がはなれる。

「ノゾミちゃん」

「外見がいくら似てたつて、二人の思い出までは似てないでしょ？」
おれはバカだから、彼女が遠回しに言つたことを理解するのがおくられた。

返事もできずにいると、

「それに……アタシが幼なじみに似てれば似てるほど、かえつてツラくならない？」

「そう、かも」

「な？ だからアンタは、その子とつきあえ」

やさしく背中を押されて、室内プールをでた。

校舎につながる渡り廊下を一人であるく。

(つきあえ、か)

そんなカンタンにはな……。

ともかく、ノゾミちゃんのときみたいに勇に似てる子をさがすつて
いうのは、もうやめにしよう。

ところで、勇の彼氏つて、おれに似てるか？
すこしも似てないな。

それって……あいつは、彼氏がおれに似てないほうがいいと思つた
——つまり、彼氏はおれじやないほうがいいと思つたつてことか？
いやいや！ そういうことじやないだろ。
(ん?)

似てる声の女子じゃない、これ勇の声だ。

上のほうから。

「うん、大丈夫」

校舎の二階にみなれた背中。

すこし高い窓から、あいつの声だけが聞こえてきた。

「正にはまだ、バレていないから」

合図をキミに

その晩、ふとんの中で考えた。

あいつが……幼なじみの勇ゆうが、おれにウソをついたことがあるかどうか
うかつて。
ない。

それこそ、関係がはじまるトコまでさかのぼつてみたけど、やつぱりない。

つていつても、関係がはじまつたのは物心のつく前だ。

おれたちが幼なじみになつたのは、たんに家が近かつたから。勇の家やがとなりのとなりのとなりだつたんだ。その家は今もある。空き家あになつてるけど。

出会つて何年かは、髪が長かつた。

それをうなじのあたりで二本に分けて結んで、ふつうに女の子してた。

勇が髪をショートにしたのは小五の秋。

女の子が突然髪をみじかくすることにメンエキがなくて、けつこうドギマギしたことをおぼえている。

(おれに『バれてない』つて、なんのことだよ、勇)

あいつは最初からフレンドリーだつたと思う。

逆におれのほうが、大人の背中にかくれたりしてた。
でもすぐに仲良くなつたな。

おれは勇を好きになつた。

性格がサバサバしてて、ものの言い方がストレートで、あんまウソとか好きじやなくて。

(その勇が、おれに「かくし」とか……)

おれのほうもウソなんかつかず、素直にあいつと接してきたつもりだ。

小学生の低学年のときにおねしょしてしまつたことも伝えたし、中学の入学式の日、強風であいつのスカートがふわつと浮き上がつたときもちゃんと「みえた」と白状した。そんとき、勇は「そつか」と言つた。

て明るく笑つたつけ。

(——そういうえば、アレも「かくし」ことか?)

勇がないときにパソコンをさわってたら出てきた、連れ子同士——結婚できる? の検索履歴。

でもアレは、よく考えたらそんなにマジじゃない気もしてる。なんとなく調べてみただけだった——って感じで。

いわゆる興味ホンイつてやつで。

えーと、ところで、それって……

「できるんだつけ?」

「ホワツツ?」

次の日の放課後。

おれは演劇部に出て、部活中。

校舎三階にある部室。

ここはいつも文化祭の一週間前みたいに、いろんなものがちらかってる。

「それはともかく、絵の具、鼻についてるよ?」

片切がその部分を指さす。

まじかよ、とおれはすぐに男子トイレに向かつた。
片切もついてくる。

歩く姿に「チヨコチヨコ」とか「とてとて」という音がぴったりの、ミニマムな女の子だ。おれの元カノ。今日もツインテールで、体の動きにともなつてよく揺れている。

「正は小道具作りもセンスないな?」

「はつきり言うなよ。悲しくなるだろ」

「はいタオル」

サンキュー、とおれは顔をふいた。ふわふわで気持ちいいタオルだ。

「洗つて返すよ」

「いいから」と、片切はおれの手からブンズる。「気にしなさんな。私たち、もともとつきあつてた間柄あいだがらでしょ?」そしてタオルを見つめながら声色をかえて「ぐふふ……イケメンのエキスをもらつたゾイ」

「おい」

「ははっ。ジョークジョーク」

今日の演劇部は、部員みんなでクリスマス公演のセットづくりをしている。

おれは最初、クリスマスツリーを担当していたが、ミスつて枝を三本も折ってしまった。

で、担当をかえられて、部屋のすみで小物に赤い絵の具をぬつていたところだ。片切といっしょに。

「それで、さつきの話はなあに？」

あ、と思いつ出す。

「いや……連れ子同士ってさ、結婚できたんだつけ？」

「知らないよ、そんなの」^{ふー}、と片切のほつぺがふくらんだ。「私ど、じゃないの？」

「おまえ、おれをフツたじやん」

「それはフラれる理由がキミにあつたからだよ、こはく小波久少年」

男子トイレの前からすこし移動して、廊下の窓のそばに立つ。

「ノドから手ができるほど勇ちゃんと結婚したいんだね？」

「そうじやなくて……」

いいから、と片切はスマホを出す。

そして、

「あー、できるつてさ。法律的な問題はナシ。コングラツチユレー
ションズ。おめでとう。式には、私も呼んでね？」

あー呼ぶ呼ぶ、とおれは適当にこたえた。

内心、ひそかな安心感がある。

そうか。できるんだ。連れ子同士——つまりおれと勇で——結婚するつていうのは。

「あ？ 勇ちやんだ！」 片切が窓の外を見下ろして言う。
「え？」

いくらなんでもタイミングがよすぎる。

ウソだとは思いながらも、おれはあいつの姿をさがしていた。
やつぱり、どこにもいない。

じろつ、と片切に流し目すると、

「ごめんごめん。でも正は正直だね。あの子の名前を耳にしたら、あつというまに目つきがかわったよ?」

「どんなふうに?」

「いとしい人を見つめるまなざし、って感じ」

そう言つて、片切はウインクした。

まつたく……」まつた元カノだ。

ん?

片切といつしょに窓から見下ろす……最近、なんか似たようなシチュエーションがあつたな、と思い出した。

「あ!」

「えつえつ、どーしたの?」

「片切、あのとき見たよな? 勇のこと。勇が彼氏といいるところを」

場所は自転車置き場の近く。

図書室でおれが水緒さんとキスした……つて勇に誤解されたあの日に、部室の窓から見たんだ。彼氏とそこにいる勇を。

「もうハラくくつて聞くよ。あんとき、勇はキスしたのか?」

「おろおろ?」片切はニヤニヤ笑いながら、おれをひじでつつついた。「どういう心境の変化カナ? やつと彼氏くんと対決する気になつたのかい?」

「片切。まじだ」

おれは両肩をつかんだ。

腕力のないおれでも「たかいたかい」できそうなぐらい、体格差がある。

「たのむ」

「お……おお、確かにマジだね……イツツシリアルス……」

「してたのか?」

「……オッケー、まず手をはなしてよ、正」

おれは、あわてて手をはなす。

「結論からいおう」

と、片切は指を一本たてた。研究者かなんかのキャラか?

「ノーキッス、であると」

「ほんとか？」

「もちろん」

「じゃ、向かい合つただけ、つて感じなのか？」

「実演しちゃる」

「そう言うと片切は、おれの両手をとつた。

「こんな感じ」

「両手で握手？」

「……だね」

「勇と彼氏が？」

「だよ～、と片切は部室にもどつていった。

その場に立ちつくす、おれ。

（握手って……そんなことするか？ 手をつなぐっていうんならわからぬけど……）

考えていたら、どん、と背中に何かあたつた。

ワンテンポおくれて、やわらかいものがあたつた感触。ふりかえるまえに「女子だ！」とおれの心が判定した。

「ごめんなさい！ 考え事してて前をよく——」

ジャージ姿の女子。

髪はみじかくて、かすかに深海の色みたいなブルーが入ってる。手には、何冊ものノート。

「野崎さん」

「えっ？」下げていた頭を、ゆっくり上げる。「正くん！ なーんだ。

あやまつてソンしちやつたな、うん」

「いま部活？」

「そうなの。データを整理しようと思つて、パソコンがある部屋に……」

野崎さんの両眉があがつた。ただでさえおつきい目が、もつと大きくなる。

「正くん、伊良部さんといつしょに住んでたつけ？」

「はは……ナイショにしてたんだけどね」ウワサは一人歩きする。今

では、おれと勇が同じ屋根の下に住んでいることは、みんな知つていた。中には、よからぬ想像をするヤツさえいる。「それがどうかした？」

「ナイスタイミングなの、うん」

この「うん」は彼女の口癖だ。

どうしてそんなことを知つていてるかというと、片切と同じく彼女も元カノだからだ。

ときどき、この「うん」といつしょに片目をつむったりする。それが最高にかわいいんだ。

「これ」

一冊のノートをわたされた。

「リハビリのメニューとか、練習再開までにしておいてほしいこととか、いろいろ書いてるの。お願ひできるかな？」

ことわる理由もないのに「もちろん」と返事した。

野崎さんは運動部のマネージャーをやつている。

注意すべきは、彼女は勇の所属するバドミントン部だけのマネージャーじゃないってことだ。

うちの学校は個別じゃなくて〈スポーツ・マネジメント部〉っていう大きな部が一つだけあって、そこがすべての運動部を管理している。担当する部も固定じやなくて流動的らしい。

「もう帰っちゃってたから、どうしようかと思つてたの。大助かりだよ～」

まぶしい笑顔。

この野崎さんに、陽キャの運動部の男子たちはデレデレにデレている。

だから当然、彼女とつきあつたときは、彼らからバリバリに反感を買った。

「元気にしてる？」

「あ、ああ……まあね」

「ごめんね。フツちやつて」

さらつと、あやまつてくれた。

さらつと、あやまれる人なんだ。

「こういうところを、おれは好きになつた。

「部のほうに打ち込みたかつたから……今ね、すごく充実してるんだ」

「それは、よかつたよ」

うん、と野崎さんはちいさな声でつぶやいた。

「じゃあ、おれ行くから」

「あつ、待つて！」

ぎゅっと制服のそでをつかまれた。

わるい気はしない。

できれば、いつまでも、つかんでいてほしいぐらいだ。

「伊良部さんね……あのね、足をいためる前から、あんまり調子がよくなくて……」

意外な内容だった。

勇の態度はふだんどおりに見えたけど、じつはスランプとかだつたのか？

「でね」

野崎さんが、おれの腕をひっぱり、背伸びして耳打ちする。

「野球部の外井くんも、ずっと調子がよくないの」

「勇の彼氏？」

「そう」

もとの姿勢にもどつた。

彼女は片手を口元にあてる。

「あんまり、ないんだけどな……」

「何が？」

「カツプルで、同じタイミングで調子がわるくなっちゃうパターン。

これだと、まるで「同じ悩み」をかかえてるみたいで……」

「ケンカとかしてたら、そういうこともあるんじやないかな？」

「ケンカのときはね、女の子のほうがすぐ調子よくなるの」

まじ？

データを豊富にもつてゐる彼女の言うことだから、ヘンに説得力がある。

「ね、正くん。ケンカ以外で、二人に〈同じ悩み〉があるとしたら、それってなんだと思う？」

「うーん……」

「二人に何か共有する目的があるのなら、不自然じやないと思わない？　うん」

ウインクした。

「私ね、あの二人……ほんとはつきあつてないんじやないかって思つてる」

ホットが恋

すつかり暗くなつた。

野崎さんに気になることを言われたあと、おれは演劇部で過去イチぐらいシゴかれた。まず有名な俳優さんの一人芝居の動画をみせてくれて、感想をくわしく聞かれ、そのうえで実際に一人で芝居して動画を撮り、どこがダメなのかをみんなに指摘してもらうっていう流れを何回かやつて……とにかくつかれた。

でも気分がいい。

楽しかった。いい汗かいた。

めっちゃ不安だけどな……このおれがクリスマスに一人だけで芝居するなんて。

しかも――

(テーマが「告白」で、ちゃんと目の前に想いを伝える人がいるかのように戯演する、か……)

キレイな女優さんを思い浮かべるつていうのは、たぶんちがうんだろう。

適当なクラスメイトの女子つていうのも、ちがうと思う。

まじに、おれが心から「好き」な子じゃないと、芝居に現実味が出ないから。

(つまり、はやく彼女をみつけろつてことだな)

入院してる、ばあちゃんのこともある。

最高のパートナーといつしょにいる姿をみせて、ばあちゃんを元気づけないと。

駅の改札をでた。

ここから家までは歩きだ。けつこう距離があるけど、ショートカットできる道をいくつも見つけてるから、それほど苦じやしない。

駅前のコンビニの近くを通りかかった。

ガラスにうつるおれの姿をチェック。

よしよし。ばっちりカッコいいぜ。正面。右向き。左向き。また正面。最高だ！

これで彼女ができるはずが……って、見た目にたよつちやダメか。そのせいでおれは、13人の女の子にフラれてきたんだから。地道にがんばろう。

(かえつて勉強して、読書して、あたらしい趣味でもはじめるか)
買ったものの挫折した、ギターをやり直すとか……

「あ」

目ゆうが合った。
勇だ。

コンビニで立ち読みしてる。

「なにしてんの？」

外に出てきて、白い息をはきながら言う。

「おまえこそ」

「ふつーに買い物ですけど」と、白いコンビニ袋を見せつけるように上げた。「そつちは部活?」

「ああ」

勇は背中を向け、そばにある自転車のカゴにその袋を入れた。車体がシルバーの男っぽいチャリ。これは勇の自転車だ。

かしゃん、とスタンドを蹴つてあげる。

「わざわざこんな遠いコンビニじゃなくても……家の近くにもあっただろ?」

「いいの」

自転車を押す手には白い手袋をはめていて、コートも同じような白さのダッフルコート。

となりを歩くおれを45度ぐらいで見上げながら勇は言った。

「今日ね、パパとママが二人とも仕事がはやく終わつたみたいでね、私もいつしょにリビングにいたんだけど……なんか二人がいい感じになつてたから」

「空気を読んだのか」

「まあね。なんかジャマしたくなくて」
「いい感じっていうのは……」

ジト目になつた。

ひゅー、と冷たい風がおれと勇の間をふき抜ける。

「…………パパはともかく、私のママでそういう想像しないでよね」「まだ何も言つてないだろ」

「顔に書いてたじやん。まさか17もはなれた弟か妹ができるのかつ

!! つて

「赤い絵の具が、まだ残つてたか?」

「なにそれ?」

今日、演劇部であつたことを話す。

もちろん野崎さんのあの「一言」はカット。ただ、いま部活を休んでいる勇をケアしたノートをあずかっているから、彼女と会つたことだけはしゃべつた。で、ノートをわたす。

「わつ。すゞーい」

それをひらいてすぐ、勇がそんな声をあげた。
目も、キラキラさせてる。

「ノサツちゃんには、頭が上がらないね」

「野崎さんと仲いいのか?」

「もちろん、いいよ。うん」と、野崎さんのモノマネを、ワインクつきでする。なかなか似てた。勇は器用だから、こういうことが得意なんだ。

そこからバドミントン部の話になつて、おれはしばらく聞き手に回つた。

心なしか、勇の歩く速度がおそい。

足の痛みのせいいか?

じやあ……おれも、のんびり行こう。

「寒くてもよかつたら、ちよつと寄るか?」

「えつ」

右手に児童公園。

光で照らされてみえる範囲には、ちょうど誰もいない。

勇は自転車を入り口におき、おれたちはベンチにすわつた。

「よかつたら、のむ?」

小さいサイズのホットのお茶を、おれにさしだしてくる。

「サンキュー」

「じゃ、乾杯」

勇はホットのミルクティーをあけて、ごちん、とおれが持つお茶にかかるくあてた。

「なつかしいねー、この公園」

「おぼえてるか。そこの蛇口」

「ああ。アンタがころんだアレ?」

何才ぐらいだつたか、4才か5才のときかな。

この公園で勇といっしょに遊んでて、おれがコケた。足をすりむいて、口にめっちゃ土が入つた。もちろん、当時のおれは泣いた。

「正は、昔つから運動が苦手だつたから」

「まあな……」

泣いてたら、気がついた勇が傷口を水ですすいでくれて、さらに手の中に水をためて、おれの口元にもつてきてそれを飲ませてくれた。おかげで口の中を洗えて助かつた。

この公園のあの蛇口には、そんな思い出がある。

「勇はつまずいたことがあるのか?」

「なうに? 重い話とかするの、ヤだよ」

「単純に、ころんだことがあるかつて話」

「あー……ないかも」

まじか。

ころんだ記憶がないつて、ころびまくつてた——今でも何年かに一度はころぶ——おれからすれば、超人的だ。

ん?

スマホに着信。

児玉こだまだ。クリスマス直前にでつかいコンパしねー? つてきた。

「おまえ彼女いるだろ」

「それはそれ。これはこれ」

「彼女が泣くぞ」

「正よ。泣いたあの仲直りでやるとな、これがアチアチに燃えるんだよ!」

なんてヤツだ、まつたく……。

勇もいるから、ラインのやりとりはそこでやめた。

「バカ。あいつ、大っ嫌い」

スマホをのぞいていた勇が言った。

おれはなにげなく、

「彼氏って、あんま連絡してこないタイプなんだな」と口にした。

勇が、「嫌い」とくちびるをとがらせたまま、かたまつた。
なぞの沈黙が数秒あつたあと、

「……ん？」

「いや連絡だよ連絡。ラインとかSNSだつたり。つきあつてたら
けつこう密みつにやるもんじやないか？」

「えつ？ あー」と、勇は今さらのようにスマホを出す。「私はエチ
ケットかなー、と思つてね、ガマンしてしなかつただけ……だよ？」

ほんのわずかにドーヨーがみられる。

キヨドつてる感じ。気のせいレベルではあるけど。

「向こうは？ してこないのか？」

「いやほら……、ねえ？ 野球部つて練習がハードだから」

「彼氏とは、うまくいってるんだよな？」

「当たり前でしょ！ ラブラブなんだから！」

そこまではつきり言われると、それ以上何も言えなくなる。

やれやれ。やっぱり、なれないことはするもんじやないな。

(ひよつとして、ウソで彼氏とつきあつてるのかと思って、カマつてい
うのをかけてみたんだけど……)

勇の返答だと「ラブラブ」。

なら、おれはこいつを信じなくてはいけない。

おれのポリシーは〈女の子を疑わないこと〉だからな。

「そろそろ帰るか」

「うん」

家に近づいたところで、

「あれ？」

おれたちが、同時に言った。

「勇の家……明かりがついてるな」「もう私の家じゃないけど」

赤い屋根の、二階建ての家。

勇は今年の夏休みの終わりごろに、この家を出ておれの家に引っ越ししてきたんだ。

「あれって、だいたい半年前か。もう誰か新しく入ってきたんだな」「住み心地バツグンの家ですからね」と、勇が自転車のハンドルをもつたままで胸をはる。「ここには思い出だつていっぱいあるし」ちらつと見たが、まだ表札はかかっていない。

どんな人が引っ越してきたのか気になつたけど、そのまま通りすぎて帰宅した。

「あつ、勇」スリッパをパタパタとならして、玄関で靴をぬぐおれたちのところにやつてくる勇のお母さん。「おかえり。よかつたら。ちゃんと正ちゃんをお出迎えできたのね？」

勇はちようど、おれの視界のうしろの死角にいる。

バツ、と空気がうごいて、勇がなんかアクションしたみたいだったけど……。

「もう」

と、つぶやいて、お母さんは背中を向けた。レンガ色のタートルネックに、ぴちつとしたスキニーの白いパンツ。こんなふうに、家中でもだらしない格好はしない人だ。いつも白Tにゴムのゆるみかけたショーパンの勇とは大ちがい。年も、まだ30代で、スタイルがよくて、大人の色気もあって――

後頭部に熱い視線を感じる。

「……正? それだけは、ぜ／＼つたいて許さないんだからね?」

ふりかえると、腕を組んでけわしい顔つきをした幼なじみがそこにいた。

人差し指の先をトントンさせているあたり、いかにもイライラしてゐつて雰囲気だ。

「お母さんとおれが、つてこと?」

「ゼロパーじゃないでしょ？」

「安心しろ。完全にゼロパーだよ。おれにとつては、それは正しい恋
じやないから」

（さて――）

夕食を終えて、ごろんとベッドに横になる。

（彼女でもさがすか……って、そんな簡単に見つからないけどな……）
今まで12人の女子とつきあえたのは、ほんとに偶然とラッキー
のタマモノだった。

最初の子は、児玉につれていかれた合コンで出会ったんだっけ。
いま一度、あの悪友あくゆうにたよつてみるか？

（でも今までは、なんか流れに身をまかせてつていうか――成り行き
でそくなつたつていうか）

ガシツ!! とハートをワシづかみされたような、熱い恋愛のスター
トじやなかつた。

思えば、おれは「一目ぼれ」つて、したことない。
してみたいもんだぜ。どつかに、ころがつてねーかな……

（雪?）

カーテンのスキマから、白いつぶが落ちるのが見えた気がした。
カーテンをあけて、窓を開ける。

（気のせいか……）

窓をしめようとして、

手がとまつた。

そのまま。

ストップしてしまう。

家の前の道路に女の子がいる。

同じ年か、もしかしたら年上かも。

赤いダウンジャケットを着ていて、そのポケットに両手をつつこん
でいる。

その子と、目が合っている。

おれは見下ろして、彼女は見上げて。
目を、はなせなかつた。

ほかのところじやなく、ずっとそこを見ていたいという、不思議な気持ちになつてゐる。

長い髪が風でゆれた。

あの子は誰だ？ この近所じや、見たことないぞ。おれを見つめて、なんとなく笑つてるような、やさしい表情。おれも見つめ返している。

まるでチキンレース。

どつちが先に視線をはずすのか、はずしたら負け、みたいで。「正ぐ、いるぐ？」

ノーノックで部屋に入つてくる勇。

「さつむ！ なにしてんの、窓なんか閉めなさいよ」「え？」

と、部屋の中に顔を向けた。

「星空をながめるなんてタイプじゃないでしょ、アンタは」「ちょ……ちょっと、きてくれ」

「ん？」

勇が窓際にきたので、

「あれつて誰か知つてる？」

とたずねた。

「外？ こんな寒いのに、外に誰かいんの？」

「いいから」

勇の背中を押して、強引に外を見てもらう。

「…………」

「どうだ？」

「正……彼女がほしすぎて、まぼろしの女の子でも見た？」

えつ、と確認したが、たしかに道路には誰もいない。誰も。そんなバカな。

勇があやしむような表情になつた。

「それとも、これも演技の練習？」

両手を腰にあてる勇のTシャツに、すこしつづけるグレーのブラジャー。

おれは、わからない。

これを見てるせいなのか、さつきの女の子のせいなのか。

すぐドキドキしてて、胸が熱い。

目と目と、目

「ドーパミン。オキシトシン。それとフェニルエチルアミンね」

こつん、と手の甲でホワイトボードを三回たたく。

上のほうには『一目ぼれの正体』といねいな字で書かれていた。

「……以上」

「ちょ、ちょっと待ってください！」

おれはイスから立ち上がった。

同じ部屋にいる白衣を着た人たちが、じろり、とおれに冷たい眼を向ける。

ここは科学部の部室で、ここにはめっちゃ頭がいい人しかいない。
「なんなんですか、それは？」

「正。あなたにも血が流れているでしよう？」

両手をうしろで結んで、おれのほうにゆっくり歩いてくる。

もちろん彼女も制服の上から白衣を着てる。
元カノ。

一目ぼれってあるんですか？ とスマホで彼女にメッセージを送つたら『放課後、科学部にきなさい』と返信されて今にいたつている。

「その血の中にある物質よ。ここに書いてる3つがそろつたら、一目ぼれの出来上がり。まあ、一目ぼれというよりは、恋愛感情が高まって興奮状態にあるときというほうが正確だけど」

「おれは一目ぼれの理由を——」

「誰かに一目ぼれ、したんだ？」

「よくわからぬけど、したっぽいような……」

おれはまたイスに座り直した。

すると、彼女が前かがみになつて、おれのおでこを人差し指でかるく押した。

「いけない子。みじかい間とはいえあなたの彼女だつた私に、『ほかの女に一目ぼれしたよ』とか、ふつう相談にくる？」

「ごめん。でもほかに聞ける人がいなくて。自分でネットで調べても、全然ピンとこないし……」

はあ、とため息をつきながら髪をかきあげる。

セミロングで、前髪はつくつてなくてサイドと同じように長く伸びし、それが片っぽの目だけをかくしていて、やたらとセクシーだ。

彼女は、広尾さん。ひろおおれと同じ二年生。科学部の部長。

おれは下の名前でユナさんと呼んでいる。

「まつた元カレだこと。ま、たよられてわるい気はしないけどね。じゃあ、そのときの状況をくわしく教えてもらえる?」

「えーと……簡単にいうと、はじめて見る女の子と目が合つて、そのまま目がはなせなくなつたんだ」

ユナさんがおでこに片手をあてる。

考え方をするときに、彼女がよくするポーズだ。

「容姿は好みだつた?」

「たぶん」

「芸能人とか女優とか、または、あなたがこれまで会つた女性に似てる人はいる?」

「いない……かな」

質問を変えましょう、と言いながら近くのイスを引き寄せてすわる。

「あなた、どうして困つてるの?」

それは予想外の角度からの問い合わせだつた。

「正を見てたら……『おれ一目ぼれしちゃつたよ、どうしよう』みたいな感じがしてね。べつに気にすることないじゃない。好きになつたらんだつたら、アタックあるのみ——でしょ?」

「アタック」と、おれは単語をくり返す。

「あなたと何回かデートしたときも『ふわさつ、とユナさんは髪をかきあげる。「同じ感じがしたよ?『おれ今この子といつしょだけど、どうしよう』つて。どことなく、とまどつてつていうか、まるで『絶対的な本命の子』が——」

かくれてないほうの片目だけで、じーーーっと見つめてくる。

妙に迫力があつて、目線をはずすことができない。

「いるみたいに」

「……すみません」

「あやまらなくてけつこう。私はそこがひつかかつたから、あなたをフツただけ。泣く泣くね」

「泣く泣く？」

は！ と切れ長の二重の目が、まん丸になつた。

あわてて横を向き、

「い、いや失言。ていうカリッ普サービス……ね。ほんとよ？ あなたたたつて、むかしの彼女にミレンを持たれてたほうが、気分がいいでしょ？」

「全然」おれは言う。「ユナさんには、新しい彼氏とかみつけて、しあわせになつてほしいです」

「ふー」長い息をはきながら、彼女はなんども小さく首をふつた。「そんな恥ずかしいセリフを、まつすぐな目でいえちやうんだから……つくづくツミな男だよね、あなたは」

「ウソじやないですよ」

「わかつてる」

じゃあ、とおれは立ち上がつた。

ユナさんに話を聞いてもらえてよかったです。なんかふつぎれた。

そうだよ。好きになつたなら、アプローチして、そのうえで想いを伝える。これつきやない。悩んだり迷つたりしなくていい。

「それで？ 正、これからどうするつもり？ あの幼なじみの子にアタックするの？」

「え？ いや……あいつには、彼氏がいるんで

きつ、とほんの一瞬、ほんとに一瞬だけ、ユナさんがきびしい表情になつた。

何かに怒つてる、ような。

もしかして、おれに対してキレてる？

「ユナさん？」

「……なるほどね。それがあの子の選択……か。どうしてもつと……」

素直になれないかな……」

ぶつぶつと、ひとり言のように言つてる。

なんかイライラしてゐる雰囲気。

気づかれないよう、そーっと部屋を出でいこうとすると、

「正！」

うしろから呼び止められた。

「待つて！　あとひとつだけ！」

長い白衣をひるがえして、彼女が小走りでやつてくる。
ほかの科学部の人たちは、とくにこつちを気にしていない。みんな
自分の世界にボツトウしているみたいだ。

「一目ぼれの子に恋をするのもいいけど、その前に」

ぐつ、と制服のそでをつかまれた。

なんだか知らないが、ユナさんは真剣だ。

「ひとつ、あなたに魔法をあげるよ。本当の……正しい恋をみつける
魔法。ね？」

「魔法ですか？」

ユナさんの口から、こんなファンタジーなワードがでるなんて。
科学部っぽくないですね、とツッコミそうになつた。

が、あまりにも彼女の目はマジで、冗談をいえる空氣ではない。
「いい？　あの幼なじみの子に、あなたは言葉の意味もなんにも考え
ずに、今から私がおしえるたつた一言だけを口にすればいいから——

◆

その日の帰り道。

電車がとまつてドアがあき、赤いブレザーの女子が乗ってきた。

(もしかして優ちゃん?)

赤い制服と、ポニーテールの髪型だったから、反射的にそう思つた。
反対側のドア付近に立つおれのほうへ、スタスタ歩いてくる。

「……あ

ちがう。

でも、ちがわない。

おれが、すぐ会いたかった子だから。

(家の窓から見かけた、あの子だ!)

目の前にきた。つり革はもたず、しまったドアに背中をあずけている。

もちろん、とっくにおれには気づいている。

また見つめ合うことになるのかな、と思つていたら、

(……あれ?)

くるつと回つて背中を向けてしまつた。

(こつちに気づいてない……? いや目は合つたんだけど……)

と、またくるつと回つて、

「また会いましたね」と、はにかんだような顔で言つた。

音で表現すれば、ズキューーン!!

一撃でやられた。

か、かわいい。

あのドキドキがよみがえる。

ちよつと待て、あせるな。

おれだつて12人の女子とつきあつてきたんだ。恋愛経験値はおれのほうが上のはず。

ここは気さくに、

「また会えると思つてたよ」

こう返すんだ。100点のキメ顔で。

電車が発車した。

やさしく笑つたまま、彼女は目を細めた。

「……ほんとに、そう思つてました?」

「もちろん」

「あの家の人ですよね? 私、近所に引っ越してきました」

「そうなんだ。まさか中学生とは思わなかつたよ」

「中学生? ふふ……そんなコドモっぽくみえます? ショックだなー」

「え? でも、その制服つて有名な女子中の……」

「高校もあるんです。中高一貫ですよ、あそこは」

「そうなんだ」

楽しい時間は、はやく流れる。

おれはすっかり浮かれてしまって、そこから会話の内容をあんまりおぼえていない。

彼女は寄るところがあるらしく、次にとまつた駅で電車をおりてしまつた。

(やつぱり一日ぼれ……してたか)

自分の気持ちを確認することができた。

大きな収穫だ。

連絡先も交換できた。

彼女の名前は――

星乃 翔

同じ名前だね、と彼女はよろこび、おれもよろこんだ。

同じ音で「ショウ」。こんな偶然あるんだな。

「運命ですね」

と、彼女はなにげなく言つたけど、もしかしたら、ほんとにそうかもしれない。

運命のパートナー。

おれの家は帰宅したら親にスマホをあげるシステムだから、もう今日は星乃さんと連絡し合うことはできない。

また明日だ。

楽しみでしようがない……ん? なーんか、忘れてるような気が……なんだつけ?

「正、どうしたの? 腕組んで考えこんじやつて」

下からおれの顔をのぞきこむ勇。

マンガを手に、一口サイズのチョコレートをつまんで、横に寝そべつて――ようするにリラックスしまくつてる。人の部屋なのに。

黄色いショーパンからのびる健康的な足に、ゆるくなつたTシャツのえりの奥からチラツとしてる胸。

よく知らないけど、一般的な「いもうと」ってこんな無防備なのか?

「忘れてるんだ」

「えつ？」

「大事なことを……一目ぼれじゃなくて、えーと」

「それちがうよ。正確にはね、ホレ直すっていうの」勇は自分を指さした。「私のことでしょ？　これだけつきあいが長いんだから、もう一目ぼれでもなんでもないじやん」と、ニコニコした顔で言う。「魔法で記憶を消したんなら、話はべつだけど

「魔法……あつ！」

「どうしたのよ、いきなり大声だして」

ベッドのふちから立ち上がる。

つられて、勇も立ち上がった。

「それだ。魔法だよ。ユナさんから――」

「ユナサン？　それって、前につきあつてた科学部の子？」

「それは、今はいいんだよ」

おれは勇の肩をつかんだ。右も左も。

あいつが逃げていかないように、しつかりとホールドして。

「正？」

「えーと……」

思い出したコトバを、頭ん中でリピートする。

ほんとに、この魔法で正しい恋が見つかるのか？

おれはバカなんだから考えても仕方ない。

「いくぞ？」

ん？　と勇が無言で首をかしげる。

「お……『おまえの彼氏からぜんぶ聞いた』よ」

あつ。

勇の表情が変わった。

目を大きく見ひらいたあと、がつかりしたような顔になる。

「そつか……外^{そと}つち、とうとう……言つちゃつたか」

予感がある。

よけいな口をはさむな、という予感。

このまま、勇にしゃべつてもらえ、という予感。

何かが大きくうごきだす予感。

「そうだよ。私たちじつは……つきあつてないから」

つきあつてない？　あいつと？

じやあ、勇は、最初から彼氏もちでもなんでもなかつたのか？
どうしてそんなウソを――

(!)

いつのまにか勇が近い。

ショートカットで明るくて強気な性格のこいつが、静かにだまつて
寄り添つて、おれの胸におでこをあててている。

「どうして？　つて言いたいんでしょ？　それは、私はずっと正のこ
とが――」

「あのー」

おれと勇、同時に体がビクンとした。

聞きなれない声、すくなくとも家の中では耳にしたことない声が、
ドアのところからきこえる。

勇といつたん目を合わせ、そこからシンクロしたように声の主のほ
うをいつしょに見た。

「……私、お邪魔でした？」

赤いニットにベージュのスカートの女の子。
星乃さんが片手で口をおさえ、おれたちを見つめていた。

運命は同時進行で

はずかしい告白をする。

おれは、12人の女の子とつきあいながら、1人も自分の部屋にあげたことがない。

そうなる前にフラれたからだ。

つまり、彼女は――

「あ。ありがとうございます」

幼なじみの勇^{ゆう}以外で、はじめておれの部屋に入つた女子……ということになる。

紅茶のいい香り。ティーカップもオシャレ。

ごゆつくりね、と3人分の紅茶をはこんでくれた勇のお母さんが笑顔で部屋をでていった。

まるいローテーブルを三角形をつくるように座つていて、おれは正座、勇はあぐら、星乃さんは足をひかえめに横に出して座つている。「ほんとに……さつきは、ごめんなさい!」

ばつ、と頭をさげて、長い髪の毛がゆれた。帰り道で会つたときはポニテにしてたけど、今はとくに結んだりくつたりしていない。こめかみのあたりに〈天使のわ〉がハツキリできていて、メンテばつちりつて感じのキレーな黒髪だ。すぐくサラサラで、静電気でちょっと浮いてる髪もあつて――

「……見すぎじゃない?」

じと……と勇が細めに細めた目でおれを見る。

しかも頬杖^{ほおづえ}までついて。

と、その目を一瞬でふつうの目にもどして、星乃さんに向けた。

「いいのいいの! 頭をあげてよ。べつに……ねえ?」

バス、とばかりにおれに目線。

星乃さんも、上目づかいでおれに目線。

もうしわけなさそうな表情をしているが、はつきり言つて彼女にツミはない。

うちにアイサツにきたら、勇のお母さんが茶目つ氣をだして「おど

ろかせてあげてよ」と、おれの部屋に通してあげたというだけの話だ。

おれには聞こえなかつたけど、きつとノックもしてたんだと思う。

気づかなかつたおれがわるいんだ。

「そ、そうだよ。おれも勇も気にしてないし、何かしてたつていうわけでもないし……」

「でも……いいムードでしたよ?」

「演技だよ演技」と、おれにしては会心の切り返しができた。「ちょっとつきあつてもらつたんだ。おれ、演劇部だから」

「そなんですか?」

「ううう。おれたち、どつちもマジじゃないから」

何か言いたそうな顔をおれに向けたが、それだけで勇は何も言わなかつた。

そして何秒か静かな間まがあつたあと、それよかさ、と勇が話題をかえる。

「あなただつたんだね。新しく引っ越してきた人つて」

「はい」

「…………かわいい」

「はい?」

着てる赤いニットの胸元を片手でおさえて、ちょっと首をかしげる。

「めつっちゃかわいいじやん!」

「そ、そうですか?」

「かわいすぎだよ。しかもこの透明感。彼氏はいる?」

「いえ、その……女子校なので」

「それは関係ないよ。むしろ女子校の子のほうがすすんで——」

「勇。まずは自己紹介からだろ」助け舟のつもりで、口をはさんだ。しかし、さりげなく〈彼氏いない〉の情報が引き出せたのは、勇にグッジョブと言わざるをえない。「名前もまだ教えてないんだし」

おれは言いながら、紅茶に手をのばした。

すこし、手がふるえてる。ドキドキもしてる。顔も赤いかもしれない。

おれは急いで手をひっこめた。

さいわい勇には気づかれていない。

勇は、お母さんがもつてきてくれたマドレーヌをパクパク食べている。

(わからない……これって星乃さんが目の前にいるからなのか)

私はねえ、と明るく名乗っている幼なじみの横顔を見た。

(それとも、こいつのせいなのか。なんなんだよアレ……『つきあってない』つて。そんなのアリか?)

「ほら」と、勇がおれの肩をゆする。

「え? 何が?」

「つぎは正の番でしょ、自己紹介」

「おれはいいよ」

勇に、今日帰り道で彼女と会ったことを話す。

「へー、そなんだ。すつぐい偶然じやん」

「たまたま同じ車両に彼女が乗ってきたんだ」

「へー」

「連絡先も交換した」

会話の流れ上、ここにも「へー」とか「えつ?」と勇がアイヅチを入れるはずなんだが、

「……」

だまつてしまつた。

昔から、こいつはおどろいたときに無言になるクセがある。

おどろいた、というか自分にとつていやなニュースを耳にしたとき

というか。

最近だと、おれがまちがえて勇のプリンを食べたと伝えたときもうなつた。

「……そう

でもなんか今までとちがう感じがする。

プリンのときみたく、だまつたあとにパンチやキックもしてこない。なんかシユンとしてるような……。

「正つたら、手が早いんだから」

声にも、あまり明るさがない。

星乃さんは空気を読んだのか、そこで「そういうえば宿題があつて」と思い出したように言つて、ササッと帰つてしまつた。

◆
「危機感あるんじやない?」

突然、そう言われた。

朝の教室。外は雨がふつてる。

スカートのポケットに左手をつつこんだ女子が、右手をおれの机においた。
国府田さんだ。

このクラスの女子をひっぱる、ちょいヤンキーフ^け氣もある女の子。

セミロングの髪はほのかに茶色。

座つたままで彼女を見上げながら言う。

「危機感つて何?」

「正クンが、女子人気ナンバーワンから落ちるかもつてこと

「え?」

「知らないの? 情報おそいなあ。あのね——」

はじめて聞いた。

昨日、べつのクラスに転校生^{こだま}がきたらしい。

勇と同じクラスに。

おれより背が高いとか美形とかいうより、はつきり言つてそつちのほう^かが圧倒的に気になつた。

「いやー!」

と、おれたちの会話に児玉も割りこむ。

「おれもさつきチェックしてきただけどさー、ありやーレベチ。別次元

だわ」

「そうか」と、おれはそれほど興味がない。「モテるんだろうな」

「バカいえ。おれン中では、ショーゲン上よ。ショーにだつたら抱かれてもいいけど、あいつはイヤだね」

「朝からする話じやないでしょ」と、国府田さんが児玉の肩を押す。「でも面白い子が入つたよね。来年のバレンタインとか、チョコの数

じゃどつちが勝つのかなー

かんべんしてくれよ、と国府田さんに言い返したとき、かぶせるよう

に児玉が聞き捨てならないことを言った。

おれは立ち上がる。

「わるい。もう一度、言つてくれ」

「へつ？ だからよお、転校生のヤロウめ、楽しそうに勇ちゃんとツー
ショットでしゃべりやがつて、つて」

「まじか」

「ん？ ショー、どーしたのよ？」

いきおいで廊下にでた。

でも、どうする。

いくのか？

(勇)

いこう。

いかなくちや、この気持ちにおさまりがつかない。
自分の目で確認したい。

だいたい、児玉のヤツは話を盛りがちだからな。

どうせさつき言つたことだつて、フツーに、転校生がほかの男子や
女子といつしょに――

(ツーショット!!)

一瞬、息がとまつてしまつた。

児玉は、話を一ミリも盛つていなかつた。

教室のスミに、勇と向かい合う、背の高い男子がいる。
めつちや盛り上がつてる。

勇なんか、手をたたいて笑つてるぞ。

おれは会話力も笑いのセンスも0点だから、あんなに勇を笑わせた
ことは……ひよつとしたら、ないかもしねえ。

「――？」

何を話しているかは、聞こえない。

ただただ楽しそうだ。勇の目も、心ナシか、ふだんよりキラキラし

てるような……。

相手の転校生は、国府田さん情報どおりで超絶イケメン。スタイルもいい。おれより5センチは背が高いだろう。

男を見上げて、気持ちよさそうに話している勇。

まるで、おれがよく知ってるあいつじゃないようで……。
くそつ！

なんか、よくない感情で胸がいっぱいになつてる。ヤキモチとか
シットとかジエラシーとか、そんなヤツ。

(見に行くんじや、なかつたか……)

ていうか、なんで落ちこんでるんだ、おれ？

そもそも、あいつには〈彼氏〉がいたんじやないか。

彼氏となら、おしゃべりどころかもつと親しくするもんだろ？

ヤキモチなんか、今さらすぎないか？
どうしたんだよ。

まつたく。

廊下の窓の外は雨。

窓ガラスに映るおれが、すこし猫背になつてる。
どこか表情も暗い。

えーい！ 笑顔笑顔！ んで、シャキッと胸をはれつ！

もどつてこい！ 最つゝゝ高にかつこいい、おれつ！

(ん?)

スマホに着信。

星乃さんからのラインだ。

あやしげな感じがする出だしだつた。

「運命つて信じますか？」なんて。

とりあえずノリを合わせて、「信じるよ」と、おれは男前に返す。
すると、

「私も、信じてみます！」

なにを？ と打ち返す前に、追いかけるように向こうからメッセージがきた。

「私たち、おつきあいしませんか？」

2度ある告白は3度ある

告白されたことは、たくさんある。

こんなジマンになるだけでイヤミだけど、たくさん——回数を力
ウントできないほどに。

バレンタインのチョコにそえられた手紙とかもカウントしたら、3
ヶタはいくかもしれない。

でも、何回されたつておれには価値がないんだ。

告白は「おれ」からするものだつて、思つてるから。

(これつて告白？ 出会つてから、こんなに早く？)

ご近所さんの星乃さんから「おつきあいしませんか？」のライン。
いつたん、心を落ちつかせようと目をつむる。
カンでわかる。

これは……返信までに長い時間をかけちゃいけないタイプのヤツ
だ。

(どうする——？)

こういうのは長引けば長引くほど返しにくくなるし、向こうでもへ
ンに誤解して、泣いたり落ちこんだりつていうことにもなる。
おれは、ひきよくなアイデアを採用することにした。

「いいね！」

と、ただのノリとも本音とも受け取れるメッセージをおくつた。

「よくないでしょ！」

と、勇^{ゆう}なら言うだろう。

おれも……じつは、そんな気がするよ…………でも、あいつだつて、
ほかの男子と……

「あん」

しまつた。

誰かとぶつかつた。前を、よく見ていなかつたから。

ペたん、とぶつかつた相手がシリモチをついて、スカートが足の付
け根のあたりまであがつてしまふ。
おれはあわてて手を伸ばした。

「ゞ、ごめん！」

「いいえ！」

「大丈夫？」

「はい！」と、おれの手をとつて、ゆっくり立ち上がる。「こちら、そ、ぼくつとしておりまして……あれ？ 小波久さんではないですか？」

「あつ。ユツキー？」

肩まで届かない短い三つ編みを一本つくった女の子。
古代ゆき。

おれの6回目の告白をオーケーしてくれてつきあつた、元・彼女だ。
「ケガがなくて、よかつたよ」

「ふだんから、ころびなれておりますので」

「ほんとに平氣？」

「はい！」

「そつか」

ここで、にこつ！ とおれはせいいっぱいの笑顔をつくつたつもり
だが、

「……なんか、ムリされてませんか？」

一発で見抜かれてしまった。

さすがのユツキー。

「わかる？」

「これでも、あなたのカノジョですから！」

え!! とそばを歩いていた女子がこっちを見た。

カノジョつていつても〈元^{もと}〉なのに、進行形だと思われてウワサが
広がるぞ。おれはべつに気にしないけど。

こんな感じで、こまかいことは気にしない子だ。

だいたい、すでに話し方からマイペースなんだ。

しかし、このペースになってしまふと、不思議なもので音楽みたい
に耳に心地よくなつてくる。

(もしかして、おれをフツてないと思つてる?)

ユツキーにかぎり、その可能性すらある。

約1年前、帰り道で夕日をバックに「おわかれしましょう」って、はつきりフラれているんだが。

「そんなに気になりますか」

彼女にしては強い口調で、おれの手を指さす。

にぎつてているのはスマホ。

話しながら何度もチラチラ見てたのが、バレてたか。

「え？ ああ……さつき女の子から告白されて」

まあ、と両手で口元をおさえ。

おこつている感じはない。むしろ、うれしそう。

元カノにバカ正直に言うおれもおれだが、ユツキーもなかなかユニークな女の子だ。

「とりあえず返事はしたんだけど、まだ迷ってるんだ」

「あ……お時間が……そろそろ行きませんと」

「ごめん、話しこんじやつたね。久しぶりにキミに会えて、うれしかった」

「……」

さわやかな表情で、さつそとターンしようとした瞬間、制服の胸のあたりをつかまれた。

そのつかんだ手に力をこめてユツキーが背伸びし、おれに耳打ちする。

「——連絡します。お使いの携帯、音も振動もオフにしておいてくださいね」と、過去イチの早口で言つた。

連絡？

とにかく、チャイムが鳴つたのでおれも急いで自分の教室にもどる。

連絡つて……。

ホームルームが終わつて、一時間目がはじまつた。

(きた!)

ユツキーからライン。

先生にバレバレだとは思いつつ、教科書を立ててバリアをつくつ

て、こつそりスマホを操作。

「やつほー！」

と、元気のいいメッセージ。

そうだ。思い出した。ユツキーって、メールとかラインだと別人みたいになるんだ。

「さあ、さつきの続きをよつ！」

「うん」

「迷つてるつて、どういうことダイ？」

「告白してくれた子と、つきあつてもいいのかな、つて」「どういうと？」

「おれにはもう一人」前の席の女子が髪をショートにしていて、たまたま／あいつ／にそつくりだつた。「好きな子がいるんだ。どつちが、自分にとつて正しい恋なのか、わからない」

「よし！　じゃあタロットで占つてしんぜよう！」

「え？」

そこで、やりとりが一時停止した。

10分ぐらいして、

「結果が出たよ！」

なぜか、おれは緊張していた。

そのワケは、ユツキーの占いはよく当たるからだ。不気味なほど当たりたる。おれが「13人の女の子にフラれる」ことも占いで言い当てているんだ。…………あれ？　つてことは、もうこれ以上おれはフラれないって意味にもとれるような……そんなことはないか。

「ききたい？」

「（）まできて、それはないよ」

「うふふ。では結果発表じゃ～～～！」　正しい恋の相手は――

古典の授業が、壁の向こうでやつてるみたいに、ほとんど耳に入つてこない。

おれはスマホをじーっと見つめつづけていた。

「？」

ん？

なんだ、これ。ハテナマークだけしかない。

「どういうこと？」

「天秤がつり合った。こんなの……はじめて♡」

「なんでハートマークなんだよ」

「うふ。とにかく、その二人で占つてみたけど、差がつかなかつたの
よう」

「どつちが正しいかわからないってこと？」

「そもそも恋愛に正しいなんてあるのカイ？」

「う……なんかいい感じっぽく言つて、強引にまとめられたぞ。
まいつたな。

そもそも、占いにたよろうとしたのがダメだつたか。

おれが、おれの恋愛をするんだ。おれが選択できなくてどーする。

「ありがとう。なんかスッキリしたよ。おれ、授業にもどるから」

「……くやしい」

「ユツキー？」

「二者択一じゃなくて、できれば三者択一がよかつたなうなんて！」

最後のコメントの下に画像つき。

自撮りで、みじかい三つ編みの彼女が目をぎゅつとつむつて小さい
口を四角くあけ、イー！ としてる。

思わずキュンときた。

かわいい。

（勇も昔は「イー！」つてよくやつてたな）

今も、たまにするけどな。

（三者択一か……まさか、まだユツキーもおれのことを……）

いや。

たしかに、フラれてる。これはシャレで言つただけでマジじゃない
と思うんだ。

もしかしたら……おれが本当は誰が好きなのかを占いで見抜いて、
自分から身をひいたつてことは考えられるけど。

「はー」

つかれた。

授業をこなして、放課後に演劇部で演技の特訓をみつちり受けて、

やつと下校。

雨がシトシトふる帰り道。

やつと駅についたところで、

「小波久くん！」

うしろから声をかけられた。

今までと声色こわいろがだいぶちがつたから誰かわからなかつたが、

「外井そといくん？」

「はい。ずっと、ここで待つてたんですよ」

片手でスクールバッグを肩にかつぎ、片手でビニール傘をさしているのは、勇の彼氏。

ちがう。

勇が自白したじやないか。彼は、彼氏じやないつて。

実際、彼からはもう「彼氏役」を降りたみたいな自由な空気を感じる。

おれは笑顔をつくつて片手をあげた。

「やあ。そつちも部活だつた？」

「いえ、今日は休みました」目線を横にそらして「すこし、おれと話しませんか?」と言う。

おれたちは駅の待合室のベンチにならんで座つた。

もう日は落ちてうす暗くなつていて、正直、めつちやハラがへつている。

「いやー」と、彼は自分の頭をワシづかみするようにさわつた。「うまくやつてたつもりですけどね。やっぱ、ボロが出ちゃつたか。どこで気づきました? おれたちがカツブルじやないつてことを」

外井くんは、さらつと大事なことを告白した。なんでもないことみたいに。

心のどこかでは半信半疑だつたおれも、もはや信じざるをえない。

「あれ? もう、バレてるんですね? 勇ちゃんから、そう聞いたん

ですけど……

「おれは気づいてなかつたよ」

「えつ」

「ある人が、魔法をくれたから」

おれは勇のウソを見破れた理由を説明した。

「あー、なるほど、そうきましたか。やばいぐらい頭がいーっスね、その〈ユナさん〉つて人」

「あの……どうして一人は

外井くんは顔をくしやつとさせて笑い、そのままペコッと頭をさげた。

「くわしいことは、おれからはちょっと……。そのうち、勇ちゃんから聞けると思いますよ。ほんとに、すみませんでした」と、また頭をさげる。

「いいよいよ、気にしないで」

「あのとき……」

彼はまつすぐな目で、おれをみた。

「心の底からうれしかったんですよ。ははつ。おれ、感情が顔にでないよう、かくすのに必死でした」

「え？」

「ほら、放課後に『やつぱナーネーション』って叫んでくれたじゃないですか」

パツとあの日の記憶がよみがえった。

外井くんに、幼なじみの勇をどう思っているかをきかれた場面を。おれは「友だちだよ」つてこたえて「恋愛感情は持つてない」とも言つたけど、それを「ナシ」つてソッコーで取り消したんだ。

「勇ちゃんを、お願ひします！」

かるく手をふつて、駅の改札と反対方向に走つていく。そういうえば彼つて自転車通学だつたか。この雨のなか帰るのは、大変そうだな。（とにかく——これで完全に、彼と勇がつきあつてるセンは消えたわけか）

電車の中ではずつと、勇のことを考えていた。

つまり「どうしてウソをついたのか」ってことだ。

ドッキリやサプライズにしては、手がこみすぎているし、実行した期間も長すぎる。

(ウダウダ考えるより、直接きくか)

それがよさそうだ。

おれは頭がよくないし、かけひきだつてへタなんだから。電車をおりると、雨はやんでいた。

いつもの道を歩いて帰る。

前に勇が立ち読みをしていたコンビニをのぞいたが、今日はいかつた。児童公園にも、当然いない。前から自転車がくるたびに、つい勇じやないかと確認してしまう。

気がつけば、おれは勇をさがしてばかりいる。家が近づいてきた。

(……ん)

声がきこえる。

あいつの声。

「…………正とは、そういうんじゃないけど

『だつたら』

家の前に人影が二つ。

向かい合っている。

勇と、ずいぶん背の高い男が。

男は学校の制服——つていうか、あれは転校生！ どうしてここに

！
おれよりも少しトーンの低い、声優のような聞き取りやすいイケボで、転校生は言つた。

「オレとつきあつてくれ」

彼と彼女の宣戦布告

やんでいた雨が、またふりだした。

はやく家中に入りたいけど、それはできない。

おれは今、数メートルはなれた電柱のかげにかくれている。

お気に入りの白いダッフルコートを着た勇と向かい合う、180以上はあるスマートな男。おれからは彼の後頭部しか見えないけど、かなりのイケメンだということはとっくに確認ずみだ。

制服の上着のすそから、白いYシャツのすそがチラ見えして。転校生なのに、はやくも制服を着崩してるので……って、そんなことはどうでもいい。

「もう一度いう。つきあつてくれ。オレは伊良部……いや、勇のことが好きだ」

呼び捨て！

あいつ、いくらなんでも勇と距離をつめるのが速すぎるだろ。今日「昨日転校してきた」って聞いたから、まだ2回、これをいれても3回目なんじやないか？

たしかに、やたらとスピード感があるっていうか、最初から女子を下の名前で呼ぶ男子もときどきいることはいるけど、たいてい「さん」や「ちゃん」ぐらいはつけるぞ？

「気持ちはうれしいけど」

「勇」

「いきなり、そんなこと言われてもさ……」

迷つってるそぶりはあるが、「勇」と呼ばれること自体はイヤがつてない。表情や態度でわかる。

つまり、もうそこまで親密になつてるつてことか？

おれの知らない間に。

まさかオツ、オツケーとか、しないよな！？

「オツケー——」

!!

「——とかダメとか、いえないよ。突然すぎて」

「わかつてる。返事はあとでいい。ごめんな。困らせるつもりは、なかつたんだ」

「うん……」

右手をのばし、そつと勇の肩にのせる。

何か言っているのかも知れないが、ちょっと小声すぎて聞き取れない。

「じゃあ。また明日、学校でな」

家の玄関のドアを開いた勇の背中を見送ると、くるつと彼がおれのほうに向いた。

やばい！

こつちにくる！

いや、べつにきたつていいだろ……とは思いつつ、電柱にくついて息をひそめて、どうにかやりすぐそうとする。

「お兄ちゃん！」

ききおぼえのある声。

「ぬれちやうよ！ ほら傘に入つて」

「いい。こんなこさめのほしの小雨だ」

そつと、顔を横にスライドした。

忍者のように気配を消して。

あれは……やっぱり星乃さんじやないか。勇が住んでいた一軒家に引っ越してきた女の子。

「翔。いいから、先に家に入つてろ」

「でも」

「小波久さんの家に忘れ物した。すぐにもどるから」
もー、とスネたようにいつて、赤いダウンジャケットを着た星乃さんがUターンした。

え？

今のかようだいみたいなやりとりは……。

考えていたら、

「…………お互い、体がデカいと大変だよな。かくれんぼもできない」

こんこん、と電信柱にノックの音。

まいつたな。

「よう

観念して姿をあらわしたおれに、まずアイサツしてくる。
そして笑顔。

意外なことに、人なつっこい。

「……はじめまして」

「オマエが小波久正だな？」

「そうです」

「あれっ」ははつ、と前髪をかきあげながら笑う。「タメなのに敬語とか。けつこ一人見知りするタイプなんだ？」

それより！ と、おれは強いまなざしで彼を見る。

「告白したんですね。勇に」

「おいおい、まさか立ち聞きしてたのか？」

「立ち聞きしてました」

「うわ。めっちゃ好きなタイプだわ。オレ、ウソつかないヤツ大好き
なんだよ」

すつ、と手をだす。

「ぜひ友だちになつてくれ。なつ？ 握手しよう」

おれは、彼の手をとらない。

正体不明の感情が、この手をとるな、と言っている。

「……勇に告白したつて、ムダですよ」

「は？」

「クラスメイトから聞いてませんか？ あいつには彼氏がいるんで
す」

「だから何？ オレのほうが勇を幸せにできるけど？」と、だしていた
手をひつこめて、ズボンのポケットにつつこんだ。

なんだこの自信満々ぶりは。

また「勇」つて言つてるし。

だんだんハラがたつてきた。

「あいつを呼び捨てにするのだつて……、どうかと思います。たぶん、

そつちが転校生だからスルーしてるだけだと思いますよ」

「へえ」

ぎらつ、とするどい視線。

中学のとき、ヤンキーくんにこんな目で見られたことがある。
水もしたたるなんとか——で、正面からのアングルは完全にいい男
でキマつてる。

いや!

絶対に、おれのほうがカツコいいけどなつつ!!

前髪にシャツと手櫛てぐしをいれて、背筋をシャンとのばして、気づかれ
ないよう少しカカトを浮き上がらせた。これで身長差はほぼなく
なつたぞ。

「はー……なえるわ」

彼が目をつむつて、肩をすくめた。

「わかりやすくケンカ売つてんのに、ちつとも買うそぶりがねー。オ
マエ、やつぱりいいヤツだな」

「ケンカ?」

「ちなみにオレは、シユートやつてる。ヘンな気をおこさなくて、よ
かつたのかもな」

シユート……サツカーのことだろうか？ それともバスケット？

「勇はき」近づいて、おれの真横にきた。「いい女だ。オレ……ぶつ
ちやけ女つてあんま好きじやねーんだよ。どいつもこいつも、オレの
〈見た目〉だけにしかキヨーミを示さないからな」

また、おれをにらんでる？

と思つたら、彼は肩ごしにおれの家のほうを見ていた。
すこしトーンが低めの落ちついた声で、彼はつづける。

「でも勇はちがう。あいつは男を外見だけで判断するような安い女
じやない。オレにはそれがわかつた。だからコクつたのさ」
「……」

「理由はもう一つある」

「えつ？」

「家の前で勇としやべつていたとき、遠くを見て、いきなり顔つきが変

わったんだ。たつた一瞬で、うれしそうな顔にな……それがグツとくるほどいい表情だった。彼女の目線の先を追つたら、道を歩いてくるオマエがいた」

「おれが？……えつ？　ちよつと待つて。じゃあ、おれがいるのを知つてて、勇に告白を——」

「雨が強くなつてきたな。さ、お互いウチに帰ろうぜ？」

歩いて背中を向けて、彼はダルそうに片手をパーにしてあげる。いろいろありすぎて、理解が追いつかない。

遠くで、もともと勇の家だつた家にあがつていく彼の姿がみえる。星乃さんが「お兄ちゃん」と呼んでいたから、きっと彼女の兄なんだろう。

その兄が、勇に告白した。

おれが近くにいることを知つてて。

おれに告白を見せつけるかのように。

がちゃ

と、数えきれないほど耳にしてきた、家のドアがひらく音。

「あーあー、ぬれてるじやん」

「勇」

はやくはやく、とドアをささえたままでおれに手招き。

ちよつと笑いながら。

「……ただいま」

玄関で靴をぬぐおれに「おかえり」と返す勇。
そして单刀直入に、

「聞いた？」と聞いてくる。

「聞いた」と正直にこたえる。

「私も、まさかだよ。あんなこと言われるなんて」

「まー……」ここが演劇部のワザのみせどころだ。さらつと、ふわつと、ナチュラルに、いかにも気にしていない風に「ことわるだろ？」ふえつ？　とハトが豆鉄砲みたいな顔になつた。

意外なことをいわれた、というリアクション。

それが、グラデーションのように、だんだんイジワルをたくらんで

るつぽい顔に変わつていつて――

「それは、どうかなー?」

片手を口元にあて、どつちつかざなことを言つた。



再度、トライした。

あの告白に対して、勇がどう返事するかの確認。
おれなりに頭をつかつて、今度は角度をかえる。

「つきあえないだろ?」

ちらつ、と横目でおれを見るも、何も言わない。

「一応、おまえは〈彼氏アリ〉つてことになつてるんだから」

「まーそーだねー」

と、またマンガに目をもどす。

おれのベッドを占領して、一人で寝つ転がつてゐる勇。

あお向けて、両手で天井につきあげるようにしてマンガを読んでいる。

「そんなに氣になるの?」

うつ。

おれのほうを見もせず、なんでもないことのように言いやがつて
……。

クリティカルな一言を。

気になるに決まつてゐるだろ。

だからおまえを、おれの部屋に呼んだんだよ。

「ジョーはさ、おつかしいの」

と、勇はマンガをおいて話す。

星乃 丈

それが彼のフルネームのようだ。

勇の話から、彼と初対面の状況を再現すると、

「オマエ、むかし飼つてたネコに似てるな」

「誰がよ。しかも、いきなりネコ呼ばわりするなんて、レディーに失礼
でしょ?」

「レディーにしては色気がないけど」

「それはただ、キミに女を見る目がないだけ」

ははは、どこで一人同時に笑つて、いきなり意気投合したらしい。「最初から『オマエ』とか言わるのはイヤだつたけど、あれがジヨーのキャラだし」

「キャラか……」

「彼女がほしかつたら、あいつを見習いなよ？ あれぐらい押しの強いほうが、女子にはウケるのかも」

「おまえも、ウケたのか？」

ぴん、と部屋が静かになつた。

「どういう意味カナ？」

おれは床のクツショーンから立ち上がる。

勇は、枕を抱き込むようにしてうつ伏せになつてしまつた。顔だけ横向きに、おれのほうに向けて。

ショートパンツからすらりと伸びる足。

思わずエッチな目で見そぐになるが、今はそういう空氣じやない。

「だから……あいつを好きになつたのか、つて

「好きだよ」

あまりにもあつさりと、言つてくれる。

おれの気持ちも知らずに。しかも、おまえは〈彼氏がいる〉なんて長い間ウソまでついてる。

カーネーツとくるものがあつた。

『言うな言うな言うな、とおれの中のおれが止めるが、止められない。

「そうか。おまえつて、けつこう軽い女なんだな』

勇の反応は、はやい。

ベッドの上で体を起こして、ななめにおれを見上げる。

「ちよつと！ 『軽い』つてなによ！」

「軽いだろ。カンタンに男子を好きになつてるわけだし」

「バカ！ 好きつてそういう意味じやない。好きにもいろいろあるんだから！ 友だちだつて『好き』つて言うでしょ？ アンタは……あ

の女つたらしで口クでもない児玉のことだつて好きつて言うんでしょ?」

「おい勇。おれの友だちをわるく言わないでくれよ」

「あー、ハラたつ!」

乱暴にドアをしめて、勇は出ていった。

部屋には、女の子のいいにおいだけが残つている。

(まつたく……バカだなおれは……)

言わなくてもいいことを。

ブレー^キがきかなかつた。

あまりにも、あいつが樂しそうに丈とのことを話してたからか?

たまつていたシットやジエラシー^{じよう}が暴走してしまつたのか?

(勇とケンカなんて——いつ以来だろうな)

思い出せない。

つまり、それぐらいレアつてことだ。

ということは、伸直りの仕方も忘れている。

ま……「ダメん」とあやまるのが一番だ。

部屋の中が、勇がいた反動でさびしくなつた。

テレビでもつけるか。

生放送の歌番組をやつてる。女の子のアイドルグループが、歌い終わつた直後のようだ。

「最近人気だよねえー、みはるんるん」

みはるん、とは彼女のあだ名。

制服のブレザーを改造したみたいなキュートな衣装を着て、司会らしい男の人マイクを向けられている。

「はいー。でも、すゞいショックなことがあつてー」

「そなんだ

「ある男の子に、まちがえてラインしちやつたんです。わかれよ? つてラインを」

「えつ」

「よく確認してなくて、めっちゃ本命の子にそれ送つちやつたんですよー。でえ、そのまま関係が終わつちやつてー」

「あ……そ、それ……ではっ！ 次のアーティストっ！」

司会の人が、すごくあわてていた。

やばいと思つたんだろう。たしかにアイドルらしからぬ話題だつた。

現役女子高生のアイドルの、立森さん。たてもり

おれは彼女に、ごく最近フラれたばつかりだ。

13回目に、おれをフツた女の子。

ため息とともに、おれはテレビを消した。

(すゞくおれのことっぽいけど、ちがうだらうな……)

幼なじみにさえ愛想をつかされるんだ。

アイドルになんか、想われるわけがない。それほどの男じゃないよ。

そして翌朝――

「勇」

玄関で靴をはいている勇に声をかける。

「昨日は、その……」

「ん？」

「ごめん。言いすぎた」

「正が『軽い』って言つたヤツ？」

おれも靴をはいて、いつしょに家をでる。

天気は快晴。

「おまえは軽くなんかない。おれ、ちょっとどうかしてた」
きゅつと勇の目が細くなつた。

これは、よからぬことをたくらんだときの目だ。

「よし。キヤラメルフラペチーノでゆるそう」

「おいおい」

と、二人でならんで数歩あるいたところで、

「えいっ」

勇と逆サイドから、腕をとられた。

ふにつとした感触が、手首あたりにふれる。

風でふわりと浮いた長い黒髪が、おれの鼻先をくすぐつた。

今日はポニー・テールにしていない。

かわりに、赤いカチューシャをつけている。

「待つてたんです。駅まで、いつしょで——いいですよね？」

正、と彼女のくちびるが、おれの名前を呼び捨てた。

「あ、あの……星乃さん？」

「どうしたんです？」

わざとなのか、すぐ近くにいる勇には、一回も視線も向けない。

勇のほうを見ると、めっちゃこまつた顔をしていた。

「正」

と、勇と彼女が同時に口にした。

ぐいーーーっと、力いっぱいおれを自分のほうに引き寄せて、

「私たち、つきあつてるんです!!」

勇に挑戦的なまなざしを向け、元気いっぱいに言つた。

「どうしてここに!?」は、おたがいさま

はつきり言つて、彼女は正しい。

「おつきあいしませんか?」に対し、おれが「いいね!」つて返事したわけだから、ふつうにカップル成立だ。

で、カップルだつたらおかしくない。
顔を合わせるやいなや、がばつ、とおれと腕を組んでも。
たとえ、おれの幼なじみの女の子がそばを歩いていたつて、気にしなくていい。

「あの……」

と、申し訳なさそうに勇に声をかける。

位置関係は向かつて左から、勇、おれ、星乃さん。

今日も彼女の髪のキューティクルはみごとで、頭にはくつきりとした〈天使のわ〉が浮かんでいる。

「勇さんは……正と、つきあつて……ないんですね?」

「正と?」と、勇はおれを指でさす。「じゃ逆に聞きたいけど、私つてこいつの彼女みたいにみえちゃう?」

フレンドリーな表情を星乃さんに向けた。

こいつは超がつくくらい社交的で人当たりもいいからな。
安心してみてられる。

きつと、すぐに星乃さんとも友だちに――

「…………みえません」

なーーーつ!!

勇と対照的な、しづんだ顔つきに重苦しいトーンの声。

赤いカチューシャの下の前髪も、一瞬で数センチ伸びたように目元が暗くなつて。

空気がわるくなつた。

や、やばいって、これは。どうにかして場をなげまさないと……。
「あつ、ごめんなさい。ウソです! ウソ!」

あわてて、両手をバイバイみたいにふつている。
顔は、少し笑つて少し恥ずかしそう。

「演技してみただけなんです……。ほら、正が演劇部だから」

そういうことか——つて、あれ?

おれ部活の話まで、もう彼女にしたつけ?

まー、知ってるつてことは、どこかでしたんだな。記憶にはないけど。

「あはは」勇が小声で笑う。「一本とられちゃつたみたい。ところでさ、二人がつきあつてるつていうのは——」

突然、静かな住宅街にバイクのエンジン音がひびく。
うしろからだ。

近くを歩いている集団登校中の小学生は全員、そつちに顔を向けている。

ふりかえると同時に、

「おい、勇!!」

と、おれの幼なじみを呼び捨てる大声。

カシヤツとメットの前の部分を上にスライドさせると、そこからシャープなイケメンの目があらわれた。

バイクに乗っているのは丈だ。星乃さんの兄キ。真っ黒なライダースーツで。

「あれっ、ジョーだ。どうしてここに? つていうか、すごいのに乗ってるじやん」

「すごいだろ? のつてけよ。のせてやるから」

ばつ、と勇に向かつて黒いジャケットをほうりなげた。

それを受け取つて、すんなりそでをとおしたのを見て、おれは思わず声をかける。

「勇。本気か? あぶなくないか?」

「……面白そうだよ。いつへん、のつてみたかつたし」
うそだ。

おまえ、絶叫系の乗り物、めっちゃ苦手だろ?

バイクに興味があるつていうのも、聞いたことがない。

「……」

丈に渡されたヘルメットをかぶつたところで、ちらつ、とおれのと

なりを見る。

まさか——おれと星乃さんを一人きりにするため——とかじやないだらうな?

それとも、苦手でもガマンできるぐらい、そいつのことが好きとか……いや、それはない……ないと思う。

バイクが発進した。

おれはその場に、星乃さんと、ささやかなモヤモヤとともに残る。ぎゅつ、とひときわ強くおれの腕を抱きしめる星乃さん。

二人乗りのバイクは、すぐに見えなくなつた。

「行こつ?」

口のまわりを白くして、彼女が言う。

息が白くなるぐらいだから、当然さむい。今は12月だ。おれは乗つたことないからわからないけど、バイクとか凍こごえるんじやないのか?

「わあ、すごーい。こんな近道あつたんですね」

そう無邪氣に話す彼女は、とてもかわいい。

いつしょに歩いていたつて、すれちがう中・高の男子はほとんど星乃さんを二度見していく。

ま……はり合うわけじやないが、中・高の女子からの視線なら、おれも同じ数ぐらいは集めていると思う。

「じゃあね、正。また……」

電車のドアがしまつた。

彼女の目はまっすぐ、おれをとらえてる。
ドアごしに見つめ合うおれたち。

す一つ、とホームに立つ彼女の姿が横に流れれる。

視界の限界ギリギリまで、見つめ合つた。なぜなら、彼女がおれからずつと目をはなさなかつたからだ。こつちからも視線を外せなかつた。

一人になつた車内で、おれは思つた。

彼女にきくことじやないし、誰も教えてくれることじやないけど——

おれたちつて、つきあつてるのか？



「すげーすげー！ ドゥカティだよドゥカティ！」

「ああ。あれはパニガーレだな」

どうか……？ ぱに……？

ツレの児玉こだまと紺野こんのがおれを置いてけぼりにして、暗号のようなやりとりをしてる。

「なんの話だよ」

「正、チャリ置き見てねーの？ クソほど人ごみできてたべ？」

「カズ。正は電車通学だから、見てなくてもしようがないさ」

「それよりコンちゃんよお、あれバリ高いっしょ。100か200だっけ？」

「いや……たぶん400以上」

「だから、なんの話してるんだって」

「単車の値段だよ」紺野が説明してくれた。「かるく400万はするだろうな。ふつうの高校生が出せる金額じやないよ」

あー、あの真っ赤なバイク、そんなにするのか。

そういうバイトしないと買えないな。

おれも女の子をうしろに乗せたいとか、ちょっとだけ考えたけど——
——自転車にも乗れないのに。

「でもさ」と紺野が言う。「うちの学校、バイク通学ダメだよな」

「えつ」

「あー、そうソレな。ソッコー先生に校門でとめられたんだろ？
すっげーバカじyan！ やー、転校早々笑わせてくれるよなー」

「とめられた……つて、それほんとか？」と、おれは児玉の肩をつかむ。
「マジマジ。で、なんかニケツしてたとかなんとか……」

こうなると、ウワサが広がるのは早い。

午前中のうちに、許可されてないバイク通学をして生徒指導室に呼ばれた丈と、そのうしろに乗っていたのが勇だということだが、みんなの耳に入つてしまつた。

(よくないな)

いろいろ。

まず勇のこと。

一応、あいつには彼氏がいることになつてゐる。なのに他の男子といつしょに登校——つていうのは、はつきり言って印象がわるいだろう。とくに女子たちに。

ま……あいつのキヤラからいつて、ハブられるとかはないと思うけど……。

もういつこ。

生徒指導室に呼ばれて、勇もいつしょに先生に叱られたつていうところだ。

だいたい、しんどい思いを共有するとキズナつてふかまるからな。このことをきっかけにあいつと勇との仲がさらに進展することもありえる。

不安のタネはつきない。

とりあえず児玉と紺野には、丈が近所に引っ越してきて、勇はたまたまバイクにのせてもらつただけだつて言つておいた。児玉のヤツは「またNTRされたんじやねーの?」と、しつこかつたが。

そして放課後——

「(ダ)きげんよう」

教室に春の風がふいた。

いまは冬の真つただ中だけど。

何事かを察知した児玉と紺野が、スススとおれからはなれてゆく。「お変わりはありませんか?」

「はは……まあ体は元気かな」

「あら、よかつた。私、あなたの体が欲しかつたのです」

なんてことを言うんだ、まだクラスメイトがたくさんいる教室で。

かかか、体が欲しい?

水緒さんもなんかそんなことを口にして、おれにセマつてきたけど

……

「急なことなのですが、明日の夜、時間を空けておいてください」
体が欲しくて、しかも〈夜〉だと!?

もはやアレしかないじゃないか、アレしか。

心の準備が——いや、おれには〈好きな子〉がいるんだ。キゼンとした態度でことわらないと。

「伊礼院さん！」

「はい？」とゆつたりした声で返事して、すこし顔をかたむける。

ポンパドールっていう前髪をガーツとあげておでこを出したヘアスタイルに、ウエーブのかかつた長い髪。

つねに春の陽射^{ひざ}しに包まれているような、ほのぼのした雰囲気の女の子。

その正体は、レベルちがいのセレブ。

家はプールつきのお屋敷で、コスプレじゃないマジの執事とメイドさんがたくさんいた。

「おれ……、おれは……」

「時間がきたらお迎えにあがりますので」

「いや、その」

「あなたは体ひとつだけを、ご用意しておいてください」

「……わかりました」

「押し切られた——のか？」

伊礼院さんは、ほんわかしてるようでも強引だからな。

思い出す。

今年の夏休み、あっちへこっちへと彼女にふり回された日々を。すぐフランされたけど。

（元カノと週末の予定が入ったか……）

その日、家に帰つても、とくに勇はバイクの話も丈の話もしなかった。

次の日、勇はよけいな気をきかせたのか、おれよりも早く家を出ていた。

まだ朝練を再開できるほど、足は治りきっていないと思うのに。
おはよう、と家の前で待つてくれていた星乃さん。

髪はポニーテールにしていた。その日の気分でヘアスタイルをかえるタイプの子らしい。

(完全に彼氏だ)

カーブミラーに小さく映る、腕を組んで歩く男女。
どこからどう見てもカツプル。

なのに、なんでおれの心は浮かないんだろう。
もつとウキウキしろよ、おれ。

彼女は、こんなにうれしそうにしてるのに。
まだチラついてる。

バイクのうしろにのつて遠くに行つた勇のことが。あのときの映像が。おれたちが、はなればなれになるイメージが。

(兄キは勇にアタックして、妹のほうはおれにグイグイくる、か)
いろいろ考えていたら約束の時間になつた。

ラインがきた。

「玄関の前にきております」

えつ?

あらためて、ほんとに体だけでいいのか?

スタジヤンにチノパンつていうラフなかつこうでいいの? と
言つて、デートのときはもつとオシャレするつてこともないんだが。
「（ア）き（ゲ）んよう」

と、車の後部座席の窓を下げて伊礼院さんが言つた。

「では参りましょうか」

ものの言いはソフト、しかし有無をいわせない静かな迫力がある。
参る、の一択のようだ。

その高級外車に乗りこんで、途中で高級ブティックに寄つて、たど
りついたのは夜の港。

車から彼女がおりたとき、カツン、とハイヒールの音が高く鳴つた。
「エスコートをお願いします。私の手を、おとりになつて」

おれたちを冷たい風からまもるように黒服の人人がまわりを取り巻
いた。

目の前には、想像よりだいぶ大きい、世界で一番デカいんじゃない
かつていう乗り物。

「この豪華客船は?」

「何もお考えにならずに、私に身をまかせてください」

おれが手をひいてエスコートしているはずの彼女が、おれの前に出でてしまう。

そのままみちびかれて、

(すゞい人がいるぞ。これパーティー?)

上にも横にも広い空間に、優雅な服装の男女。年齢はバラバラで、外国人の人もいる。

見わたす限り、きらびやかでゴージャス。

「正さん。こちらへ」

と、おれを手招きして、誰かに紹介してくれた。

よくよく聞くと、芸能関係のえらい人らしい。

ほかにも劇場の経営者とか、映画関係とか、テレビ局の人とかのところへつれて行つて、おれを休ませない。

「あなたの将来のために、大事かと思いまして」

二人きりになつたタイミングで伊礼院さんはそう言つた。

「恋人ではなくなりましたが、私はあなたの演劇の一人目のファンですから……」

そうだ。

一学期の終わりに演劇部の公演をしたあと、彼女に「ファンになりました」と声をかけられたんだ。

一言もセリフがない端役はやくだつただけどな……もしかして、セリフがないほうが上手にやれるってことか?

すこし席を外しますね、とブルーのドレスを着た彼女が遠ざかつていく。

胸元が大胆にあいていてめっちゃセクシーなドレスだった。しつかり目に焼きついた。

(まいつたな)

一人、とり残されてしまった。

とりあえず、近くの反射するもので身だしなみをチエックだ。金とか銀とかキラキラしたものは多く、鏡がわりをさがすのには苦労しない。

仕立てのいい黒のタキシードに白いシャツに黒い蝶ネクタイ。オーケー。

ベストオブベストなイケメンだ。セレブのパーティにいたつて見劣りはしない——と、ちかくの人と自分をくらべてみる。

(…………けつこう、あいつもかつこいいな)

真っ赤なスーツを着て金髪で、かなりの長身。モデルのようなスタイルに、ただ者ならぬオーラ。ペラペラと英語をしゃべっている。パートナーらしい女性を一人つれている。この人も彼と髪の色が同じ。

純白のドレス。ノースリーブで、この季節にはすこし寒そうだ。胸に赤いバラのコサージュ。耳にはシンプルなイヤリング。デコレーションには白い真珠のネックレス。

(きれいな女人だな——つて、最近一目ぼれしたばかりだろつ！
気が多すぎるぞ！)

心で自分をドヤしつけるも、おれの目は彼女にクギヅケだつた。
黄金色の髪はショートカットで、活発な印象。まるで勇みたいだ。
男に話しかけている声も、勇にそつくり。

ん？

そつくりじやなくて……あれは……。
もつと近づいてみよう。

じ一つと見続けるおれに気づいて、あいつは他人に向けるようなまなざしをこつちに向かた。

それが「あつ！」という表情になつて、

「どうしてここに？」

おれたちはおたがいの体を指でさし合つて、ハモつた。

ゴールデン・バツド

幼なじみが金髪になつた。

べつに髪の色を変えるぐらい、なんにもわるいことじやない。
問題はほかのところに、たかく山積みになつていて。

「勇！…………だよな？」

「……」

「勇。頭、それカツラか？」

「……」

「なんでこんな場所にいるんだ？」

目をふせた。

しかし、今、たしかに勇の声を聞いたし、見た目だつて本人そのもの。

疑う余地なんか一ミリもない。

「……」

「どうしてだまつてるんだよ！」

大声で視線がおれたちのほうに集まる。

これが大声を出さずにいられるか。

たのむから「そうだよ」つてあつさり認めてくれ。言つて、にこつ
といつもみたいに笑つてくれよ。

それとも、だまらなきやいけないような、うしろめたい何かがある
のか？

「Sorry」

それだけ、聞き取れた。

その英単語とともに、赤いスーツの男がおれと勇の間にスッと割つ
て入る。

「丈？」おまえは星乃丈だろ？」

問い合わせても、こたえない。

片つぽの口角だけをぐーっとななめに上げるフテキな表情。

勇ほど確信はないが、こいつはたぶん丈だ。髪をブロンドにして、
目には青いカラコンまで入れていて。

「どいてくれ。おれは勇と話がしたい」

「――――！――」

おそらく早口の英語。

まったくリスニングできない。

というより、ただまくしたてるためだけに、しゃべっているような感じだ。

「――？」

「いや……わからないです。ちょっと、そこをどいてくれませんか」赤ースーツが「やれやれ」の顔つきでゆっくり首をふる。

これは長期戦か――と思つたその瞬間、すんなりワキにどいた。あらわれる勇の姿。

白いノースリーブの華々しいドレス。スカートは床をこするほど長い。まるでウェディングドレスだ。

「勇！」

おれの呼びかけに、はつと顔をあげた幼なじみ。一歩、近寄つたそのとき、

チュウ

と、赤いスーツの男が頭をお辞儀のように下げて、勇の頬にキスした。

ただのアイサツみたいに。

目を丸くしておどろいてる勇。

エアコンの風のせいか、ぶわわつ、とショートの髪の毛先が静電気で逆立さかだつたように浮く。

そのまま、くちびるをつけたまま、男の目だけが横に流れておれを見る。

（勇はオレのものだ）

そんな挑発的な目だつた。

「……ちょっと！」

男に手を伸ばそうとしたタイミングで、わーっ！　とパーティーカ会場全体が拍手と歓声で沸いた。

みんなの視線は上に集中している。

ふき抜けの二階の手すりのところに、誰か知らないけど、パーティの主役のような人がいて両手をふつていてる。

と、まわりにつられておれもそこを見た一瞬のスキに、

(うそだろ)

男と勇がいなくなっていた。

男……あいつはまぎれもなく丈だ。

丈が、ほつぺとはいえおれの幼なじみに……

「あら? こちらにいらしたの?」

「伊礼院さん

「まだ、あなたを紹介したい方があります。さあ、いつしょにきてください」

両手で腕をとつて、おれをひっぱる伊礼院さん。
きつちりとまとめたポンパドールの黒い髪が、シャンデリアの光に
照らされている。

大急ぎで360度、勇をさがしたけど、いない。

そもそも人の数が多すぎる。

「正さん? どうかなされました?」

「いえ……」

その後も、タイミングを見て勇を見つけようとしたけど、ダメだった。

ではそろそろ、と伊礼院さんの車に乗せられて帰宅したのが夜の9時前。

(いる)

勇のクツ。

外出用のお気に入りの白いスニーカー。学校用のはき古したクツ
もちやんとある。

リビングにはいない。

じやあ、自分の部屋にいるのか……。

食事のとき、勇のお母さんにあいつがいつ帰宅したかをきいてみたら、だいたい一時間前だつて言つた。

そしてフロに入つて、

「あつ」

入れない。

先客がいた。

湯舟につかる勇を見てしまつた。「あつ」と声をあげたのは、おれ。髪は黒かつた。

そして、ここが正しく重要なところだが、勇が見られたくないと思う部分はまつたく見ていない。

(やつてしまつたな……ばつちり目も合つたし)

まーでも結果オーライじゃないか?

あいつにどなられる、からの、どうしてあそこにいたんだよ、となつて、じつはね……みたいな流れに持つていけそうだ。

しかし……勇も、もつと「入つてるから!」のアピールをしてくれよ。

着替えのスペースは力ギかけられないんだから、外のプレートを「使用中」にしておくとか、目立つように着替えの服をおくとか、ぱしゃぱしゃ音をたてるとかだな……あまりにも静かで中には誰もないと思つたぞ。

そろそろ、くるか?

(…………あれ)

こない。

いくら待つても「バカ!」がこない。

それどころか、このクスンクスンいつてる音はなんだ?

もしかして、泣いてるのか?

ちらつとみえた姿も、そういえば片方のほっぺをおさえていたし

(まさか)

アレが原因か?

船の上であいつにされたキスが。

だとしたら――

(いや、今から外行きに着替えてどーするんだよ!)

自分の部屋で、いつたん深呼吸する。

ぼすん、とベッドにすわった。

そこでスマホに着信。

ウチのルールで夜間はスマホ使用禁止で親にあづけないといけないんだが、あずけるのをすっかり忘れていた。

(そのルールを友だちはみんな知ってるから、おれに夜に連絡がくるつてあんまりないんだけど……)

むな
胸さわぎがした。

それも、かなりわるい予感。

「あ。よかつた。レスきた」

ラインしてきたのは、クラスメイトの国府田さんだつた。

おたがいに連絡先の交換はしてるけど、彼女とプライベートなやりとりをしたことは一度もない。

もしや告白されるのか、とも思つたが彼女にかぎつてそれはないだろう。彼女から〈好き〉のサインを感じたことはないからだ。

ぽんやり頭に浮かんだ国府田さんが、すこし茶色の髪をサツと耳にかきあげる。

「緊急でね。学校じゃちょっと……の内容だから」「なに？」

「ところで伊良部は元氣？」

ドキッとした。

なぜ、いきなりあいつの話になるんだ？

「勇なら元気だよ。どうして？」

「転校生クンになんかされてない？」

なんだ、このラインは。

船でのことを見てきたかのようだ。

どんどんドキドキがはやくなる。

……お、おちつけ。

こういうときこそ、平常心だ。平常心。

「あのさ、学校の裏サイトでね、よくないウワサがあるの」「裏サイト？」

「あー！ 正クンはそこは知らないいいの。あそこはうす汚れてる

からね、かかわらないほうがいい」

「わかつた。じゃ、そのウワサっていうのは?」

衝撃の内容だつた。

あいつ……星乃丈が、よそで暴力事件をおこして転校してきたとい
う話。

「確定じやないけど、どうもマジっぽいんだよねー」

「そなんだ……。さつき勇のことを気にしたのは?」

「彼のほうがお熱ねつだからよ。教室でもずっとワンアンドオンリーって
いうし」

「ワン……? ごめん、英語わからない」

「二人だけの世界をつくつてるっていうか、そんなヤツ。女子のグル
ープも、とうとう伊良部のことを避けはじめたみたいでね」

「いや勇はわるくないだろ!」

「おこらな。私、そんなつもりで忠告したんじゃないから」

スマホの画面はそのまま変わらない。

おれはじっと画面を見つめている。

しばらくして、

「とにかく伊良部を気にかけてあげてね?」

と、国府田さんから最後のラインがきた。

おれはベッドに寝た。

やつぱり思つたどおりだ。勇のクラスでの立場が、わるいほうへ進
んでいる。

時計をみた。

もう夜もおそい。

明日だ。

明日、おれは——

(文句を言う!!)

朝の9時。

おれは、となりのとなりのとなりの家のインター^{ホン}を押した。

もう決心はついてる。

丈に、おれが言いたいことをぶつける。その結果、どうなつたつて

かまわない。

たぶんあいつはむちやくちやケンカが強いんだろう。
おれはボコボコにされる。

たつた一つだけ他人にジマンできる最高のイケメンフェイスも、ひじょうに残念なことになるはずだ。

かまわない。

それでもいい。

おれは大切な幼なじみを泣かせたあの男を、絶対にゆるすことがで
きない。

「おー正じやん」

運よく、玄関から出てきたのは丈。

すこしボサついてる髪は……真っ黒だ。やはり彼もカツラとか
だつたのか。

「顔……かしてください」

「ははっ。敬語でいうセリフじやねーな、それは」

ダルそうに言つたが、それでも彼はおれについてきてくれた。

上下黒のジャージの上に、こげ茶色の革ジャンを着ている。

近くの公園のベンチに、どかつと腰を下ろす丈。

「朝はえーから、誰もいねーな」

「昨日の話ですけど」

「おまけにこの寒さだ。さつさと用件をすませてくれ」

「勇にキスを——」

丈の目つきが変わつた。

異様にするどい。

ケンカ寸前の空気。

「オマエはナニモンだよ」

「え？」

「勇の恋人じゃないよな。そこについては勇に何度も確認をとつたん
だ。まちがいはねー」

「それは……」

「たしかに、あのパーティーに勇をさそつたのはオレだ。だがムリ強じ

いしたおぼえはない。あくまでも、あいつはあいつの意志での場にいたんだ。ここまでではいいか？」

「勇が……」

「オマエがキスしたことなどをどっこーつていうなら、それもスジがちがう。だつてよお、オマエは彼氏でもなんでもないんだからな。オレは勇になら怒おこられてもいい。グーでなぐつてもいいし、ビンタだつてよろこんで受けるぜ」

丈は座つたまま、ハグを求めるように両手をひろげた。

「ただしオマエには、とやかく言われたくないね。ま……くちびるを奪つたわけじやねーんだし、ガタガタさわぐなよつて感じかな」

「勇に手をだすな」

「あ？」

おれは、ショードー的というか、何かみえない力で動いていた。
胸倉むなぐらをつかみ、強引に丈をベンチから立たせる。

「勇はおれの……」

「ちつ」

イヤそうに、おれの手を手の甲ではらう。
つよい力だ。手首がジンジンする。

「正。今からちよつとクセーこというぞ。鼻、つまんどけよ」

そうおれに面と向かつて言つて、につ、と片方の口角だけをあげる微笑。

「恋に早いモン勝ちはない……つてな」

背中を向けて、丈が公園から立ち去つた。
やむをえず、おれも家に帰る。

その日、リビングでくつろいでいたら、テレビでインフルエンサーの特集をしていた。ようするにSNSの有名のことだ。

「あら？ これ星乃さんの息子さんに似てるわねえ！」

とお母さんが言う。

まさか、と思つておれも見たら、本当に激似げきにだつた。
つていうかこれは……

(豪華客船で会つたときの丈じやないか！)

名前はジョー・スター。

金髪で青い目。長身でモデル顔負けのスタイルに、美形の顔。
(インフルエンサー……だからあんなセレブのパーティーにいたのか
?)

なぞが少しどけた。

ところで、今このリビングに、勇はない。
自分の部屋から、出てこないんだ。

部屋の外から声をかけても、返事はない。

(……あいつらしくないな)

落ちこんでるんだろうか。

でも何が理由で？ やっぱり、キスされたことか？
くそつ。

もつとキツーーーく、丈に文句を言つとくべきだつたか……。
「どうした？ 元気ないな」

月曜日の朝、おれをみかけた紺野の第一声がそれだつた。

勇の落ちこみがおれにもデンセンしたみたいだ。

児玉のヤツは、なんも気にしてなかつたけど。

授業もうわの空。

あつという間に放課後になつた。

「やべー！ やべーって!!」

一度教室を出ていつた児玉がもどつてきて、補習の準備をしていた
おれのところにやつてくる。紺野はもう部活にいつてて、いない。

「どうしたんだよ」

「あれはスト^ち値が9……いやひよつとして10かあ？ テンションあ
がるわー」

「おい」

「いーからいーから」

おれを手招きして廊下につれ出す。

ちようどここから、学校の正門が見下ろせる。

門の近く、人の流れをさけて、ぽつんと立っている他校の女子。赤
いブレザー。

「あの子だよ。やべーだろ？　ぶつちぎりでかわいいじゃんよ！」

「翔」

「へつ？　ショートてなに」

「彼女の名前。おれ、あの子を知ってるんだ」

まじか？　さすがショートだぜっ！　と、児玉はうれしそうに言う。
ははは……と愛想笑いを返しながら、おれは心中おだやかではな
い。

彼女——星乃翔が突然あらわれたのは、もちろんおどろきだ。
しかし、それとはちがう角度のショック。

ホラーといつては彼女にわるい。だが、こわいものに触れたときに
近い感情になつていてる。

おれの背中を、つめたい汗が一筋、ツーッと流れていった。
(どうして、あの〈髪型〉にしてるんだ？　まるつきり、伊礼院さんと
同じじゃないか)

はるか遠くに見える彼女は、前髪をすべて上げてまとめるポンパ
ドールと呼ばれるヘアスタイルにして、ロングの髪にはゆるやかな
ウエーブをかけていた。

揺れ

たまたま、つてことはある。

たとえばおれと彼女は、たまたま名前が同じだ。正と翔で、漢字がちがうだけ。

それに、あの子は髪型をよくかえていた。
たまたま、おれの元カノと同じヘアスタイルになつても、べつに――

「ちよつ。おまえもくるのか？」

「いーからいーから」

急いで階段をおりるおれのうしろを、児玉こだまがついてくる。
「あれだけの女の子を前にして、ただのギャラリージやいらんねーよ。
おれにだつてワンチヤンあるべ？」

ツンツンした前髪の先を指でねじりながら言う。

こいつには「おまえ彼女いるだろ」というリクツはつうじない。さらには「彼女をキープする」という、おれにはすこし理解しがたい考え方までもつているヤツだ。

「邪魔はしないでくれよ」

「しねーよ。おお！ やつぱレベル高たつけえー！」

校門のそばで立っている星乃ほしのさんがおれに気づき、ぺこっと頭をさげた。

彼女のバックに、赤い夕日がある。

「正！」

「どうしたの、おれの学校まできて……」

「会いたかつたから」

言葉もまなざしも、まっすぐ。

はやくもハートがやられそうになる。
いや……やられてる場合じやないんだ。

おれは彼女を、好きになりすぎちゃいけない。

「ありがとう。うれしいよ、おれに会いに来てくれて」

「いいえ」

「それで、その、言いにくいんだけどさ」「はい？」

「ちよつといつしょに帰るのは、むずかしいかなって」

シズむ、とみたが、おれの予想ははずれた。

気落ちした様子もみせず、ぜんぜん平氣な顔をしてる。

「今から補習ですか？ それとも部活？」

「え……」

おかしい。

どうしてこんなにピンポイントで当てる？

おれ、成績がよくなくて補習を受けてるなんて、彼女にぶつちやけただろうか……？

「あー、えっと、両方あるんだ。補習が終わつたあとで部活にも出ないといけなくて。ざつと二時間以上はかかるから——」「まちます！」

すつきりと出したおでこの下のつぶらな瞳ひとみが、おれをじっと見る。「そんなことさせられないよ。寒いし、だんだん暗くなつてくるし、一人ぼつちだし」

「大丈夫です。私、まちますから」

「オッケーわかつた!!」

おい児玉。

ここで出てくるなよ。

「じゃあ、おれが時間つぶしの相手になるぜつ。おどるから駅前の力フエにでも——」

「けつこうです」

くるつと回つて背中を向けた！

ここまで圧倒的な〈NO〉には、そうそうお目にかかれないと

言葉も態度も、カチンカチンに冷たい。

「そ、そつか…………。おう…………いや、また明日な、ショー……」

がくんと肩とテンションを落として、児玉が遠ざかつてゆく。

おれも13回もフラれてはいるが、今この瞬間のあいつのダメージのほうがはるかに大きいような気がする。

「私、ああいう人きらいです。初対面なのになれなれしいなんて」

「でもいいヤツだけど」

さつ、と彼女が目線をおれからはずす。

数秒の静かな間^ま。

北風が星乃さんの長い髪をゆらす。ウェーブでうねっている部分が、ところどころキラキラひかつてゐる。

いつのまにか、すこし人だかりができていた。おれたちを丸く囲んで。

やばい。

注目を浴びるのがじやなくて、そろそろ補習開始のチャイムが鳴る。

「星乃さん。とにかく、今日はおれを待たずに帰つてほしい。たのむ」「私のことなら、気にしなくていいのに。やつぱり正つてやさしい……」

おれと目線と彼女の目線が交わつた。

まだ。この感覺。目を外すことができない、フシギな魔力。心を揺さぶられて、ずつと見つめていたいと思つてしまふ。

「正！」

おれを呼ぶ声にハツとする。

これは勇^{ゆう}。

数えきれないほど耳にしてきた、あいつの声だ。

この声で、安心した自分がいる。

おれはやつぱり——

「アンタ、ダブつてもいいの？」

おい。

いくら幼なじみでも、それが一言めで言うことかよ。まわりのみんなも聞いてるのに。

しかし、なんだこの、胸の奥からホツとする感じは。

「勇……」

「ほら、はやく

と、顔をおれに向けたまま教室のほうを指さす。

「家にもどつたら話はなそ？ 私、正に伝えたいことがあるから」

「えつ」

とここ歩いて、おれと星乃さんの間に割つて入る勇。何を言いだすのか、と待つていると、

「こゝは私と帰つてみるのはどう？ そしたら正の小さいときのイロイロも教えてあげるよ？」

「……興味ぶかいですね」

チャイムが鳴つた。

じゃおれ補習に行くからなあとはたのんだぞ勇、と舌をかみそな早口で言つて教室にかかる。

(イロイロつてなんだよ)

いつたいどんな恥ずかしい思い出をバクロするつもりだ？

心当たりがありすぎて、おれは気が氣でない。

ダッシュで階段を上がつて、廊下の窓から校門を見下ろすと、二人はもういなかつた。



ジタバタしたつて時間はない。

なるようになるだけだ……つていうのはクリスマス公演の話。

学校の外でやるイベントだからあまり教室とかでは話題にならないけど、一応、うちの演劇部が一番チカラを入れている。ひそかに業界の人もめっちゃくるらしい。

(おれが一人芝居つて)

大丈夫か？

今さら「やめます」とは言えないが。

(テーマは『告白』……)

一人でやるんだから、もちろん舞台の上にはおれ以外に誰もいない。

すなわち告白相手をイメージしなければならない。
たぶん初恋の人の、塔崎とうざきさんを思い描えがくか？ いや、フられてるつ

ていう事実があるからダメだ。同じ理由で元カノの12人もダメ。
ちがうだろ。

おれはどうして、こうやつて目をそらしてしまうんだ?
告白したい相手は、一人しかいないだろ。

「どーぞ」

ノックの返事があつて、勇の部屋に入る。

あわい黄色をベースにして、女の子らしい小物がたくさんあつて、
なぜかおれの部屋とちがつていよいのする部屋。

時間は9時。この時間になつたら私の部屋にきて、つてあらかじめ
言われてたから。

「さてさて……何から話そうかなー」

ぽふつ、とクツショーンの上におしりを落とす勇。リラックスしきつ
た、あぐら。

ただいつもとちがい、服がだらしなくない。

首回りが少しヨレたTシャツにショートパンツじゃなく、しつかり
上までジッパーをしめたグレーのパークーに白いハーフパンツとい
う服装だ。めずらしい。

(おれを〈男〉として警戒してゐるのか?まさかな)

とりあえずこつちからジャブを打つことにする。

「星乃さんには、なにを話したんだ?」

あー、と勇はつぶやく。

「あー、じゃなくて」

「いやさあ、あの……しゃべってないんだよね」

よく聞けば、今日の帰り道、どつちもほとんどしゃべらなかつたと
いう。

ゾクツとした。

なにかイヤな予感というか、わるい何かが水面下で進行しているよ
うな……。

「ま、まあ、おまえとちがつて彼女はシャイだからな」

そうお茶をにじして、話題をかえる。

「ところで、おれに伝えたいことつてなんだ?」

勇はローテーブルに頬杖ほおづえをついている。

おれはクツショーンに座つたままで、気持ち背筋をのばした。

「だいたい、わかるでしょ?」

「土曜日のことか?」

「うん……」

頬杖をやめる。

そして、正座になつて、ふかぶかと頭をさげた。

「ごめん」

言い終わると、ぱつ、と下げたときの倍のスピードで頭を上げる。
「はー、すつきりしたーー!」

はればれとした顔で言い、気持ちよさそうに両手を「うーん」との
ばす。

手をのばした瞬間、小さく胸が揺ゆれたな——とか言つてる場合じや
なくて。

あつけにとられる、おれ。

何に「ごめん」なのか、まつたくわからない。

「勇」

「あやまつた理由でしょ? それはね……私が勝手に落ちこんじゃつ
て、正に迷惑をかけたから」

「迷惑とかは、思つてないけど」

ふつふーん、と勇はなぜかドヤ顔をする。

姿勢も、あぐらにもどした。

人差し指の先をおれに向け、トンボの目を回すようにくるくると回
す。

「私、正ならそう言つてくれると思つていたよん」

「迷惑でもないし、あやまる必要もないよ。おれとおまえの仲だろ?」

「キュンとすること『うじやん』

「そもそも、どうして落ちこんだんだ?」

やつぱりあのキスか? とつづけそうになつた。

だがブレーキをふむ。

なんとなく、あのキスのことは勇には思い出してもしくないから

だ。

「どうして？ んー……自己嫌悪っていうのかな……なんかね、あの場に私がいたこと 자체、正にわるいような気がしてさ」

「わるくないだろ。そんなにアヤしいパーティーでもなかつたし」

「ははっ。そうだよね」

勇が笑ってくれて、部屋がいいムードになつた。

押せ！ と、おれは心で思つた。

ただし、つきあつてくれとか彼女になつてくれのド直球じやなくて

「と、ところで」

つきあいが長すぎて家族にまでなろうとしている女の子の前で、おれは緊張している。

「クリスマスはどうするんだ？」

「ん？」

「もう〈彼氏〉との予定はなくなつただろ？ おまえに〈彼氏〉なんか、最初からいなかつたんだから」

「トゲのある言い方だな！」 ぷー、とほっぺをふくらませる。「彼氏じゃなくても、私にだつて言い寄つてくる男の子ぐらいいるんだから」

「それ……丈のことか」

「じつはさ、またバイクに乗らないかつてさそわれてるんだよね。で、イブの日に、二人で遠出してみないかつて」

丈。

星乃さんの兄キ。

機嫌よくしゃべる勇のうしろにあいつがチラついた気がして、おれは揺れた。

ブレーキが壊れた。

「やめとけよ」

「えつ？」

「知らないのか。星乃丈つて、よそで暴力事件を起こしたせいで転校してきたつて——」

喜怒哀楽、どれでもないような勇の顔。

もとから静かだったけど、さらに静かになつたような部屋の中。
もう後悔はしてる。言わなきやよかつたつて。

「正……それ、丈のヤツが自分で言つた？　あいつが私に話してもいい
いつて……自分から言つた？」

「あ、いや」

「バカ！　そんなの……かるがるしく言つていいことじやないで
しょ！」

ばん、と手のひらでテーブルをたたく。

その振動で、テーブルの上のペットボトルが揺れて床にころがつ

た。

「おれは……」

「出てつて」

勇が横顔を向ける。

さつきの勇のように「（）めん」とあやまろうにも、今はタイミング
がわるい。

仕方なく立ち上がる。

目とまつたのは、出窓のどこにあるミニサボテン。

トゲトゲのてっぺんにある小さな白い花は、しおれていた。

（口がすべつたな……丈にもわるいことをしたか）

ただ言いわけをさせてもらえるなら、おれは本当に、勇のことが心
配だつたんだ。

こうして、また勇との間にミゾができてしまつた。

いつ仲直りできるんだろう。

もう明後日は、クリスマスイブだつていうのに。

最後のインビテーション

最近、おれと勇の関係がおかしい。

ケンカっていうか、すれちがいつていうか、そういうのが増えている。

前は、こんなことはなかつた。

ちょっとした口ゲンカさえ、ほとんどなかつたんだ。

これは、どういうことだ？

もしかして、ふつうの幼なじみの関係から変化しつつあるからなのか？

(きつかけはどう考へても「あの一人」だよな)

星乃さんと、その兄キの丈。

朝の時間、アツアツのトーストをかじりながら、そんなことを考えた。

家を出る前にリビングをのぞくと、勇が背中を向けてソファに座つていた。

すでに制服姿。

もしかして、おれを待つっていたのかと思つて、

「いつしょに行くか？」

さわやかに声をかけた。

順番から言えば、まずおれがあやまるのが先なんだけど、それはあとでどうにでもなる……

……という読みは、甘かつた。

「やだ」

と一刀両断。

しかも背中を向けたままで。

「気をわるくしないで。先客にエンリヨしてるだけだから」

「先客？」

玄関の方向を指さす。

「私より100倍かわいい女の子が家の前で待つてるよ。はやく行つてあげて？」

「勇。まだ怒^{おこ}ってるのか？」

「……」

「せめてこつち向いてくれよ」

そこで、勇のお母さんがおれを呼びに来て、外は寒くて待たせるとわるいからって背中をグイグイおされてしまった。

イヤな予感。ケンカ……つてほどでもないけど、このケンアクな感じが長引いてしまう予感がした。

できれば今日、演劇部のクリスマス公演の話をして、そこに勇を誘^{さそ}いたかつたんだけど……。

「おはよう、正」

よくみかけるスクバじやなく、ちょっとレトロな学生カバンを両手で……カバンの一番上の取っ手の部分を両手でもつて、両腕のラインが△△みたいになっている。

真っ赤なブレザーに、赤いチエツク模様のスカート、白いマフラー。160ちょっとだろうけど、頭が小さくてスタイルのいい、堂々たるモデル体型。

風で横に流れる長い髪。

少しはにかんだような笑顔。

どこをどの角度から見ても、美^び。

自分がぶつちぎりのナルシストなことも忘れるぐらい、彼女に心をうばわれそうになつた。

そして多くの男子女子の視線を集めながら、おれは星乃さんと登校ルートをあるく。

「静かに歩きたい気分ですね」

口下手なおれを気づかってか、彼女がそんなことを言つてくれた。たしかに、女子と一対一のトークは二ガテだからな。

それを理由に、フラれたりもしてるし。

おもむろに腕を組んでくる星乃さん。

肩のあたりから、ふわつ、と彼女の髪のいい香りがくる。

(まぎれもなく登校デートだな……)

電車の中。

通学の時間帯だけど、けつこう空いていた。もう二学期が終わつて
いる学校も多いからかな。うちも今日で終わる。今日が終業式だ
……つていう話をしたあと、いきなり髪型の話になつた。

「昨日は失敗しました」

「え？ 何が？」

「なれないヘアスタイルだつたから時間がかかりすぎたんです。もう
少しで遅刻しちゃうトコでした」

なるほどな。

それで昨日の朝は、家までおれを呼びにこなかつたのか、と納得。
この流れで「あれは元カノをマネたの？」と突つこんで質問してみ
たいところだが、今はやめておこう。

「これが一番楽なんですけど」自分の頭に片手をあてる。「なんか手抜
きしてるみたいにみえません？」女の子をがんばってない感じつて
いうか……」

長い髪を、ゴムも留め具もつけずにただ垂らしている髪型。

彼女をはじめて見たときも、この髪型だつた。

「いや、いいと思うよ」

「ほんとに？」

となりに座つている星乃さんが、うれしそうな顔でおれを見る。
彼女は長いシートの端っこにいて、おれの位置はそのすぐ横。

「正」

まっすぐな視線。

「私、正の好みにしたいの。ねえ、どんなヘアスタイルが好き？」
「どんなつて……べつに……気のことないよ」

「言つて？」

がたんがたん、という音だけになつた。

耳をすませてるわけじやないと思うけど、まわりにはおれたち以外
しゃべっている人がいない。

ふと、出がけのあいつのことが気になつた。

ショートカットの後頭部。

「勇さんのことを考えてます？」

「まあね」と、おれはウソをつかない。自分でも、なんでこんなナチュラルに受け答えしてるので、よくわからない。「おれは髪のみじかい女の子が、好きなんだ」

ほんとですか……と、あきらかに彼女のテンションが下がつてしまつた。

おれのせいだ。

ウカツなことを言つたから。

信じられないミスだ。

急いでフォローする。

「いや、ごめん、冗談だよ。イジワル言つてみたくなつただけさ」

「ずっとそう

「え？」

「ずっと正は……勇さんのことを考えてる。私じゃダメですか？」 彼女になれませんか？ まだ彼女にしてくれないんですか？」

たて続けのハテナマークが、いちいちおれの胸にササる。

なにも言い返せない。

ダメだ。

ここは演劇部の演技力を活かして、どうにか――

「あ。友だちからラインが

なるべく自然な感じをよそおつて、おれはスマホに一時避難した。

「…………私もです。お兄ちゃんから、きてますね」

丈か。

まあ、家族間の連絡みたいなことだろう。
とくに気にすることもないな。

「勇さんといつしょに登校してるので。今、駄だつて」

「えつ！ まじか!!」

星乃さんの目が、かなしそうになつた。

数秒おくれて、ミスを重ねてしまつた自分に気づく。

「…………ウソです。ラインなんかきてません。でも、やっぱり正は、勇さんのこと……」

「ごめん」

「いいんです」

車内にアナウンスが流れた。

次の駅は、彼女がおりる駅だ。

ふかい意味はないんですけど、と前置きして、おれの目をじつとみて話す。

「お兄ちゃんは、妹の私から見ても、かなりカッコいいです。正も、そ
う思いませんか？」

「そうだね」いーや、おれのほうがずーーーっとカッコいいよ!! って
反論は、心の中だけにしておいた。ふざけている場合じゃないから
な。「あれだけカッコいいなら、彼女も——」

「いません。ああ見えて、一度もつくったことないんです」

えつ、とおどろくおれをそのままに、彼女は席から立ち上がった。
前かがみになつて、おれの耳元に口を寄せる。

「お兄ちゃんが本気になつたら、どんな女の子だつて彼女にできます」

ほんとにふかい意味はないんですよ？ とダメ押しして、彼女は電
車をおりた。



あの校長よお、高校生にお年玉をムダづかいするなどかフツー言う
かあ？ とグチる児玉こだまをふりきつて、おれは部活に急いでいた。

終業式も終わつて、明日から冬休み。もつといえ巴明日はクリスマ
スイブ。

「おろつ？ 正、勇ちゃんといつしょじやないの？」

「あいつはバドミントン部だろ」

にかつ、と笑う背のひくいツインテ女子。

同じ演劇部で元カノの片切かたぎりだ。

「さつ、いこーよ。ん？ どうしたの？ 名残りおしそうに校舎のほ
うを見ちやつて」

「いや……」

ほんとは、あいつに一声ひとごえかけたかつた。

まず「ごめん」からスタートして、関係を元どおりに直したかつたんだ。

「ほれほれ」

腕を両手でつかまれ、片切はおれの体をひっぱる。いつかのように、彼女のひかえめなふくらみが何度も腕に当たつてきた。わかつたよ、といつしょにバスに乗りこんだ。学校の正門の近くにとまっている、遠足のときに乗るような大型のバスだ。

乗っているのは、演劇部のみんな。

これからとなりの街の大きなホールに移動する。

「えー、じゃみんな、いいかい？ これから明日の公演のゲネプロをして……」

バスの中で、バスガイドさんがいるような位置に立つて、部長が説明している。

横にいる片切に小声で質問。

「ゲネプロって何？」

「通し稽古。^{げいこ} 演目を、最初から最後までやるんだよ」

「へー」

そして目的のホールに到着した。

「うわあ……すつごーい！」

片切が感動したような声をだす。

その声にめっちゃエコーがかかった。

おれも感動……つていうか、びっくりしてる。

あらかじめ客席の数は800つて聞いていて、有名なコンサート会場が一万とか二万とかだから、そんなに大したことないんじゃないかなと内心ではタカをくくつていた。

が、甘かつた。

舞台も、舞台からのこの客席の景色も、とほうもなくデカい。

「こんなところで一人で演^やれとか言われたら、私なら逃げるね」

「おれも、逃げたくなってきたよ」

ぱん、とおれと片切が同時に、丸めた台本で頭をたたかれた。「弱気にならない。とくに正ちゃん、そんなことはどうするさ？」

「部長」

赤いアンダーリムのメガネを、くいつ、と親指のハラあたりで押し上げた。

「私の見立てにまちがいはない！ 正ちゃんならきつといい芝居ができる！ ね？ あ、そうそう。忘れないうちに言つとかないと」スマホをだして、と言われた。

なにかデータを飛ばしたようだ。

「ほい、これ電子チケットだよ。片切は2人分ね。正ちゃんは、一人芝居の大役たいやくがあるからフンパツしといたゾ」

と、なんとおれにくれたチケットは、13人分！

そこから部長が集合をかけて、ゲネプロつていうのに入った。

みんなでやる劇では、おれの出番はない。

で、ながい劇が終わつて、やつとおれの出番かと思つたら――「正ちゃんは立ち位置のチエックだけでいーから。あとは本番まで、とつておこう！」

おい、まじか。

大筋おおすじからセリフから、ぶつつけ本番つてこと？

んー……さすがにやばくないか、それは。

そこからおれは、ずっと考え方をしてた。あの片切でさえ話しかけてこなかつたから、よつほど声をかけづらい雰囲気が出てたんだろう。

（悩みはまだある。電子チケットで、13人をホールに招待できるみたいだけど）

なんの偶然なのか、おれの元カノの数と……いやちがうな、おれをフツた女の子の数とぴつたりだ。

まず……父さんたちは予定があるつて言つてたからダメだ。ばあちゃんもまだ体調がよくなくて入院中だし、ほかの親戚の人とかに、おれなんかがいきなり「劇に招待したい」つて言つても迷惑かもしない。

じや、やつぱり元カノのセンしかないな。数が合つてるのも、きっと何かのエンだ。

(しつこいな。知らない番号から何度も)

駅前のファストフードのお店に入つてチケットの送り先を考えこんでいるんだが、考えを中断するようにスマホに着信がきてる。何回めかで、とうとうおれは出た。

「……もしもし」

「あーっ!!」

大音量。

思わず耳からスマホを遠ざけた。

「おそいよー！ 正クン、もつと早く出てよー！」

「え？ もしかして、朝比さん？」

予想外の相手。

おれが人生ではじめて告白してつきあつた、初カノだ。

どうして番号が……あ、そういうえば勇^{ゆう}が彼女の連絡先を削除＆ブロッケしたんだつた。

「友だちのヤツからかけてるの。番号とかメアドとかはまた送れるから、とりまブロックをとっぱらつてよ」

迷つたが、ここまでしてくれた彼女に対しても失礼か。

おれは言われたとおりにした。

さつそくラインが飛んでくる。

「ごめんね」

「えつ？ なにが？」

「こつちもガマンするから正クンに彼氏やつてよつて話。反省して
る」

「気にしてないよ。それより元気だつた？」
「なかなか返信がこない。

あれ？ われなんかへんなことを書いたか……？

「あの車持ちの彼氏とは、とつくに破局。あーあ」
また、長めの間^まがあつて、

「いないね、ほんと。正クンみたいな男の子つて
「イケメンだからね」と、冗談のつもりで送る。

「ちがうちがう。そうじやなくつて、ハートの話。いまさ、元気だつた

？ つて聞かれたとき……正直、ジワつときたんだよね。私、あんなにひどいことしたのに」

そこから学校の話や冬休みの話とか、あたりさわりのないラリーがあつた。

ラリーの終わりぎわ、

「明日、おれ一人だけで芝居するんだ」と伝えて、電子チケットをおくつた。

絶対いくよ、と朝比さんは即答してくれた。

そのいきおいで、残りの11枚も、一気に元カノにおくつた。

残るは1枚。

元カノの中に同じ演劇部の片切がいるから、この余分ができた。これを渡す相手は……勇だ。

(すっかり暗くなつたな。雪までふつてるし)

外に出ると、小さなつぶの粉雪が顔にあたつた。量は少ないから、たぶんつもらない。今だけの、ちょっととした雪だろう。

あー寒い。

肩をすくめて歩き続けて、やつと家が近づいてきた。

あれ？

勇か？ どうしたんだ、家の前にぽつんと立つて。

「正」

赤いダウンジャケットを着た人影が、うざいた。小走りでおれのほうにやつてくる。

理解が追いつかない。

てつきり勇だと思つていたのに。だつて——髪がショートだから。

「うそだろ！ 星乃さん、どうしたのその髪は!?」

「切りました」

「え……」

あんなに長かつた髪の毛がない。
みじかくなつていて。

勇と同じくらいに。

「そんな顔しないでください。正が、ショートが好きっていうから
勇と同じくらいに。
……」

まっすぐ見つめ合うおれたち。

彼女のうるんだ片目から涙がこぼれた。

「ひきました？ そ、そうですよね……こんなことされるのって、重い
ですよね……」

白状すれば、ひいた。

でもそれ以上に、ここまでしてくれた彼女のことが愛おしい。

おれは翔を抱きしめた。

「あ……」

「……その髪、とても似合つてる」

「うん……」

「翔はすごいよ。ストレートで行動力があつて……たしかにちょっと
と、重いとは思うけど」

くすつ、と彼女がおれの胸の中で笑った。

「あなたの彼女にしてくれますか？」

両肩をやさしくつかんで、慎重に、ゆっくりと自分の体から翔をは
なしていく。

彼女と目と目を合わせて、言つた。

「お願いがあるんだ」

「お願い？」

「明日、おれの〈告白〉を聞き届けてほしい。それがおれの……答えだ
から」

クリスマス公演のチケットのラスト一枚。

おれはそれを、幼なじみの勇ではなく、彼女におくつた。

12月24日

カーテンの向こうは、まだ暗い。

デジタルの目覚まし時計をみると〈4：44〉。おいおい……めつちや不吉な数字じゃないか。

ちよつと早く起きすぎたみたいだ。

と言つて、二度寝もできそうにないし。

(勇の夢を見てた気がするな——おぼえてないけど)

とりあえず起きて、朝食の時間まで勉強することにした。

「アンタ、中身がスッカスカじやん」

はは……いつだつたか、あいつにそんなことを言われたつけ。また同じことを言われないように、少しほは努力しないとな。

こんな、みんなが寝静まつてゐる時間帯に机に向かうなんて、久しごりだ。

たぶん高校受験のとき以来だな。

「うつそ！」

と、当時の勇はおどろいた。

担任も、あまり態度には出さなかつたけど、おどろいた。父さんは「そうか」つて言つて、おどろきはしなかつた。勇が「バドミントン部が強いから」という理由でえらんだ、偏差値がちよつとだけ高めの高校。

おれもそこに、進学することにしたんだ。

おれの成績では合格なんて絶対にムリだつて言われたところに。

「信じらんない！ やつたじやん、正！」

合格発表の日。

ハードな勉強の日々の反動で、体調をくずしていたおれに満面の笑みで報告しにきたあいつ。

「マークシートの神様が、おりてきたんだな」と、ベッドに寝そべったままでおれは言つたんだ。

そしたら、すぐに、

「バカ！ 私のおかげでしょっ！」

大声でどなられた。

でも大声だけど、かすかにふるえているような、微妙な感じ。
おいおい。

たしかにおまえに勉強とか試験の対策を教えてもらつたりしたけど、おれの努力を認めてくれたつて……と、寝たまんまで抗議の視線を向けたら、勇の目がうるんでいたのが見えて、何も言えなくなつた。

(おまえのおかげだよ)

実力でもラツキーでもどつちでもいい。

とにかくおれは、おまえと同じ高校がよかつたんだ。

ここでもう、答えは出でた。

何も迷うことなく、ためらわらず、こわがらず、おれから告白できていれば――

「あ」

「……おはよ」

リビングで朝食をとつていると、勇が起きてきた。

グレーのパーカーに下はショートパンツ。パーカーの丈^{だけ}が長いのか、ショーパンの丈が短いせいか、下になにもはいていないように見えてしまう。

「おはよう。早いな」

「アンタこそ」

今日、祝日じゃないけど、たまたま家族全員ここにいる。

だから切り出しにくい。

いきなり「ごめん」とか言いだしたら、いったい何事がと思われてしまふ。

まずは様子見か。^{ようすみ}

「クリスマスだな」

「そうだね」

「おつ。ほら、天気予報が今日は〈くもり〉だつてさ。で、夜に雪がふるかもつて言つてるぞ」

「ふーん」

「ドキドキしないか?」

「ホワイトクリスマス?」勇は窓のほうへ視線を向けた。「バカみたい……」

バカつてなんだよ、つておれは反論する気マンマンだつたんだが、父さんにクリスマス公演の話をふられてしまった。

がんばれよ、と応援されて、勇のお母さんもエールをくれる。

明日、ホールの上演を録画した動画を家族みんなで見よう、という話になつたとき、勇はもうそこにいなかつた。

(おれを避けてるのか?)

だとしたら、強引にあいつの部屋に押しかけるのも考え方のだ。悩む。

緊張もしてきた。

あの大きなホールでたつた一人で舞台に……ナルシストだから「おれをみてくれ!」つていう気持ちはそこそこあるものの、視線の数がケタちがいだ。それに、お客さんは演劇がみたいのであつて〈おれ〉が目的じやない。中には観劇のベテランだつているだろう。演劇部のみんなも期待していると思う。ハードルはかなり高いところにあり、おれはそれを越えなければならぬ。

(今さら演技のテクニックとか知つたつて、つけ焼き刃^はだしな……どうしたらいいんだ)

そんな緊張を、ときほぐしてくれるヤツらがきた。

「うえーい」

ラインがきて、玄関のドアをあけると児玉こだまがいた。黄色いダウンコートをラツパームたいに着こなしてゐる。

「わるいな、急におしかけて」

紺野こんのもいる。こつちはシックな黒のロングコート。

まあ上がつてくれよ、とおれは二人を自分の部屋にあげた。時刻は〈10：00〉ぴつたり。

「どうしたんだ？ おれ……今日は遊びとか合コンはいけないぞ？」

「わーーーつてるよ！」児玉があぐらをかいたまま、指をパチンと鳴らす。「打ち入りだべ。打ち入り」

「うちいりつて……武士が剣もつてやるやつか？」

「それは赤穂浪士あこうろうしだな」と紺野が冷静につつこむ。「カズが言つてゐるのは、打ち上げの逆の、これから何かをするぞつてときみんなでやる飲み会のことさ」

「飲みつて……べつに力たいこと言うつもりはないけど、今日はちよつとな……」

「知つてるぜい。じゃーん」と、児玉が袋から何か出す。「これなら、ちよつとはアガるつしょ？」

シャンパン？ いや、これはシャンメリだ。

「おれもカズも用事があつて長居ながいはできないが、せめて祝わせてくれ」

「紺野……」

「そーだつつーの。ショーの記念すべき初主演の舞台なんだろう？」

「児玉」

こいつは紺野より、つきあいが一年長い。

中学からの友だちも知り合いも一人もいなかつたおれに「おめ一カツコいいじyan」と、声をかけてきた出席番号がひとつ前の男。それが児玉だった。

がしつ、と無言で握手する。

女グセがわるいとか浮気っぽいとかで女子からの悪評あくひょうは絶えないが、こんなふうに友情にアツい、いいヤツなんだ。

紺野とも握手したあとで、おれは言つた。

「二人とも、ありがとな。でも、わるいけどシャンメリはやめとくよ」

「へつ？ 正、これキラいなん？」と、児玉がビンを持ち上げて言う。

「うーん……これ飲むと、あとで少し目がはれたりするだろ？ ちょっと充血じゅうけつしたりとか」

「までよ、正。ひよつとしてアルコールとカンちがいしてないか？ これはシャンパンの雰囲気を楽しむだけの、ただのジュースだぞ？」
「ジュースなのは知ってるよ。成分なんか材料なんかは知らないけど、前に勇がそうなつたからさ……」

児玉と紺野が、おたがいにキヨトンとした顔で見合っている。

何秒かしたあとで、紺野が質問してきた。

「…………それって、いつの話だ？」

「おれにはじめての彼女ができるて、あいつが祝ってくれたときだよ」
先に紺野がニヤツ、おくれて児玉がニヤア、という表情になつた。
なんだ？

二人とも「そういうことか」って言いたげな顔してるけど……

「正。幼なじみを大事にしろよ」

「え？ おい紺野、どういうことだよ」

「あーあ、一気に食欲なくなつたわ。ポテチ一枚も入らねー。ごちそ
うさん、だぜ……まつたく」

「説明しろつて、児玉」

結局、大事なところはハグらかされてしまう。

そこから二時間ぐらい学校の休み時間みたいなおしゃべりをして、
あいつらは帰つていつた。

帰りぎわに玄関で、

「そういうえば優ゆうのヤツが言つてたな。彼氏とクリスマスの予定でモメ
たつて」

と言われて、おれはすぐにモメたわけがわかつた。

「あつ！ それ、おれのせいだ」

紺野の妹の優ちゃんに、今日の公演のチケットをおくつたことを伝
える。

「なるほど、正が招待したのか。それで昨日、ホールの場所を知つてる
かおれに聞いてきたんだな」

「場所を？」つてことは、優ちゃんは来てくれるつてことか？」

「だろうな」

「……彼氏にわるいことしたな」

「気にしなくていいさ。彼氏のほうには、おれからうまく言つておくよ」

家の前に立つて、二人を見送つた。

ふう……。

あいつら、これから彼女とデートなんだよな……うらやましいよ。リビングでかるく昼食をとつて部屋にもどると〈13:00〉。もうこんな時間か。

クリスマス公演の開始は18時で、現地集合の時間は16時。そろそろ出かける準備をしなければいけない。

おれは早歩きで、勇の部屋にいった。

（反応がない……。ムシしてゐるつていうより——）

やつぱり。

ドアをあけて中をのぞくと、部屋はカーテンがしめられていて暗かつた。無人だ。昼食のとき、家のドアを開け閉めする音がしたみたいだつたけど、やつぱりあのときに勇は外出していたんだ。出かけるね、ぐらい言つてくれよ……。

（プリンでも買いにコンビニでも行つたか？　いや、そういうえば）

クリスマスイブの予定について、まえに勇が何か言つていた。

ふいに窓の外から、うるさい音。バイクの音だ。

バイク……

（勇!!）

カーテンをあけて、窓もあけて外を見る。

やはり、乗つているのは星乃丈。

家の前の道を、さつそと、横切るように走つてゆく。

白いダッフルコートを着た女の子と二人で。

「勇——つ!!」

おれは叫んだ。

届いたのかどうか、一瞬、赤いバイクのうしろに乗る勇の頭がこつ

ちに向いた。

もう追いかけたって、どうにもならない。

体がボロボロになつても、あいつらを追いかけたい気分だが

……

(くつ!)

床にくずれるように座りこんで、力任せにクツショーンをたたいた。

おれは、何をやつてるんだ。

情けない。

いくらでも、あやまれるタイミングはあつただろ?

幼なじみだからって、その関係性に甘えていたんじゃないのか?
おれを本当に嫌いになるはずがない、おれを裏切ることはないと
つて一人で勝手に思いこんで。

(おちつけ)

こんなんじや、今日呼んだ元カノ全員をウンザリさせてしまう。

もちろん翔も。

おれは、立たなきやいけない。

このあと大事な〈告白〉があるんだ。

(……ん?)

立つとき、勇のクローゼットが目にとまつた。両開きの真ん中のところから、服がすこし外にはみ出している。
直してやるかと、そこをあけると、

(子供服?)

どう考へても勇じや着れないサイズの服だった。

赤い服。

赤い……までよ……

「あら? どうしたの正ちゃん。勇の部屋で」

あけたままのドアの近くから、おれに声がかけられた。

「お母さん!」おれは服を手にしたまま、母親に詰め寄つた。「これ
……の服は、勇のですよね?」

「もちろんよ。おぼえてない? むかし、勇はよくこの服を着ていた
の」

お母さんが、ぱちっ、とウインクした。

「それにね……勇が、正ちゃんとはじめて出会ったとき着てた服で
もあるのよ」

「はじめて出会ったとき、ですか？」

「その服で、二階にいた正ちゃんを見上げたんだって」

!!

思い出した！

そうだ！ たしかに、そうだった！ 二階から、あいつを見た！
お母さんに服を手渡して、あわてて部屋にもどる。
(やつぱり。あの場所だ。あそこに翔が立っていた。子どものころの
勇と、まったく同じところに――)

だからあの〈見つめ合い〉は特別だったんだ。

勇とも、〈見つめ合つた〉ことがあったから。

おれが一目ぼれしたように感じたのは……翔だからということだけじやなく……遠い記憶の勇がそこにいたせいでもあつたのか。

スマホを手にとつた。

勇にメールする。

「きてくれ」と言いたい気持ちをぐつこらえて、ただ公演の時間と場所だけを送つた。

「正。そろそろだよ」

かたぎり
片切かたぎりが耳元でささやく。

出番のときがきた。

舞台の上に、たつた一つのスポットライトが明るく照らされてい
る。

そして、正しくなれる

はじめて辞書を引いた言葉を、今でもおぼえている。

それは「眉目秀麗」。

父さんの兄さんのオジサンに「ビモクシユーレーだな」って会ったびに言われて、まずその音が耳に焼きついた。

意味を知つてからは、そう言つてもらおうとオジサンの前でキリツとした顔をするようになった。

それがたぶん、おれのカツコつけ——もしくはナルシスト——のはじまりだ。

(ついにきたか)

大舞台。

ひとつ前の演劇の途中、チラチラと舞台のそでから客席のほうを見てみたけど、ひとりも元カノは見つけられなかつた。もしかしたら、誰も来てくれてないのかもしれない。まあ……しようがないよな。おれ、その全員にフラれてるわけだし。

しかも今日は、クリスマスイブだ。

やつぱり招待なんかするんじゃなかつた。即決^{そっけつ}で行かないと決めた子だつたらまだしも、もし、チケットを送られたこと自体^{あやま}がイヤだつたり、どうしようとナヤませてしまつた子がいるのなら、謝りたい。

本当に、おれはいつだつて自分のことしか考えてない、半人前だ。変わりたい。もつと成長したい。

あいつのためにも。

この一人芝居を演じ切つたら、おれは……

(よし。いこう)

舞台のそでから、スポットライトで照らされていいるところまで、ゆっくり歩いていく。

衣装は、ふだんどおりの学生服。髪型もいつもと同じ。

革靴の底をキュッと鳴らして、おれは客席のほうへ向いた。

「え、えーと……」

光はスポットライトだけで、お客様はほぼ見えない。
だから、わからない。

この中に12人の元カノがいるのかも、翔がいるのかも、勇がいるのかも。

「えー……」

まずい。

観てゐる人たちが、ざわざわしはじめている。

頭が真っ白になつた。

何もできない。

そうだよ。

おれは、13人の女の子に愛想あいそをつかされた男なんだ。

そりや、何もできないさ。

そもそもセリフがでてこない。

じやあ、こんなところに棒立ちになつて、なにをしてるんだ?

今この瞬間にも、勇は丈じょうの彼女になろうとしてるかも知れないのに。

「あ……その、えつと……」

もうダメだ。

やめたい、はやく舞台をおりたい、そんな弱音を心で口にしたとき

なにやつてんのよつ

バドミントンのラケットで、ハ工たたきのように頭をたたかれた——
——気がした。

びっくりして舞台の上を見回したが、当然、誰もそこにいない。いるのはおれ一人。

? なんだつたんだ?

でも、気持ちが、一気にラクになつたよ。
あらためて正面を向く。

「今からするのは、芝居じゃないんです。ただ、おれが、正直に話すつていうだけ……。

最後まで聞いてくれると、うれしいです。

おれには好きな人がいます。

その……好きな人の話をする前に、おれは13人の女の子にフラれてます。

13人とか言うとめっちゃリア充で、モテモテで、どうしようもない女つたらしみたいですけど、なんて言つたらいいか、ぶつちやけると……女の子に対しても<したい>って思うことができる前に関係が終わつてますから、べつにジマンでもなんでもありません。

はつきり言うと、おれエツチとかしたことないんですけど。キスも。はは……舞台の上で言うことじゃないですね、これ。バカだよな……。

それで、ちょっと、おれ最近気づいたことがあるんです。
つていうのは——おれは、その13人の女の子の中の<好きな人>をさがしてたんじやないか、つていうことなんです。

言いまちがえてないです。

中に、じやなくて、中の。

おれは、つきあつた女の子の中の<好きな人>を求めてたみたいなんです。

個性の一部——というか。

カケラつていえばいいのかな。

たとえば、ある女の子は努力家だつたり、ある女の子は妹っぽいかわいさがあつたり、ある女の子は単純に外見が似てたり、ある女の子は誰からも好かれる性格だつたり……みたいな感じで。

それをですね……そのカケラを13コ集めて、ぎゅーーーつてしたら<好きな人>ができるんじやないか、つてヘンなことを考えちゃいました。

つまり13……いや、12人の女の子に告白するつていう、ずいぶん遠回りをしちゃつたんですよ。

彼女は幼なじみで、おれ、小さいころから知つてます。

明るくて、活発で、スポーツがてきて、家族みたいになんでも話せる存在で。

告白します。

おれは

観客は、静まり返っている。

「あいつのことが好きで好きでたまらないのに、ふつうの幼なじみみすこし目がなれて、暗い中に座っている人たちの影がぼんやり見えはじめてきた。

「あいつのことが好きで好きでたまらないのに、ふつうの幼なじみみたいな演技を、おれ……ずっとしてたんです」

想いを言葉にした瞬間、胸がいっぱいになつて、そこから何も言えなくなつた。

「…………」

突然どこかで、ざわつ、とどよめいた。
誰か一人、いきなり席を立つたようだ。

「——ウソですっ！」

この声は翔しょうだ。

右側の客席の真ん中あたり。

片手を胸にあてている。その手が、着ているセーターをぎりしめているのがわかる。

「ウソつて言つてください!! お願い! 正! その子に負けないぐらいい、私だつて」

おれのほうへ来ようとしている。

今翔は、あきらかに冷静じやない。
とめないと、と一步ふみだしたと同時に

「なんですか、あなたは! どいてください!」

「悪いが、ここは通行止めだ。よそへ行け」

「なつ……!」

顔も体も舞台こつちに向けて腕を組み、通せんぼするように堂々と立つあの姿。

あれは三年の先輩の水緒みおさんだ。おれの招待を受けて、わざわざ来てくれたのか?

翔はあきらめて、こんどは水緒さんが立っていないほうから通路に出ようとする。

「こつちもダメ。なんなら超高校級の水泳部の女と、力くらべしてみる?」

水泳部……？ あつ、望海のぞみだ、あれはノゾミちゃんだ。

翔は彼女たちに、両サイドをはさまれている。通路に出ることもできなきない。

「ど、どいて……っ！」

「小波久が好きなら、わかるはずだ」ノゾミちゃんにつかみかかる翔の背後から、水緒さんが声をかける。「芝居の邪魔をするな。そして、あいつはこれから舞台を飛び出して、真実の〈告白〉をしに行くんだよ」

「何……？ いつたい何を言っているんですか！」

翔が肩ごしに水緒さんを見る。

感情むき出しの、するどい眼。

それを受け流すように、水緒さんの口調はとてもおだやかだ。

「その〈告白〉を心から望み、ただ見守る……それが、小波久正という男を好きになつた女たち全員の総意そういだと私は思つていて」

いつのまにか客席のバラバラの位置で、何人かが立ち上がつていた。

不思議と、数えなくても、その数がわかる。

右半分に6人、左半分に6人。

みんな、思い思いの立ち姿で、おれのほうに顔を向けている。舞台のそでからも、片切かたぎりがじつと見てている。

(さあ！)

と、彼女たちに応援されているようだつた。待たれている。期待されている。

でも、どこに行けばいいのかわからぬ。でも、少なくともここに勇はないんだ。さがそう。

くたびれてヘトヘトになるまで。

「……みなさん、すいません。

聞いてくれて、ありがとうございました。

じゃあ、おれ行きます。
行つてきます。

あいつに……勇に……告白してきます!!!

舞台をジャンプでおりて、階段みたいになつて客席の通路を駆け抜ける。

出るとき、近くの席で立つていた塔崎さんが、コクツと力強くうなずいてくれた。

出口の扉がしまる寸前、かすかに手をたたく音が——いや、まさかな。こんな芝居でもなんでもないモノに、拍手なんかもらえないって……。

(雪?)

顔に冷たい何かがあたつた気がした。

でもあたりを見回しても、何もふつていない。

冷たい空氣。すこし風も強い。

大きなホールのエントランスを出て、その前に広がる場所にいる。地面は一面の赤レンガで、あたたかい色の光でライトアップされている。中央には小さなクリスマスツリー。

「ちつ。出てきやがったか」

その声にふりかえると、やつぱり丈だった。

おれは、つかみかかるぐらいの勢いで彼に近づく。

丈のすこしニヤけた表情を見れば見るほど、どんどん胸がチリついていく。

「勇はどうだ? いつしょに……いたんじやないのか?」

こぶしを握りしめる。

もしかしたら、おれは生まれてはじめて、本気のケンカをするかもしない。

「までまで。熱くなるな。まず、オレに礼をいえ」

「礼……?」

黒い革かわジャンに、下も黒い革のパンツ。

首先に、赤いマフラーがわずかにのぞいている。タイトに巻いて、

大部分を革ジャンの中にもぐりこませていた。

「正！」

この声は……。

「待つてくださいっ！」

翔だ。

おれのあとを追つて、エントランスから出てきた。一直線にこつちに来る。

「……礼つていうのはな、ここまで勇をつれてきたことだ」

丈がおれの肩に手をおく。
「心配しなくてもあいつは近くにいる。が、その前に、オマエはおれの妹に言うことがあるだろ？」

「そうだな……」

赤いセーターに、チョコレート色のスリムなパンツ。
黒髪ショートに、きれいすぎる顔立ち。

本当に、おれにはもつたない女の子だ。

急に走つて乱れた彼女の息が整^{ととの}うのを待つて、おれは言つた。

「翔。ありがとう」

「えっ……」

「こんな中身ゼロの男を好きになつてくれて、『つきあいませんか』まで言つてくれて、みじかい間だつたけど、翔みたいな女の子の彼氏気分を味わえて、いい思い出になつたよ」

「…………それ、演技ですよね？　まだ演技してるんですよね？　ほんとじゃないんですよね？」

「もうおれは演技してない。これから勇に告白するんだ」

「正」

「ごめん。おれが、はつきりしない態度をとり続けたことも、よくなかつた」

きをつけの姿勢で、彼女に頭を下げた。

「翔とはつきあえない」

だまつて地面をみつめる。

翔が何か言つてくれるまで、頭を下げつづけようと決めた。

「おい」

丈の声。

「こいつはこいっなりに、ちゃんとセイイつてのをみせてる。なんか
言つてやれよ」

「お兄ちゃん……」

「あーあー、そんな顔すんなつて」少し声が出る位置が低く、おれの耳
に近くなり——「もういいよ。頭をあげろ。妹にかわって、オレが許
可してやつから」

目の前には、翔の両肩をやさしく支える、兄の姿があつた。
「正。ハンパな断り方をしやがつたらタダじゃおかなかつたが……
ま、合格だ」

「おつ……お兄ちやーーーん!!」

「泣くなつて。なつ？　ずっと乗りたがつてたバイクのうしろに乗つ
けてやるから」

胸に顔をうずめて泣く翔の頭をなでてやりながら、おれと目を合わ
せる。

「オマエは幸せモンだよ」

「え？」

「こーんな超絶かわいい妹と、勇のハートまで持つていっちまうんだ
から」

「丈。勇は……」

無言で指をさした。

そつちを見ると、飾り付けされたツリーにかくれるように、静かに
立つて いる姿。

「オレはマジだつた。マジで、日付をこえるまでは勇を手放す気はな
かつたんだ……」

横顔を向けて話す丈とおれの間に、小さくて白いものが流れた。

雪だ。雪がふってきた。

「押し切られたよ。オレの革ジャンを両手でつかんで『いつて！』つてな。で、『チケットがないから』つて、あそこで待ちつづけてる。はやくいってやれ」

丈は、わしやつ、と自分で自分の髪をさわった。

両目が前髪でかくれて、ニッ、と片方の口角があがる。

「正。前に言つたの、訂正するぜ。やっぱり恋に早いモン勝ちはある。まつたく計算外さ……好きになつた女に、オマエみたいな幼なじみがいたなんてな」

丈が背中を向けた。

翔も、もう話しかけてくる様子はない。

それより——おれも行かないと。

ぴん、と緊張してきた。自然と背筋がのびる。

一步一歩、あいつとの距離が縮ちぢまる。

クリスマスツリーのそばに立つ、真っ白なダッフルコート。待ちきれず、ずいぶん手前でおれは、

「勇！」

と声をかけた。

ん？　とツリーの奥の人影がうごく。

「好きだつ！」

フライング気味に、おれはコクつた。

そんなにたくさんいるわけじゃないけど、まわりを歩く人たちから注目される。

勇は少し、首をかしげるアクション。

あれ？　聞こえなかつたのか？

「勇」

「劇、終わつた？」

「ああ。いや……」

「このツリー、ちょっとちつちやくない？」せいくら背比べのときみみたいな手を、自分の頭のてつぺんと、真横にあるツリーにあてる。「だいたい二メートルくらいかな？」

「勇」

「もつとおつきくたつて、いいよね？ そう思わない？ サイズが微妙だからさ、写真とつてく人もあまりいないみたい」

「おれ……勇のことが好きなんだ」

「私も好きだよ」

まるで朝のアイサツみたいに、勇は言う。

……ん？

なんか、おかしくないか？

告白つて、こんなんだつけ？

「どうしたの？ 私の顔、じーっと見ちゃつて」

「勇。聞いてくれ。おれずっと演技してたんだ」

「演技つて？」

「おまえが好きなのに、好きじゃない……っていうか、ただの幼なじみを演じてた」

「そんなの――おたがいさまでしょ？」

えつ。

それつて、どういう……

「ほめてよ、私の名演技。ずつとずつと、ずーーーーーーーと、ただの幼なじみをやつてたんだからね？」

おれは、そんなことを笑顔で言つた勇に、心も体も引き寄せられた。正しい恋はここにあつた。

勇を抱きしめる……

「つ！ ちよつと！ やめて。恋人同士みたいじゃない」

……つもりだつたが、寸前で両手パーで押し返され、体を離^{はな}されてしまつた。

「冷たつ！ もく、雪が目に入っちゃつたし」

「おれのせいじやないだろ」

「雪が……」

人差し指を曲げて、目の下にあてている。

顔は、下に向けて。

「勇。あまり、こすつたりしないほうがいいぞ」

「ちがう、バカ！」

「え？」

「フツーわかるでしょ？」

「いや……雪が目に入つたんだろ?」

「そういうとこなのよ」

そう言つて、20センチ背の高いおれの顔を見上げてくる。

「ニブいつていうか、想像力がないっていうか、ウソを見抜けないって
いうか、疑うことを知らないっていうか――」

勇の瞳ひとみがキラキラ光っている。

「そんな正が、大好き……」

目をつむつた。

さすがに、この意味がわからないほどニブくはない。

キスした。

あまり長いのはわるいかなと思つて、1、2つて頭で数えて、3秒
でやめる。

目を開ける勇。

「……ほかの女の子にも、そうやつてキスしたの?」

「しないよ。だつて、はじめて――」

おれはバランスをくずして、倒れそうになった。

「絶対そうだと思つた!! 信じてたんだから!!」

思いつきり、抱きつかれている。

首のうしろに両手を回していて、しかもそこから、足を浮かせてグ

ルグル回ろうとしてる。

いや……ム、ムリだつて……。

おれはひざをついた。

ほつぺにほつぺをくつづけてきて、勇が耳元でささやく。

「やつと恋人同士になれたね」

「ああ」
ビュツと強い風がふいて、夜空に吸い込まれるように、白い雪が高く舞い上がつていった。



昔のことを思い出している。
あの日のことを。

あの日から、おれと勇の新しい関係がはじまつたんだ。
幼なじみでも妹でもない——つていうか、幼なじみで妹つていうところに、一つプラスされた。
彼氏彼女の間柄あいだがらになつた。

実家の自分の部屋の窓から、外を見下ろす。

誰もいない。真冬の季節だしな。

ちようどあの場所に、星乃さんが立つていたんだ。

今は女子大に進学して、彼女もおれと同じように家を出たらしい。
丈ももう、家にはいない。外国へ行つた。たまに「正もこつちに来いよ」と、あいつらしいメールが届いている。あの日から高校を卒業するまでの間に、おれたちは親友になつていた。こだま児玉や紺野ともウマが合つて、4人でよくツルんだんだ。ちなみに、あいつが暴力事件を起こして転校してきたっていうウワサは、根も葉もない真つ赤なウソだつた。

(つて、丈からメールか？　すごいタイミングだな)

みじかい内容。

勇がフリーになつたら即連絡しろ、つてまた勝手なことを……。
おまえこそ、こつちが恋しくなつて帰国したら即連絡よこせよ、つてメールを返しておいた。

あいつは恩人だ。

丈がいなければ、たぶん、おれたちが幼なじみの関係から進むことはなかつただろう。

……つて、そんなこともないか？　持ち上げすぎかもな。

(またか。こんどは……)

スマホの画面を見る。

勇の〈彼氏〉を演じていた、外井くんからのラインだ。

「ドラマみました。やっぱ、小波久くんはかつこいいですね。光つてました」

「ありがとう。でも、まだまだ未熟だから、もつとがんばるよ」

親指をたてたイラストのスタンプが返ってくる。

相変わらず、いいヤツだな。

こんないいヤツを……勇が〈彼氏〉にして巻き込んでしまったことが、ほんとに申し訳ない。

聞けば、勇は〈おれのため〉に外井くんとつきあつたフリをしたらしい。

おれが中学のときも、高校に上がつてからも、誰ともつきあおうとしないのが〈自分のせい〉だつて、あいつはカンちがいしてたみたいなんだ。

勇にエンリヨして、おれが女子とつきあおうとしない——だつたら、自分が男子とつきあつてるつてことにすれば、正も女の子と自由に恋愛するだろう——そんな考えだつたらしい。

今となつては、笑い話だ。

よくそのネタで、勇をからかつてる。

たぶん、今日も……

「あーっ!!」

部屋のドアがあいた。

「玄関にクツがあつたから、もしかしたらと思つたけど……」

「うん。久しぶりだな」

ぎゅつ、とハグし合つたあとで、まっすぐ見つめる。

「勇。大事な話があるんだ」

「えつ。な、なによ……真剣な顔しちやつて……それにそのスースは何? サラリーマンにでも転職する気になつた?」

「おれと結婚してくれ」

「えーーーーーーー!!」

部屋に勇の声がひびいた。

あの日から恋人になつたおれたちは、その週末に、ばあちゃんに会

いに行つた。

で、報告したんだ。つきあうことにしてたよ、つて。
ばあちゃんは涙を流してよろこんでくれた。

そしてここからが大事な点だ。

ばあちゃんの体が、みるみる良くなつていったんだ。お医者さんも
おどろくほどに。

おれは詳しいことはわからないけど、気持ちがポジティブになつたら、体のわるいものが小さくなつたり無くなつたりすることがあるらしい。

ずいぶん顔色も良くなつて、ばあちゃんは「100まで生きるからね」と、今でも元気いっぱいだ。

「ダメか？」

「ダメじゃないけど……私まだ大学生だし……」

「これ、指輪」

「バカ。そんな、あつさりと渡していいもんじゃないでしょ！」

と、抱きついてくる。

はゞみで、指輪のケースを床に落としてしまつた。
たぶん指輪も約束も、おれたちには必要ないんだ。
「ねえ正……私たちみたいな、連れ子同士が結婚できるかどうか、知つ
てる？」

至近距離でおれを見上げながら勇が問い合わせた。

「知つてるよ」

「……そつか、それぐらい、あらかじめ調べてるよね
「おまえも知つてただろ？」

勇の顔が赤くなつた。

赤くなつた理由は、勇と、おれだけが知つている。

〔完〕